者連と同室するのを迷惑さうにブツサ叱言を云つてゐた。

百姓達は宛も大難を逃れた人のやうな心持がして、漸つと安心して大喜びで肩から重い袋を卸して腰掛の下へ押込んだ。

タラスへ話しに來た植木屋は自分の席へ歸つて了つたので、タラスの相對と隣席とに三ツの空席が出來た。三人の勞働者は得たり賢こしと其空席を占めた處へ、ネフリユードフが紳士風の服裝をして來たので、百姓達は吃驚仰天して周章てゝ退かうとすると、ネフリユードフは退くに及ばぬと止めて、車の中央から奥へ寄つた通行路の横手のベンチの肱掛に腰を掛けた。

一人の五十恰好の勞働者は此體を見て若い男と顏を見合はし、吃驚を通り越して恐かなく思つた。總體世間の紳士は何かにつけては勞働者を叱るのを商賣同樣に心得てゐるゆゑ、渠等も叱られるのに馴れて一向苦にしないから、ネフリユードフが案に相違して、叱る處か却て席を讓つて呉れたのを吃驚してモジモジしながら、却て飛んだ事になりはすまいかと後難を恐れて氣味を惡るがつた。

が、ネフリユードフが頗る氣輕にタラスと打解けて話してゐるのを見ると直ぐ、何も其樣な下心がある仔細でないのが解つたから安心し、若い者を袋の上に座らせて、何でもネフリユードフに腰を掛けて貰ひたいと云つた。

ネフリユードフと相對つた老人は、最初は恐かな慄くにネフリユードフの身體に觸つても大變だと足を引込まして小さくなつてゐたが、段々心安立てになつて、話の興に乘つてネフリユードフの膝を叩くやうになつた。

此老爺は泥炭掘に傭はれてゐたが、暇を取つて之から故郷へ歸る處だと話した。丁度二ケ月半稼いだが、雇はれる初めに給金の前借をしたので、差引き唯つた十圓だけしか溜らない給金を持つて歸るのださうだ。其話に由ると、彼等は日出から日沒まで食後二時間の休息をする外は一日泥の中に膝まで入れてゐるのださうだ。

『仕事に馴れねエ中は骨が折れやすが、馴れて了エせエすりやア何たる事もねエ。唯、食物でがんすナ、初手はおえねエ粗いものを食はせやしたが、如斯な食物ぢやア働く事が出來ねエと

苦情を持込みやしたんで、段々と美味エものを食はせるやうになりやしたから仕事も樂になりやした。』

渠は二十八年間出稼ぎをして、儲けたものは悉く故郷へ送つてゐたさうだ。初めは親爺に、其次に兄貴に、今では家の束ねをしてゐる甥に送つて、自分一身は一年に儲ける五六十圓の内から唯つた二三圓を何よりの道樂の煙草と燐寸の代にしてゐるのださうだ。

『だがお前さま、之でも俺やァ相應の惡黨だ。時々草臥れやすとツィ少とベエはウォツカを餘飲りやす、』と首を縮めて申譯なさゝうに笑つた。

それから故郷では女どもが稼いでゐる事から、雇主が今日出立する門出にウォツカを半樽振舞つた事や、仲間の中で一人は死んで一人は病氣になつた事まで話した。其の話の病人といふは同室の隅ッこに小さくなつてゐる青ざめた痩れた顏の青い唇をした若者で、癈を煩つたお庇で那樣なに憔悴して了つたのださうだ。

ネフリユードフは其話を聞いて病人の傍へ行くと、痛く迷惑さうに妙な顏をしたから、餘計

な事を訊いて困らせるでもないと、故と何にも云はずに戻つて、キニーネを買つて飲ましてやれと老爺に勸めて藥の名までを紙に書いて渡した。其上に藥代まで惠んで遣らうとしたが、老爺は自分が買つてやるからと堅く辭退した。

『俺ァ之まで何度も道中ベエしやしたが、此樣なお殿樣に會つた事は一度もムりましねエ。お前さァもドタマを撲られねエで、席を讓つて貰うチウ事はあんたらこんだ、』と老人はタラスに向つて、『同じお殿樣にも種々なお殿樣があるもんだに。』

『今まで見た事のない全くの別世界だ。』とネフリユードフは痩枯れた筋だらけの手や、粗末な手織木綿の衣服や、世渡りの苦勞に痩れてはゐるが日に燒けた律義な顏を見、之まで知らない勞働生活の眞味や喜びや苦みに圍繞かれつゝ恁う思つた。

『一方には Le vrai grand monde（上流社會の人）がある、』とコルチャーギン公爵の一言を偶然憶出すと共に、此公爵家が屬する下劣な卑しい道樂三昧の贅澤な世界があるを憶ひ浮べた。そして今までツィぞ知らなかつた新らしい美くしい別世界のあるのを發見した旅行者の悅びを感じた。

第三編

第一回

マースロワの屬する囚徒の一行は凡そ三千哩ほど行つた。ペルム市までは普通の刑事囚と一緒に汽車や船で旅行したが、ネフリユードフは爰で漸く國事犯組のヅーホーワの意見で國事犯の一行に加はる許可をマースロワの爲めに得た。

ペルム市までの道中は精神上にも肉體上にもマースロワには頗る苦痛であつた。多勢の人間に揉まれ、塵埃まみれになり、蚤や虱や蠅に苦められて片時も沈としてゐられなかつた肉體上の苦みに加へて、蛔虫同樣の煩さい男に附纏はれる精神上の苦みは亦尋常でなかつた。驛々で人こそ變れ、何れも之も煩さい人間ばかりで、マースロワを附けつ廻しつして片時も安心させなかつた。元來囚徒護送の道中では男囚、女囚、獄吏、護送役人の間に淫らな惡風が當然のやうに行はれてゐるから、女の役目を利用して身體の樂をするのが嫌なら、始終警戒して心配し

たり恐い目を見たりする辛さ加減が尋常で無かつた。殊にマースロワは男好きのする美貌といひ、以前の職業を誰知らぬものはないから、多勢の男に覘はれて、煩さく附纏はれるのを思切つて手嚴しく拒絶けると、渠等は侮辱されたやうに思つて、今度は散々に辛く當り散らすのだ。幸ひタラス夫婦と心易くしてゐたお庇に若干か苦勞が拔けたといふは、タラスが大切な女房のフキョードーシャが矢張同じ嬲り者にされてゐるのを聞いて心配して、女房を保護したさにニージニーで故意と罪を犯して、望み通りに護送の囚徒と一緒になる事が出來た。其のお蔭でマースロワもタラスの保護を受ける事が出來た。

國事犯に加はるやうになつてからは何かにつけて非常に氣安くなつた。食物初め萬事が普通囚と比べて手厚くなつた上に、男に嬲られる心配は全で失くなつて了ひ、隨つて忘れやうとしてゐる昔しの恥かしい生活を憶出す事もなくて暮せた。殊に何よりも一番利益になつたは立派な人格の人に接近して美くしい堅固な感化を與へられた事である。

尤も驛々でこそ他の國事犯と同じ休憩所に休息するを許されたが、元來が極強壯な女だから

途中は普通の刑事囚と一緒に歩かねばならなかつた。

怎んな風にトムスクからは始終歩行で通したが、一行中に國事犯が二人あつた。一人はネフリユードフが嘗てヅーホーワを監獄に尋ねた時に目を着けた眼のクリ〳〵とした美しい娘のマーリヤ・バウローウナ・スチエチニヤで、一人は矢張其時から知つてる眼の凹んだ色の黑い亂髪の青年、シモンソンと云つてヤコーツク州へ流されて行く男だ。元來國事犯は馬車で護送される權利があるのだが、マーリヤは懷姙の女囚に自分の車を讓つて了ひ、シモンソンは國事犯の馬車に乘る特權を利用するを正當と考へないから、二人ながら歩いてゐた。で、此三人は毎朝一番掛に普通刑事囚と一緒に出立し、他の國事犯ノは其後から馬車で出懸けた。怎ういふ順序で、次の大きな驛へ着くと更任の護送士官が待つてゐて引繼ぐのだ。

雨催ひの九月の或る朝早くであつた。寒風が不意に一としきり吹くと雨と雪とがバラ〳〵と落ちて來た。四百人の男に五十人の女といふ一行の囚徒は休憩所の廣場に集つてゐた。或るものは多勢に分與る二日分の手當を纏めて總代の囚徒に渡してゐる護送班長の周圍を圍繞いてゐ

た。或る者は特に廣場に入るを許されてる物賣女から食物を買つてゐた。囚徒が錢を數へたり買物をしたりする聲や、女の賣子が賣物を呼んでる甲高聲が何處からでも聞えた。

カチューシャとマーリヤの二人は何れも先の尖つた靴を穿き、短い毛革の上衣にショールを頭から被つたまゝ家から廣庭へ出て來て、北寄りの壁に風を避けて忙がしさうに商ひしてゐる女の處へ來た。出來立の溫かい肉菓子や魚や素麵や蕎麥搔や羊の肝や牛肉や鷄卵や乳が陳んでゐた。燒豚までも賣つてゐた。

シモンソンは護謨のジャケツを着て、毛糸の靴下に護謨の上沓を穿いて紐で結んでゐた。(彼は菜食主義者であつて殺された獸の革を決して用ひなかつた。)同じやうに廣庭へ出てソロ〳〵出掛ける一行を待ちつゝ休憩所の入口の傍に立つて、心に浮ぶ考を手帳に書き留めてゐた。曰く、『若し細菌が人間の爪を研究審査したなら或は之を無機物と稱するであらう。共通行も吾々も地球の外殼を研究して無機物と稱する。二つながら誤謬である。』と。

卵や麵麭や魚や『ラスク』を買調へてマースロワは袋の中に入れた。マーリヤは代を拂つて

ゐる時、囚徒は俄に動き初め、一同は靜まり返つて各自の位置に就いた。士官は軈て現はれて出立前の最終命令を傳へた。

總てが例の通りに運ばれた。囚徒の數は檢められ、足の鏈は吟味せられ、二人組は手錠で繋がれた。すると忽ち喧付くやうに怒鳴りつける士官の荒々しい威丈高の聲に續いて打擲する音と小兒の泣叫ぶ聲が聞えた。一同は暫らく沈としてゐたが、段々何處からとなくヒソ〳〵呟く聲がした。マースロワとマーリヤは騷ぎの初まつた處を指して駈けて行つた。

第二回

二人は軈て現場へ行つて見ると、濃い口髭を生やした岩壁作りの士官が恐ろしい顏をしてガミ〳〵罵りながら、囚徒の横頰を撲つた掌が痛むのを撫りながら立つてゐた。其前に頭を半分剃つたコツ〳〵した背高の罪人が行丈共に短い上衣に、夫より最つと短い洋袴を穿き、片手で頰から流れる血を押へ、片手でショールに纏まれてる小さい女兒の泣き號んでゐるのを抱へて

ゐた。

『最つと痛い目を見せるぞ。理窟なら俺が最つと辛い奴を敎へて呉れる。さッ、其孩兒を女どもに渡しちまへ！』と士官は嚙付くやうに、『きり〳〵手錠を穿めろ！』

此男は村拂ひになつたもので、トムスクで女房に窒扶斯で死なれてからは小さな娘を自分で抱いて來た。處が今になつて士官が俄に手錠を穿めろと命じたので、手錠を穿めると孩兒を抱いて行かれぬと云つたのが、丁度虫の居處の惡かつた士官の肝癪玉を破裂さして、何故命令を守らないかと唐然横頰を撲飛ばした。

其傍に護送兵が立つてゐた。之と列んで片手に手錠を穿められてゐる黑い鬚の囚徒が立つてゐたが、氣の毒さうに上眼で士官と小兒を抱いてる負傷をした囚徒とを交代りに見てゐた。士官は何でも彼ンでも孩兒を引奪つて了へと何度も兵士に命令した。囚徒の中の口小言は段々高くなつた。

『トムスクから此方、手錠を穿めてやしねエぜ、』と後ろの方から皺嗄れ聲で云ふものがあつ

た。『人間の兒ぢやァねェか、犬の兒ちやァねエぜ。』

『兒供を怎うする意だ。其樣な法律は無エや、』と又一人のものは云つた。

『誰だ！』と士官はカッとなつて一喝し、大勢の中に飛込んで、『さッ、法律を敎へて呉れやう。誰が云つた？　汝か？　汝か？』

『誰だつて爾う云つてらァナ。何故ッてお前——』と背の低い顏の大きい男が言掛けたか、マダ云ひ切らない內に、士官は飛掛つて頰桁を撲り飛ばした。『反抗すると怎うだ。官吏反抗罪てものを敎へて呉れやう。汝達を犬同然に銃殺するのは何でも無い。其方が政府の手數が省ける。ヤイ、孩兒を奪つちまへ！』

多數は默つて了つた。一人の護送兵が魂消るやうに泣き號ぶ幼女を引離すと、他の一人は仕方がなしに觀念して溫和しく出した囚徒の手に手錠を穿めた。

『女共に渡しちまへ。』と士官は佩劍の釣革を直しながら云つた。

小さな女の兒は眞赤になつてショールの下から逃出さうと躁いて限界無しに泣叫んでゐた。

其時マーリヤは大勢の中から進み出て士官の傍へ行き、

『妾が此兒を伴れて參つても宜しいでせうか？』

『誰だ、汝は？』と士官は訊いた。

『國事犯です。』

美くしいクリ〳〵した眼付のマーリヤの美色は此士官が罪人を受取る時から眼を付けてゐたから忽ち利目があつて、士官は凝つと沈吟しつゝマーリヤの顏を見てゐたが、

『そりや闕はん。汝が伴れて行きたければ伴れて行くが宜エ。汝なら目を掛けてやるのは何でも無からう。だが此孩兒の親爺が逃げたら誰が責任を持つ？』

『如此な幼女を抱へて逃げる事が出來るもんですか。』

『汝とツベコベ喋舌つてる暇は無い。怎うでもしろ。』

『では此女に幼女を渡しますか、』と兵士は訊いた。

『むゝ、渡してやれ。』

『さア、おいで、』とマーリヤは柔しい聲で幼兒を懷けやうとした。

が、幼女は兵士の手に抱かれながらも身を伸ばして父親の方へ行かうと泣き叫んで、マーリヤの方へは行きさうにもしなかつた。

『お待ちなさい、マーリヤさん、』とカチューシャは袋の中から「ラスク」を出して、『妾の處へは必と來ます。』

小さな女の兒はマースロワを知つてゐたから、マースロワの顏と「ラスク」を見ると直ぐ抱き取られやうと手を出した。

一同は漸く靜肅になつた。軈て開門されて一同は列を作つて出やうとした時士官は最う一度點檢した。袋は馬車に積込まれて足弱の囚徒は其上に乘つた、マースロワは幼女を抱いて女囚の中にフキョードーシャと並んで加はつた。

此騷ぎを初めから見てゐたシモンソンは束々と大跨に、丁度命令を濟ましてから馬車へ乘らうとする士官の傍へ來て、

『貴下が惡かつた。』

『何だと。汝の關係した事つちやない。汝は汝の列へ行け。』

『いや、貴下が惡かつたから惡かつたと云ふのは私の勝手だ。』とシモンソンは蓬々眉毛の下から士官を屹と見た。

『宜エか？――前へ、オイ！』と士官はシモンソンに闘はずに號令を掛けると共に馭者の肩を摑まつて馬車へと飛乘つた。一行は進んで兩側に溝のある泥濘路から段々と蓊鬱した森へと指掛つた。

第三回

辛い境涯には違ひないが、國事犯人の中に暮すのはモスコーで六年間の放縱淫靡な墮落生活を過したり、放火犯や盜賊と同じ牢屋に五六ケ月間も起臥したカチューシャの身に取つては、國事犯人と一緒に寢食を共にするは頗る榮耀な沙汰は頗る幸ひであつた。一日が十五哩から二十哩の割合で、相應に美味いものが食べられた上に、二日道中の一日休息といふ氣樂な旅だから身體が非常に壯健になつた。殊に今迄交際つた連中とは全で變つた人物に接したお庇に、之まで夢にも見なかつた面白い世界があるのを知つた。現に今、朝夕を倡にする人達はカチューシャから云はせれば何れも不測な人物で、ツイぞ之まで出會つた事もなければ想像だもしかなかつたものばかりだ。

『あア、あッ、那の時は宣告されると泣いたッけが、』とカチューシャは腹の中で云つた。『今となると神様に一生御禮を云はなければならない。あの宣告を受けたればこそ、恁ういふ方達と一緒になつて、今まで知らなかつた事を覺えられたんだワ。』

カチューシャには是等の國事犯人が法を犯すやうになつた動機が容易に骨折らずに理解された。且自分自身が其一人だから深く同情した。彼等は人民の爲めに上流社會に反抗したので、身親らは上流社會に列しながら人民の爲めに其特權、其自由、其生命を犧牲にしたといふ事が解つたから、殊に尋常ならず彼等を尊敬し感嘆した。

夫故、誰に對しても懇ろにしたが、殊にマーリヤに對しては一段と尊敬を拂つて親睦くした。此の美くしい處女は有福な將軍の娘で、自在に三ケ國語を繰つる事が出來る身分も學問もある立派な令孃でありながら、有福な兄が分けて呉れた財產を悉く捨て、極賤しい女工風情の生活をして、質素を通り越した思ひつた憫然らしい裝をして、見榮も振も少しも關はなかつた。其上に若い女の艶めいた科の全然無いのがマースロワには殊に不思議に思はれて愈々牽きつけられた。

マーリヤだつて自分の美くしいのを知つてもゐたし、喜んでもゐたが、美くしいお庇に男にチヤホヤされるのが面白くないばかりか、忌で堪らないので戀に落ちると何よりも恐れてゐたのはマースロワにも良く解つた。男の友人達は皆此氣象を合點んでゐるから、マーリヤに對して戀の非望を抱くものは無かつた。縱令んば人知れぬ戀に焦れても沈と胸に收めて決して顏へは出さずに、男に對すると同じ心持で交際つてゐた。見ず知らずの男がウツカリ其氣象を知らずに挑戯ひでもしやうもんなら、顏に似合はぬ自慢の腕力で痛い目に會ふ。

『怎ういふ事が有つてよ、』とマーリヤは笑ひながらカチューシャに話した』。或時何處からの知ない男が往來で妾の踵を付けて、何處まで行つても煩さく隨いて來たから、突然り突飛ばしてやつたら喫驚して遁出してよ。』

マーリヤが革命黨となつたは、小兒の時から富裕の生活が嫌ひで、平民生活が好きであつたからで、何時でも座敷よりは臺所や厩で下女や下男と話してゐるので度々叱られたさうだ。『厨夫や馬丁と一緒にゐる方が貴婦人や紳士のお對手をするより餘程面白いからネ、』とマーリヤは云つた。『段々理窟を知つて來ると妾達の生活が全く間違つてゐたのが良く解つたのサ。だからお母さんには早く別れて了つたし、お父さんは大嫌ひだつたから、十九の時に到頭家出をして女のお友達と一緒に工場の働き人となつて了つたノ。』

其後工場を罷めて田舍へ行き、田舍から復たモスコーへ舞戻つて、革命黨員が秘密印刷機械を匿してある下宿屋に在た時に捕まつて徒刑になつたのだ。

此捕紳の顚末に就てはマーリヤは自分では何にも云はなかつたが、カチューシャが外から聞

いたのでは、此下宿屋が警察の捜索を受けた時、革命黨の一人が闇中で發砲したのを自分の罪に被つたので有るさうだ。

マーリヤと心安くなつて來ると直ぐカチューシャの氣が付いたのは、マーリヤは怎んな境涯に在ても自分の一身に就ては少しも考へないで人の爲めばかりに屈托し、大事にせよ小事にせよ人を助けやうとしてゐる事だ。*ノウオドウオーロフと云ふ矢張一行中の國事犯はマーリヤを評して博愛道樂だと云つたが、全く其通りで、マーリヤの一生の興味は獵師が獲物を捜すやうに人を助ける機會を捜す事で、道樂が遂には習慣となりビジネスとなつて、マーリヤを知つてゐる人達は馴れッこになつて左程に德としないで、平氣になつて世話をして貰うやうになつたほど自然的に行つてゐた。

マースロワが初めて國事犯仲間に加はつた時はマーリヤは堪らなく忌な氣持がした。カチューシャは直ぐ氣が付いた。が、同時にマーリヤが忌で堪らないのを眤と辛抱して柔しく親切にして呉れる事にも氣が付いた。シカモ其の柔しさや親切さは通り一遍でなかつたから、カチュ

ーシャも嫌はれてゐるとは感づきながらも心から嬉しく思つて眞情をマーリヤに捧げ、自然知ちず識らざる間にマーリヤの心持も理解めればマーリヤの一舉一動をッィ眞似するやうにもなつた。怎うまで慕はれて見ると、マーリヤの方でも何時か心底から打解けて來た。殊に男女の戀を擯斥する二人の心持は、戀を擯斥する動機こそ各々異なつてゐても、互に意氣投合して益々深くなつた。一人は有りと有らゆる戀の苦味を十分嘗め盡して懲り果てたのであるが、一人はマダ曾て經驗した事が無いけれども何か無しに譯の解らぬ恐ろしいものゝやうに思ひ、戀は人間の品位を傷つける一番厭ふべきものとばかり信じ切つてゐた。

第四回

マーリヤの感化はマースロワが懷いて與へられた感化の一つで、其根原はマースロワがマーリヤを愛したからである。シモンソンの感化は之とは異なつてゐて、シモンソンがマースロワを愛した事から生じてをる。

人は誰でも自分の考と他人の考と半々で活きてゐれば仕事もしてゐる。何方で餘計に働いてゐるかといふ事が人を區別する重なるものゝ一つである。或る人には考へるといふ事が心的遊戯の一種であつて、多くの場合、自分の理性を云はゞ機械の帶を外した車輪同樣に扱ひ、自分の考を外にして他人の考や世間の慣習や仕來や法律ばかりで進退してゐる。或る人は又自分の考を一切の行動の重なる原動力と信じ、何をするにも先づ自分の理性の命ずる處を聞いて服從し、偶さか他人の意見を聞いても批評的に考量するだけである。シモンソンは卽ち恁ういふ種類の人で、何事をも自分の理性で確定して、恁うして決定した覺悟を必ず實行する。

まだ小學生の時、政府の會計吏としての父の所得が不正に收得したものだといふ結論を得たので、其金は人民に與へて了うべきものだと父に忠告したが、忠告を聞入れないで却て叱られたので、直ぐ家出をして再び父の世話にならなかつた。

世の中に行はれる罪惡の殆んど總ては人民の無知に基るするといふ結論を得ると、大學を出るや否、人民黨に加入し、田舍の小學教師となつて自分の生徒や百姓達に自分が正義と信ずる

ものを忌憚なく講釋し、不正と信ずるものを公々然と攻擊して聞かした。

其のお庇で忽ち拘引されて裁判を受けた。然るに裁判中、裁判官は自分を裁判する權利は無いと考へると、直ぐ其通りの裁判官に話した。裁判官が一向頓着なく審問しても、一端答へまいと決心したからには何を訊かれても斷乎として口を開かなかつた。

其の爲めアーハンゲリスク縣に流されたが、貶謫中に總ての自分の活動を支配すべき宗教的教說を案出した。教說の基礎となつた教理によると、天地萬物には悉く生命がある、一として生命のないものは無い、我々が無生物又は無機體と考へるものも實は吾々の得て計るべからざる或る一大有機體の一部分であつて、同じく此の一大有機體の一部分としての人間の仕事は卽ち其生命及び各機能の保存である。此根本の教說から割出して、シモンソンは生命を絶つを罪惡と考へ、戰爭や死刑は勿論、人間ばかりでなく動物を殺すさへも悉く反對した。

結婚に關しても亦、シモンソンは獨特の理窟を持つてゐた。其理窟に由ると、生殖といふは人間の最下等の仕事で、人としての高等の仕事は既に生れて來た人の爲めに働く事である。此

理窟は血液中に毒菌を滅する殺菌細胞が存在する事實を論據として立てたので、渠の說に由れば卽ち人間界といふ有機體の弱者劣者を助ける職分を持つ殺菌細胞である。恁う考へてからは、若い時には遊蕩に耽つた事もあるが、夫から以來はピッタリ止めて了つた。で、シモンソンやマーリヤは卽ち殺菌細胞であると思つてゐた。

カチューシャに對する愛はシモンソンの此の考を少しも萎ませなかつた。何故ならシモンソンの愛はプラトニック（理想的）であつて、恁ういふ愛は殺菌細胞としての仕事を阻止しないばかりか、却て之を激勵する靈感となると思つてゐた。

シモンソンは啻に道德問題ばかりでなく、極實際の問題でも自分流に決定した。何に由らず總ての實際問題に自已一流の見解を持つてゐて、何時間働いて何時間休息するといふ事から、怎んなものを食ふが宜い乎、怎んな衣服を着るが宜い乎、如何に家を煖めたり明るくしたりする乎といふ事までキチンと規則を定めてゐた。

萬事が之だから元來は極內氣で遠慮勝ちであつたが、一端恁うと決心すると槓杆でも動かな

かつた。

此のシモンソンが愛の力を通してマースロワに强い感化を與へたのだ。女の本能でマースロワは直ぐ愛されてゐる事に氣が付くと共に、恁ういふ人物に愛を燃やさしたといふ事實が自尊の心を起さしめた。ネフリユードフが結婚を申出したのは男の宏量と過去の罪亡ほしの爲めの義理合であるが、シモンソンの愛したのは在るが儘の彼女を愛し、唯だ愛するが故に愛したのだ。マースロワの氣が付いたのは、シモンソンは彼女を特に高い品性を持つてゐる稀有の婦人と思つてゐるらしいのだ。如何なる品性を彼女に期待してゐるかは確かでなかつたが、左に右く身を慎んで失望させないやうに、力の有らん限りを盡して自分の考へ能ふ最高の品性を目を覺まさして、出來るだけ立派な女にならうとした。

此關係は尙だ監獄に在る時分から初まつたのだ。或る日の普通面會日にシモンソンが突出した眉の下から凝とマースロワを凝視めた柔しい紺靑色の凹んだ眼を見たが、其時から尋常人でなく、彼女を凝視めた眼眸が尋常事で無いのに氣が付いた。且亂髮と隆爵な前額つきが見せる

嚴格な相に加へて本來の兒供けた柔しさと無邪氣さとを示した尋常漢ならぬ相貌を早くも看て取つた。

トムスクで國事犯の仲間入りをした時、マースロワは再びシモンソンに會つた。二人共に一と言も口を利かなかつたが、互に見換した眼は忘れないといふ事と力に思つてゐるといふ事を知らし合つた。其後も格別口を利かなかつたが、或る時マースロワは、自分の目の前でシモンソンが話してゐるのが實は誰よりもマースロワに聞かせる爲めで、故と容易しく嚙んで含めるやうに云ふのに氣が付いた。が、二人が打解けて心易くなつたは普通囚徒と一緒に徒歩で伴れ立つて行くやうになつてからだ。

第五回

一行がペルム市を出立するまでにネフリユードフがカチューシャに面會出來たのは唯つた二度であつた。一度はニーヂニーで、四方金網張りの船に乘せられる前、二度目はペルムの監獄

署であつたが、二度ながらカチエーシャは少しも打解けないで頗る冷淡であつた。欲しい物は無いかとか、道中は愉快であるかとかいふやうな質問に答へるのが發揮々々しないで、厭さうで、丁度以前に度々見せた敵意を持つてゐるやうに思はれた。殊に陰氣に欝ぎ込んでゐるのが實は其時に男から惱まされてゐた爲めなのであるが、ネフリユードフを心配さした。長の道中怎ういふ辛い破廉耻な境涯に置かれては再び以前ネフリユードフに當り散らしたやうな自暴自棄になつて、苦勞を忘れたさに復たもや酒や煙草を飲み初めやしまいかと、之が氣に掛つて堪らなかつた。が、道中では會はれないから怎うする事も出來なかつた。が、國事犯仲間に加へて貰つてから會つて見ると、自分の心配は全く取越苦勞であつた事が解つたばかりでなく、會ふ度毎に更めて欲しいと思つた内的變化が段々際立つて來るのに氣が附いた。トムスクで初めて會つた時は丁度モスコーを出立する前のやうな容子で、羞耻みもせず、ソヽクサもせず、難かしい顏もしないで、洒然とした調子で嬉しさうに、ネフリユードフのお庇で今一緒に在るやうな人達の中へ入る事が出來たのを難有がつて禮を云つた。

二ヶ月間の道中でカチューシャの心持の變つたのが顏にまで現はれて來た。日に燒けた上に痩れて、顴顁の邊から口の周圍には小皺が寄つて老けて見え、前額に垂れる縮れた愛嬌毛は何時か失くなつて、頭髪をスツポリと手巾で包んで了つた。衣服の着方から身體の動作までが全で變つて、以前のジャラクラした容子は痕跡も無く消えて了つた。此變化は會ふ度毎に著るしく目立つて、愈々益々變つて來るのをネフリユードフは非常に滿足した。

ネフリユードフがマースロワに對する感情も今まで經驗しないものであつた。此感情は初めの詩的な戀の中にも無く、續いて燃えた性的の戀には猶更以て思ひも寄らず、裁判後愈々結婚しやうと決心した時の（多少は自負心を混入しないでも無い）義務を果した滿足の中にさへ無かつたものだ。今の感情は唯だ憐みと親愛だけである。此感情は初めてカチューシャを監獄に訪ねた時に萠し、其後カチューシャが病院の助手と腐れ合つた不品行（此事は根も葉もないのが後で解つた）を聞いて勃然としたのを强に制へつけて勘辨してやつた時にも起つた。今の感情は丁度夫と同じであるが、唯だ違つてゐるのは、以前のは二度ながら唯の一時的であつたが、

今のは永久的であつて、何を考へても、何をしても此の愛憐が附纏つてゐた。且嘗にカチューシャだけでなく誰に對しても同じ愛憐の心を持つやうになつた。今までネフリユードフの心の奥に深く潛んで出口を塞がれてゐた「愛」が此感情の爲め俄に堰を切つて、「愛」が會ふ人毎に誰にでも溢れた。

旅行中ネフリユードフは始終興奮してゐたから、馬車の馭者から護送兵、監獄の典獄から知事まで交渉する人達には誰にでも注目されてゐた。

マースロワが國事犯の中に移されてからは、自然多勢の國事犯と接するやうになつた。初めはエカテリンブルグで渠等が非常な自由を與へられて總員一緒に大きな宿舍に收容された時、其後に男五人女四人の仲間に入れられてマースロワが移送された途中と、恁ういふ風に政治流刑人に接觸してから、渠等に對するネフリユードフの心持は全く一變して了つた。

露西亞に於ける革命運動の抑もの初めから、殊に亞歷山二世の弑せられた三月一日以來、ネフリユードフは嫌惡と侮辱を以て革命黨を見てゐた。渠等の政府に對する策戰に慣用する殘忍

や陰險の手段が堪らなく不快であつた。渠等に共通する特色の自分免許の驕慢心が堪らなく嫌ひであつた。が、段々親しく交際つて、渠等がドレ程政府から虐げられてゐるかを知ると、渠等も亦恁うなるより外仕方が無かつたのが解つた。

普通の所謂罪人に蒙らせる呵責に怎んなに恐ろしい無慈悲なものであつても、少くも判決される前後に法律に似寄つたもので糺問されるが、國事犯の場合には斯んな法律らしいものさへ適用されてゐないのは、シユーストワの事件でも其他の新らしい知友の多くの場合でもネフリユードフの見た通りだ。是等の人民は網で漁獲された魚のやうに扱はれてをる。網に入つたものは何でも濱に引上げられる。目指した大魚が擇り出されるは當然としても、殘りの雜魚までが磯に千死んで了うまゝに放擲らかされて置かれる。何の罪も無いのが明白で、政府に危險を及ぼす筈が無い數百人を捕へては何年も監獄に投込んで置き、肺病となり、氣違ひとなり、或は自殺するまゝに捨置く。唯だ役人が放免する種子が無いといふだけと、恁うして監獄に入れて置けは法廷の疑問を解く何かの役に立つかも知れぬといふ政府の都合からで、政府の眼で見

てさへ全く何の罪もない無辜の良民であるのが屢々認められる是等の人間の運命が憲兵や監獄吏や探偵や檢事や判事や知事や大臣の出來心や御機嫌次第、了簡次第に任されてをる。恁ういふ役人中の或る者が退屈するとか、しは何か一つ功名を顯して見たいと思ふと、自分一個の臆測や上官の心持を揣摩して勝手氣儘に捕縛したり、監獄に入れたり、放免したりする。高等官吏の輩も矢張同じ手前勝手や大臣に對する情實や諂諛半分で、何の咎もない人間を世界の果に追放したり、密室に檻禁したり、西比利亞へ徒刑に處したり、死刑を申渡したりする。かと思ふと、一婦人の嘆願で容易に放免したりする。

渠等は恰も戰爭に於ける如く扱はれてゐる、勢ひ渠等も亦自分達に仕向けられると同じ方略を取らなければならなくなる。軍人が戰場に於ける行動の罪惡は庇護されるばかりか却て勇敢なる功勳と稱讃される公論の大氣中に豁歩する如くに、國事犯達が自由、生命、一切の愛着を擲つて危險の矢表に立つて敢行する殘忍無道の行爲は決して惡事でなくて却て名譽ある功績であるといふ公論の大氣に常に圍繞かれてをる。此消息が解ると共に今まで屢々見た頗る奇妙不

可思議な現象、卽ち平生は蟲も殺せさうもない極々溫和しい者が悠然として殺人の手段を講ずるといふ不思議な現象を良く說明出來た。渠等の殆んど總ては或る場合卽ち正當防衛とか最高目的を達する爲めとか或は一般の公安の爲めとかなら殺人も亦公明正大のものだと思つてゐた。渠等が自分等の目的を重大とし、隨つて自分自身も重大と任ずる所以は、畢竟政府が渠等を重大視して酷刑を加へる爲めに勢ひ止むを得ないのだ。渠等は忍び得られるだけ忍ぶ事の出來る渠等相應の高尙な說を持つてゐた。

愈々親しく知つて見ると、渠等が或る人の想像するやうな箸にも棒にも掛らぬ無賴者でもなく、又或る人の信ずるやうな素晴らしい英雄豪傑でもなく、全く平凡な尋常の人間で、何處にも珍らしくないやうに善人もあれば惡人もあり或は中位のものもあつた。

中には現に行はれる罪惡に對して戰ふが渠等の義務だと正直に考へて革命黨となつたものもあるが、中には放恣な野心から此手段を取つたものもある。が、大多數はネフリユードフが軍隊の經驗で能く知つてる通りに、大抵の普通の人間の若い血氣盛りには通例共通する、生命の

遣り取をするやうな危險を面白がつてムヅ〳〵してゐる處から革命思想に牽込まれるのだ。が、渠等は仕合せと道德觀念がヨリ高く進んでゐる點で普通人と異なつてをる。渠等は克己自制、艱難辛苦、眞實無私を渠等の義務と考へるのみならず、公共の爲めには何物をも犧牲とし、命を捨てゝまでも義務を守つてをる。夫故に渠等の中の勝れた人物は容易に達する事の出來ない道德平準線以上に立つてゐるが、其代りに下等な奴と來たら尋常平準以下であつて、其の多くは不正直で、僞善で、同時に高慢で、獨り天狗で鼻持もならぬ。夫故にネフリユードフは新らしい知人中の或るものを尊敬し、隨分心から景慕もしてゐたが、他のものに對しては依然中立以上であつた。

第六回

ネフリユードフが殊に好きであつたのは徒刑に宣告されたクリルツォーフといふ肺病患者の青年で、カチューシャと同じ組に屬してゐた。エカテリンブルグで初めて知合となつたが、夫

から先き何度も道々話しながら行つた。夏の或る日、引繼所で殆んど全一日を語り合つた時、身の上咄をして革命黨となつた顚末を話した。監獄に入れられるまでの咄を一と息に話した。

渠は南露西亞の富裕な地主の一人子であつた。幼さい時に父に別れて母の手で育てられ、小學から大學までスラ〳〵と卒業した。數學では第一位を占めて卒業したので、外國に留學出來る丈けの奬勵金を受けた。が、直ぐ外國行を決行しないで躊躇してゐる中に、戀が出來て、婚禮して田舍役人にでもならうかと思つた。何でもするツモリでゐても何でも思切つて出來なかつたのだ。此の大事の場合に、大學の同窓生が或る公益の爲めに金を寄附して呉れと申込んで來た。此の公益といふと、其頃マダ餘り興味の無かつた革命運動であるのを知つてゐたが、同窓の交誼と、恐がると思はれては癪だといふ虚榮から金を出して與つた。すると金を貰つたもの達が捕まつてクリルツォーフの手から金が出たといふ證據の手捺が擧つたので、直ぐ捕縛されて警察から監獄へと廻された。

『其處の監獄は夫程嚴ましくなかつた、』とクリルツォーフは高い棚の寢榻の上に、双肱を膝に

突きつ〻身體と曲げて、美くしい眼を狂熱的に輝かしながらネフリユードフを見、『僕等は話をしたもんだ。壁を叩くんぢやありませんぜ。立派に口を利いたもんだ。廊下を逍遙きもすれば、煙草や食物を各自に分け合つたり、夕方になると多勢で合唱したりした。之でも僕は美音なんで。何しろ恁んな鹽梅だから、阿母の事さへ思はなかつたら――阿母は大變心配してゐたのだ――僕はアレで結構、どころか、暢氣で面白い位なもんだ。有名なペトローフ――そら、獄中で硝子の破片で自殺した――あのペトローフとも他の奴とも其處で懇意になつたのだ。併し其時分はマダ革命黨にならなかつた――。

『處が僕の檻房の直ぐ傍の穴に在た二人の奴――此奴は二人とも僕と同じ事情で、波蘭黨の宣告書を持つてゐたばッかりで捕縛されたんだ。處が停車場へ護送される途中逃出さうとしたので裁判へ廻された。一人はロジンスキイといふ波蘭人[1]、一人はロゾーウスキイといふ猶太人[2]だ。此奴はまだヅブ兒供で、自分では十七だと云つてるが、十五ぐらゐにしか見えない。痩せッぽちの矮小ぴくで、眼のバッチリと黑い到つて元氣な奴だ。猶太人の性質で器用に歌を唱ふ。少

と聲を痛めてゐたが、夫でも中々上手に歌つた。處で愈々裁判に引き出されたが、朝呼出されて夕方戻つて來た時、死刑に宣告されたと衆人に話してゐた。誰だつて意外だ。渠奴らの事件は極簡單な詰らない話で、護送の途中逃出さうとしたばッかりで人一人傷めたわけぢやァない。殊にロゾーウスキィのやうな兒供を死刑にするてのは無鐵砲極まつた咄だから、獄内の連中は誰れ一人眞摯に請取らなかつた。大方嚇かされたんで、眞個に宣告されたンぢやなからうとばかり信じ切つてゐた。夫だから初めは馬鹿々々しくて腹が立つたが、這般な兒供を死刑にして怎うなるもんかと、各自安心して夫なり悉に忘れて了つた——

『すると、或る夕方の事ッた。押丁がやつて來て、大工が絞首臺を造りに來たといふ祕密話だ。始めは何の事ッたら解らなかつた。——何のこつた？　何の絞首臺だ？　と、何が何だか、全然解らなかつたが、老押丁めは興奮して二人を處刑するンだと云ふ。えッ、二人だ？　二人てばあの二人だらう、と、喫驚しちまつた。夫から壁を叩いて隣房の奴に知らせやうかと思つたが、若しか本人の耳に入つてはなるまいと止めて了つた。處が、隣房の奴も默つてゐンだ。爾う斯うする中、誰にも彼にも知れ渡つて了つたやうで、此晩は廊下から檻房までが死んだやうに寂として了つて、平日のやうに壁を叩いたり歌を唱つたりする者は一人も無かつた——

『十時頃になると、押丁が復たやつて來て、モスコーから刑手が今着いた處だと云つて、直ぐ復た行かうとするから、急いで呼戻さうとすると、其途端にロゾーウスキィが廊下越しに大きな聲で、「怎うしたンだい、何しに押丁を呼ぶんだネ？」と、怎う云ふんだ。夫から押丁が煙草を持つて來たのだと好い加減に欺瞞すと、ロゾーウスキィは氣取つたかして「何故今夜は歌も唱はず壁も叩かないのだらう？」と訊くんだ。夫から何と云つたか覺えてゐないが、何しろ口から出まかせを云つて欺瞞して置いて、成るべく口を利くまいと檻房に引込んで了つた。其晩は實に恐ろしかつた。寂然として了つて、怎んな小さな音でも耳の底に響いた——

『すると其の拂曉だネ、直ぐ傍の扉が不意にガチッと開いて、多勢ドヤ〳〵やつて來る音がした。祕と拔足して扉の穴へ行つて覗いて見ると、廊下にランプが點いてゐて、一番先きに典獄がやつて來た。此男はブチ〳〵肥つた、利かん氣の强情な奴だが、眞蒼になつて下を向いてオ

ド〳〵してゐるらしい。其踵から副典獄が來た。此奴は萎れてゐたが、何處かシッカリしてゐた。一番後から押丁が隨いて來た。僕の檻房の前を通つて隣房の入口で佇立つたかと思ふと、副典獄めが變な聲を出して、『ロジンスキイ、起きて清潔なシャツに着更へろ、』と云ふ。すると扉の開く音がして、渠奴らは檻房の中へ入り、ロジンスキイは廊下の方へ出て來る容子だ。典獄の面だけは扉の穴から能く見えたが、顏色ッたら全で眞蒼になつてガタ〳〵肩を震はしてコートの釦鈕を穿めたり外したりしてゐた。すると急に恐いものでも來たやうに周章てゝ脇へ寄つたから、何かと思ふとロジンスキイが僕の檻房の前へやつて來たんだ。中々な美男子で、君も知つてる通りの氣の利いた波蘭ッ子だ。肩幅の廣い柔らかな房々した縮れ髮の愛くるしい碧い眼の男で、花の盛りの若〳〵しい壯健々々した立派な男前だ。僕の檻房の覗き穴の前に突立つたから、倩々其顏を見ると悄然と萎れ返つて顏色が變つてゐた。『クリルッオーフ君、紙莨を持つてるかネ？』と訊いたから、直ぐ出してやらうと思ふ中に、副典獄が急いで莨入から一本出した。ロジンスキイが受取ると同時に副典獄が燐寸を擦つたので、ロジンスキイは火を點け

てスパ〳〵燻かしながら頻に考へ込んでゐたが、何か思付いたと見えて話し初した。『殘酷非道だ、何にも罪が無いのに——』と云掛けて聲を途切らし、白い若々しい咽喉笛を慄はしてゐたのが今でも眼に仄ついてゐる。すると其時、ロゾーウスキイが例の高調子の猶太音で叫つてゐるのが聞えた。ロジンスキイが紙莨を捨てゝ彼方へ行つて了ふと、其踵へ入れ違ひにロゾーウスキイが僕の檻房の前に立つた。凉しい黑い眼の無邪氣な顏を汗ばんで眞赤にしてゐた。矢張清潔なシャツと着更へてダブ〳〵したズボンを手繰し上げながら慄へてゐた。で、憫然しい顏を僕の檻房の扉の穴へ押付けて、「クリルッオーフ君、醫者が咳嗽の藥を調劑へて呉れたッて云ふが眞實かネ。少と容體が變だから最う少し藥を飲まうかと思つてゐる、』と云つた。けれども誰も何とも返事をしないから、不思議がつて僕の顏と典獄の顏とを交み代りに見るんだ。實際ロゾーウスキイの云つた事は何の意味だか僕には全然解らなかつたのだ。すると副典獄は忽ち嚴かしい顏をして搾り出したやうな聲で、『無駄口を叩く勿、さッ、歩け！』と云つた。ロゾーウスキイは何が何だか解らないらしく、多勢の眞先きへ立つて廊下へ駈出した、かと見るまに

忽ち逃げて來たらしく、キィ〳〵した聲と泣聲が聞えた。軈て多勢の跫音とドタバタガヤ〳〵した音がして、ロゾーウスキィは叫いたり泣いたりしてゐた。段々と其音が次第〳〵に靜まると共にバタンと扉の音がすると、後は寂として了つた——

『到頭絞罪になつて了つたのだ。繩で首を絞められて了つたのだ。押丁が見て來ての話だと、ロジンスキィの方は尋常に溫和なしく處刑されたさうだか、ロゾーウスキィは中々絞首臺に上らないで騒廻るンで、多勢が取つて押へて强に臺の上に引摺上げて環の中に首を突込んだのださうだ。此の押丁の野郎は少と拔けてゐるから僕らに云ふには、「首を縊めるのは凄いもんだと聞いてゐたが、何ァに根つから凄かァねェ。キュウと縊めるとピク〳〵ッと、二度肩を慄はす——」と兩肩を痙攣るやうに慄はしてガックリと落ちる身振りをしつゝ、「這般な鹽梅式だ。夫から臺から卸して最う一度キュウと縊めるんだが、其時は最う駄目だ、ピクッともしねェ』——と、這般な事を云つた。』

で、『——根つから凄いもんぢやァねェ——』とクリルッオーフは押丁の言葉を繰返して、笑

ひに紛らさうとしたが、俄に胸一杯になつて涙がオロオロと落ちた。暫らくは胸が塞がつて聲も出なかつた。が、漸つと涙を呑込んで、『其時から僕は革命黨になつた。君、其時からだよ、』と漸く沈着いてから數言で物語の局を結んだ。

渠は人民黨（ナロードヴォーリストヴォ）に屬し、政府を脅かして政權を放棄させやうとするを目的とする破壞黨の領袖にさへなつた。其目的の爲めペテルブルグを初めキーエフ或はオデッサに旅行し、到る處非常手段を講じて成功したが、最後に腹心の者に裏切されて到頭捕縛され、二年間監獄に呻吟した末死刑に宣告された。が、怎ういふ都合か間もなく無期徒刑に減刑された。

然るに監獄の中で肺病に取憑かれて現在のやうな境涯に沈吟し、餘命は僅か數箇月に限られたのを自分でも知つてゐた。が、自分の仕た事を少しも悔ひないばかりか、生れ變つた曉は再び同じ道に粉骨碎身して、自分の目擊したやうな虐政を敢てする無道の政府を飽くまでも破壞せずには置かぬと云つてゐた。

此男の物語を聞き、且段々と親しくなつて來ると、之まで一向合點の行かなかつた事が益々

解つて來た。

第七回

引繼の休憩所で護送士官が兒供の一條で囚徒を叱り飛ばした日、ネフリユードフは田舍の旅籠につて朝寢坊をした。其上に次の縣廳所在地で郵便に出す手紙を書くに閑取つて、例よりは遲く宿屋を立つたので、今日ばかりは之まで通りに途中で一行に追付く事が出來ないで、徐々薄暗くなつた黃昏時に漸つと次の引繼場のある村に着いた。

で、デブ〳〵肥えた白い頸筋の較や齡を老つた主婦のゐる宿屋に着いた時は、咽喉が渴付いて堪らんので、取敢へず聖像や額を矢鱈に飾り散らした小綺麗な座敷で茶を一杯飲んでから直ぐ、カチューシャへ面會を請ひに出懸けた。

爰までの六ケ處の宿泊所では何の士官からも面會を許されなかつた。渠等は何度も交代したが、一人だつてネフリユードフの囚徒宿泊所内に一と足たりとも入れるを許して呉れる者がな

かつたから、一週間以上もカチューシャに會はなかつた。恁う嚴重にするのは或る重い監獄吏が此邊を巡回してゐる筈ゆゑ、何時見廻りに來るかも解らぬかつたからであるが、此高等司獄官は一行を巡檢しないで通過ぎて了つたから、今朝交代した今朝の護送士官は必ず許して呉れるに違ひないと思つてゐた。

囚徒の宿泊所は遙かの村端れだから、宿の主婦は馬車を傭ひませうかと云つた。が、ネフリユードフは歩いた方が宜いと云ふと、ツン〳〵鼻を衝くコールタを塗りたての黑光りする大きな沓を穿いた肩幅の廣い若いハーキュールス然たる勞働者が進んで案内役とならうと云出した。

折から濃霧が一面に立罩めて、僅か三歩先きへ立つ案内者の形さへが其處らの窓から射す燭光に照らさなければ全で見えなかつた。が、ドロ〳〵した泥濘をピチャピチャ踏んで行く重い沓の音だけが聞えた。教會前の廣場から、カン〳〵暗黑を照らしてゐる明るい窓の列んでる長い町並を通つて、ネフリユードフは案内の男を嚮導に眞闇黑の村の外曲輪まで來た。此處でも

罪人宿泊所の門前の常夜燈が濃霧を透して照らしてゐるお庇に暗黒の見當が附いて、此の常夜燈の紅點が近く寄れば寄るほど段々と大きくなつて、矢來垣や番兵のウロ〳〵する形や黒白染分の柱や番兵小屋が一々判然と解つて來た。

二人が門前に來た時、番兵が例に由て誰何した。何れも見知らぬ顏なので、無暗と小難かしい事を云つて、矢來垣の傍で待つてるのさへ許さなかつた。が、案内の若者は一向慄ともしないで、

『其樣な小厭しい事ァ云はねェもんだ。俺らァ爰に待つてるだから早速と大將を呼んで來さッせェ。』

番兵は何にも云はずに大聲で門内に叫りつゝ、肩幅の廣い案内の若者が常夜燈の火影に照らして木片でネフリユードフの靴の泥を落してゐるのを眺と見てゐた。矢來垣の中からは男女のガヤ〳〵した聲が聞え、軈て三分ばかり經つとギィッと門の開く音がして、伍長が上衣を肩へ引掛けたまゝ暗黒から明處へヌウッと現れた。

伍長は番兵ほどに嚴重でなかつたが、根堀り葉堀り穴ぐり穿鑿をして、何用あつて士官に會ひたいのか、一體何者であるか、と飽くまでも洩さず聞糺さずには措かなかつた。ネフリユードフは特別の用事があつて是非士官に面會したいのだから取次いで貰へれば實に幸ひだと慇懃に陳べて、士官に渡して呉れと書付を出すと、伍長は幾度も頷いて書付を持つて行つて了つた。

暫らく經つと再びギィッと門が開いて、各々に籠だの箱だの壺だの袋だのを持つた女が多勢ぞろ〳〵と現はれ、門の閾を踏み跨がうとした時奇妙な西比利亞言葉で聲高にペチヤクチヤ喋べり出した。不思議に一人として田舍風なは無くて、ジャケッに毛革緣の上衣といふ氣の利いた扮裝をしてゐた。が、高々と裾を端折つて頭髮をクル〳〵と手巾で包んでゐた。で、不思議さうにネフリユードフと案内の若者を顧盼いて見たが、其内の一人は若者を見ると莞爾々々嬉しさうに西比利亞言葉で調戯ひ出した。

『此樣な處を何じをお前はウロ〳〵してエるだ、今時分？』

『俺ァお客様の案内べエして來たダ、』と若者は負けない氣で、『汝ァ何じをしに來たダ？』

『俺かエ？　俺ハァ牛の乳を賣りに來たダ。明日の朝最つと持つて來て呉んろと云ふだよ。』

『今晩汝らに泊つて呉んろと能く云はねエだッたナ？』

『馬鹿ァ吐くねェ、』と女は笑ひながら、『だがノウ俺ハァ村へ歸るが、お前さァ一緒に歸らッしやらねエけエ？』

案内者は何か一と言答へて、女ばかりか番兵までを笑はしてからネフリユードフに向ひ、

『旦那は一人でも道が解るべエナ。俺、歸ッても迷子にならッしやる事ァ無かんべエナ？』

『むゝ、良く解つてるよ。』

『あの教會の前を通らッしやると直ぐ、二階屋の家から二番目の角でがすよ。俺の杖を持つて行かッしやい、』と若者は自分が持つて來た自分の脊よりも長い杖を渡した。で、泥濘へ大きな脊を踏ん込んで、泥を跳ね飛ばしながら女連と一緒に暗黑の中に紛れて了つた。

渠の太い鈍聲は女の聲と交つて靄の中から聞えたが、其時、門の扉はギィッと開いて、伍長

は顏を出しつゝネフリユードフを内に案内した。

第八回

西比利亞街道筋の罪人宿泊場は何處でも同じやうだ。先を尖らした。矢來垣を繞らした中の廣々した空地の中央に建つてゐる三軒の平家建が之だ。其中の一番大きな格子窓の附いてるのが罪人の褸房で、他の一軒は護送兵に宛て、殘る一番小さな一軒が事務所兼護送士官の宿舍である。

此の三軒の窓からは何れも燈火が見える。燈火といふものは何處でも爾うだが、(爰では殊に人目を欺くやうに)平和な愉快なことがありさうに思はせる。一軒毎に玄關前をランプで照らし、更に壁を沿ふて五個のランプが外庭を照らしてゐた。

伍長は中庭を横斷する丸み板を渡つて一番小さな士官室へとネフリユードフを案内し、玄關の段を三ツ上つてから先づ小さなランプの點いてる油煙臭い座敷の次の間へと通した。

すると暖爐の前に立ち、木綿の襯衣にネクタイを附け黒いヅボンを穿いた兵士が、長沓の片足を脱いで靴の代りとしてサモワール（煖室爐兼帶の湯沸し）の炭をブーブー焚附けてゐた。ネフリユードフを見ると、サモワールを離れて外套を脱ぐ手傳をしてから奥の室へ行き、『士官殿、客人が見えました。』

『左様か、此方へ入れッて云へ、』とブリブリした調子で云つた。

『さッ、彼方へ、』と兵士は再び戻つて云ひつゝ、復たサモワールの焚附けに掛つた。

奥の室は釣ランプで照らされてゐたが、輻の廣い肩から胴にシックリ適つた墺太利風のジャケッを着た口髭の美くしい赤ら顏の士官が、二本の瓶と喰ひ散らしの肴を載せた白い布を掛けた卓子に向つてゐた。生溫かい部屋の中は强い煙草の臭ひと下等な酒の香で一杯だつた。

ネフリユードフを見ると、士官は直ぐ起つて皮肉な疑ひ深そうな眼をして凝と見た。初めての客に會ふと例でも定つてする此男の癖だ。

『何の御用ですか？』と愛想氣もなく云ふや否、ネフリユードフの返事も聞かない内に直ぐ次

の室へ向て大聲で叫つた。『ベルノーフ――サモワールは怎うした？　何をぐづ〳〵してる？』

『直ぐ持つて行きます。』

『直ぐだぞ。「直ぐ」といふ言葉を忘れちや不可んぞ、』と士官は叫つてギロリと眼を光らした。

『はッ、持つて行きます、』と兵士も大聲で答へつゝ直ぐサモワールを持つて來た。

ネフリユードフは兵士が卓子にサモワールを置く間待つてゐた。士官は引退る兵士の後影を意地の悪い小さな眼で見送りしつゝ、宛も何處を射てやらうと覘をつけるやうに睨みつけた。で、四角な急須に茶を煎れ、アルバート乾餅を鞄の中から取出して陳べつゝ、ネフリユードフに向つて、

『何御用ですか、伺ひませう。』

『或る囚徒に面會する許可を願ひに出ました、』とネフリユードフは起立したまゝ云つた。

『國事犯ですか。國事犯なら法律が禁じてます。』

『イヤ國事犯ぢやありませぬ。』

『先ァ掛けなさい。』

『國事犯ぢやァありませぬが、』とネフリユードフはやをら腰を掛けつゝ、『私が上官に願つて特に國事犯の中に加へてをるもんです。』

『あッ、それなら知つてます。色の黑い脊の低い女でしたナ。渠女なら怎うにかなりませう。紙莫は怎うです。お喫りにならんか、』と紙莫の函を出しつゝ、更に二ッの茶碗に茶を注いで、一つをネフリユードフに薦め、

『さァ、何卒。』

『難有う。甚だ勝手ですが、少とも早く面會したいのでムるが――』

『先ァ夜が長いからお急ぎなさらんでも十分時間があります。今、呼びにやりますから。』

『女の在る處で面會出來ませんか。此方へ呼ばないでも……』

『國事犯の在る處でですか。そりや不可ません。法律に背いてるますから。』

『最う何度も許されてるんですよ。若し私が國事犯人に何か手渡しするやうな危險があつてはならぬといふなら、わざ〳〵渠等の宿舍へ行かんでもマースロワの手を經て容易に渡す事が出來ます。』

『イヤ、そりや大丈夫、女の身體は驗めますから、』と士官は不快らしく笑つた。

『そんなら私の身體もお驗めなすッたら宜からう。』

『イヤ、其麼な事をせいでも何とか計ひませう。』と云ひつゝ士官は急須を取つてネフリユードフの茶碗に注がうとして、『如何です。注ぎませうか――それぢやァ御自由に喫つて下さい。怎うして西比利亞に住んでゐるものは教育のある人に會ふのが何よりの愉快です。御承知の通り我々の職掌は實に憐れ憫然なもので、少し氣の利いた事をしたらヤリ切れません。他から見れば護送士官は無教育な匹夫であつて、我々だからッて初めから如何な職業に生れて來たんぢやないと思つて呉れるものは一人もありません。』

士官の赤ッ面や、香水の臭ひや、指環や、取別けて忌味な笑ひ方がネフリユードフは堪らなく氣に喰はなかつた。が、道中筋は何事にも細心注意して、假初めにも人を馬鹿にしたり腹を

立つたり不快な顏をしたりしないで、誰に對しても奥底なく交際ふつもりでゐたから、鼻持ならぬ士官の態度にも凝と辛抱をして、士官の心持をも呑込んで極めて眞摯に、

『併し貴下の御職掌上、可哀想な囚徒の苦痛を幾分なりとも輕くする事が出來たら定めし御愉快でせう。』

『囚徒の苦痛とは？　貴下は猶だ渠奴らがドンナ人間だが、良く御存じないと見える。』

『どんな人間と云つて、渠等とて特別の變つた人間ぢやありますまい。矢張我々と同樣な人間で、中には全く無罪のものもあります。』

『そりやァ種々な人間がありますから、自然、可哀相にもなります。隨分我々同僚の中には少しも假借しないものもありますが、我輩は成る丈け寛大に見て、出來るだけは樂にしてやります。お庇で渠奴らより此方が遙に苦勞してゐます。大抵の者は法律一點張の杓子定規で、較やともすると直ぐズドンとやる。だが、我輩は目を掛けてやります……如何ですナ、最う一杯、』

と云ひつゝネフリユードフの茶碗に茶を注いで、『貴下の御面會なさらうといふ婦人、アレは何

者ですナ？』

『渠女ですか。渠女は頗る可哀想な女です。故あつて娼妓に沈淪れた上に、今度は毒殺の嫌疑で、妙な鉗誤から不當な宣告をされました。だが、其實は極の善人です。』

『爾ういふ事は能くあります。』と士官は頻りに頷きつゝ、『現に恁う云ふ例もあります。カザンの女でエンマといふものがありました。生れは匈牙利ですが、眼つきが彼斯人そつくりで……』と云ひつゝ憶出し笑ひの出さうなのを強に嚙殺さうとしたが、制へ切れないでホク〳〵笑ひながら、『容貌から風采から伯爵夫人と云つても恥かしく無い——』

と饒舌り立てやうとする士官の話の腰を打つて、ネフリユードフは以前の話題に涙を戻さうとして、

『併し貴下は御職掌がら囚徒の苦痛を輕くしてやる事が出來るから、其のお心持で慈悲を掛けておやんなすつたら、定めし御愉快だらうと存じます。』と一々明亮と言葉を句切つて外國人が兒供にでも話すつもりで、嚙んで含めるやうに云つた。

が、士官はギラ〳〵した眼でネフリユードフを凝と看守りつゝ、少とも早く言葉の途切れるのを待つて、今でも眼前に仄ついてる波斯人の眼つきそッくりの匈牙利の女の話をしやうとモズ〳〵してゐた。

『無論其通り、』と周章て臭つて、『我輩も其のつもりで目を掛けてやります。處で、今お話し仕掛けた匈牙利の女――一體何をしたと思ひます?』

『イヤ、其のお話なら伺はんでも宜い、』とネフリユードフは膠もなく、『平たく云ふと私は今では女の話は大嫌ひになりました。』

士官は呆氣に取られて妙な顏をしてネフリユードフを見たが、

『如何です、茶は?』

『イヤ、最う澤山。』

『はッ、左樣か。それでは、ベルノーフ、』と士官は次の室に控へてゐる兵士を呼んで、『此の方をワクーロフの許へ御案内しろ。夫から國事犯の宿舍へお通し申すやうに――點呼の時間までは話してをられても宜しいからナ。』

第九回

ネフリユードフは從卒に案内されて赤色ランプの火影小暗き中庭へと出た。

『何處へ行く?』と護送兵は出合頭に從卒に訊いた。

『五番の別房へ。』

『此道からは行かれん。錠が下りてる。他の道を廻らんけりや不可ん。』

『怎うして? 錠が下りてゝも開けられませう。』

『取締が鍵を持つて村へ行つて了つた。』

『仕樣が無エナ。では此方へ、』と從卒は更に先へ立つて歩み板を渡りつゝ他の入口へと案内した。宿舍の中の宛で蜂の子が巣立ちをするやうな騷ぎは内庭にまで聞えた。近づけば近づくほど段々騷ぎが高くなつて、入口の扉が開くとガヤ〳〵した騷ぎに忽ち叫る聲、調戯ける聲、笑

ふ聲と、一々別々に聞取れた。其外に鎖はガチャガチャする。お馴染の不快な臭ひはプウンと鼻を衝いて來た。

何時でも爾うだが、此のガヤ〳〵した聲や鎖の音や噎返るやうな臭ひが不快な懊となつて、ネフリユードフの心の中に道德的の眩暈を生じ、之が復た生理的の病氣となつて、心持と身體と双方の不快が一緒に混雜がつたり互に段々と募らし合つたりした。

入ると直ぐ、一番先きに眼に留つたのは大きな臭い桶で、その端に一人の女が腰を掛けてゐた。其前に麵麭形の帽子を横たに冠つたクリ〳〵坊主の男が立つてゐて、二人は頻りと何か話込んでゐた。

ネフリユードフを見ると男は眼をパチ〳〵させながら、

『天子様だッて小用の辛抱が出來るもんか。』

女は何にも云はずに端折つた裾を卸して羞耻るさうな風をした。

入口から長い廊下が續いて、澤山の室の扉口が列んでゐた。一番初めは夫婦者の室で、其次

は獨身者の室で、ズット奥の端れの小さな二タ室が國事犯に宛てゝあつた。

此建物は精々が百五十人ぐらゐしか收容出來ないのを四百五十人も入れたのだから、何の室も何の室も隙間もなくギッシリ詰つて、通り路までが一杯に溢れてゐた。立つてゐるものもあれは板の間に臥てゐるものもあり、空の急須に湯を注ぎに行くものもあれば湯を注いだのを持つて歸るのもあつた。タラスは丁度湯を注いだ急須を持つて歸る處で、ネフリユードフの後影を見ると、急いで追掛けて來て眷かしげに會釋した。タラスの朴訥な柔しい顏は鼻の上と眼の下の眞黑な瘢痕で毫なしに破壞されてゐた。

『怎うしたエ、其の瘢痕は？』

『少とベエやり合つたンでがんす。』とタラスは笑つてゐた。

『此奴等は始終中喧嘩ばかりしてゐます。』と護送兵は云つた。

『それがネ、悉皆女の喧嘩と定つてゐるのサ、』とタラスの踵から隨いて來た囚徒は、『此野郎もフキョードカの盲目と打り合つたんでサア。』

『フキヨードーシャは怎うしたい？』

『無事でをりやす。茶を煎れて持つてッてやる處でがんす。』とタラスは答へつゝ夫婦者の室に入つて了つた。

ネフリユードフは扉口から覗いて見ると、男や女がゴチャゴチャ入交つて、寢棚の棚の上も下も一杯で、洗濯物の湯氣が滿室に閉籠つてゐる中に、女がベチャクチャと限界なしに喋べつてゐた。

隣室は獨身者の室で、愈々ゴタクサしてゐた。入口から通り路までが寸分の際間なく、濡れた着物のまゝの囚徒が何かの相談でガヤ〳〵して路を塞いでゐた。護送兵の說明に由ると、骨牌で作つた小牌で賭博をして勝つたり負けたりしたものを胴親が小牌と引替に辨當代から差引いて勘定してゐる處ださうだ。で、護送兵とネフリユードフが來たのを見ると、手近の連中は俄に默つて了つて忌々しさうに二人を凝視めた。只見ると、其中にネフリユードフが豫てから知つてる顏のフキヨードロフが何時でも腰巾着のやうに伴れてる顏の脹んだ眼の凹んだ若者

と一緒に列んでゐた。其傍に鼻缺けの痘痕面の見るも不快な浮浪人が立つてゐた。此奴は繩拔けをして逃出した時、一緒に逃出した仲間を沼で殺して肉を喰つたといふ評判の男である。濡れた上衣を肩へ引掛けたまゝ傍若無人な面して遠慮氣もなくネフリユードフを眤と見つゝ道を避けやうともしなかつたので、ネフリユードフの方から避けて通つた。

怎ういふ世界を最早大分看慣れて來たとは云へ、殊に此の三ヶ月間は三四百人の囚徒を何遍となく、或はカン〳〵した日中に足の鎖を重さうに引張つてフカ〳〵した砂塵の中を行く處や、或は途中の休憩所や、或は別々の宿舍や、或はボカ〳〵した好い天氣に宿舍や休憩所の運動場で鐵面皮に女を嬲つたり、挑つたりする現狀を何度も見屆けたとは云へ、夫でも爰へ來る度毎に多勢から眼を着けられ、現に今も眼を着けられてゐると思ふと、渠等に合はす顏が無い自分の罪の恐ろしさに苦められた。此の羞耻心と罪の悔とに太とく苦められる上に囚徒共の破廉耻の醜體を見るのが益々堪らなく不快であつた。渠等にして見れば、怎ういふ境涯に置かれては誰だつても渠等のやうになる外無いとは十分知り拔いてゐても、夫でも此の不快な感情を取去

る事は出來なかつた。

『喰つちやァ寢るのが渠奴等には一番サ。』とネフリユードフが國事犯室の傍へ行つた時、皺枯れ聲でいふものがあつた。其跡から直ぐ猥褻の汚ない大口を叩くと、多勢が一度にドッと笑ふ聲がした。

第十回

獨身者の室の前を通り越して了うと、案内の伍長は點呼の時間前に迎へに來ると約束して、ネフリユードフを殘いて去つて了つた。

伍長が去つて了うと直ぐ、一人の囚徒が素足で鎖を引摺らないやうに手に持ちながら祕々と來て、汗臭い酸ッぱい臭ひをネフリユードフに浴びせ掛けつゝ傍へ寄つて、こッそりと低音で『旦那、お願エがごぜェやす。俺らァ仲間の若エものを多勢の奴等が白痴にしやす。此奴に酒を飲ませやしてナ、到頭お前樣、今夜の點呼にはカルマーノフと名乘らせる事になりやした。

何卒、旦那のお力で留めて呉れさッせェ。俺らには怎うにもなりましねェ。迂濶り口出しすれば打殺されて了ひやす……』

と誰かに聞かれやしまいかと恐々四方を見廻しながら、コソ〳〵と云つて了うと直ぐ逃げて行つた。

之は怎ういふ仔細だ。カルマーノフといふ鑛山へ遣られる重罪人が流刑囚の或る若い男と顏が肖てゐるので、何でも名前を取り換へて自分の身代りとなつて鑛山へ行つて呉れと賴んだのだ。賴んだといふより强に壓しつけたのだ。

ネフリユードフは此話を或る囚徒から聞いて、一週間前から能く知つてゐたので、愈々今夜は身代りになるのだと聞くと、十分合點んだと頷いて見せつゝ側目も觸らずに眞直ぐに行つた。

此事を告げに來た囚徒も前から知つてゐた。エカテリンブルグで女房が一緒に隨いて來るのを許して貰つて呉れとネフリユードフに賴んだ男である。三十年配の中脊の至つて平々凡々た

る百姓型の男で、謀殺強盗未遂で徒刑に處せられたのだ。其の名をマカール・デーウヤンといふ。

此男の犯罪は頗る奇怪を極めてをる。當人が其顚末を話した時に、マカール當人の犯罪といふより寧ろ本體の分らぬ魔の仕業であると云つた。其咄に由ると、或る時或る旅人がマカールの親仁の家へ、二十哩程離れた村まで行く橇車を傭ひに來た。マカールは親仁の命令で、橇車に馬具を附けたり衣服を着更へたりして準備をしてから、客人と一緒に茶を飲んだものだ。すると、お客は何の氣なしに之から嫁を貰ひに歸るのだが懷中にはモスコーで儲けた五百圓を持つてゐると話した。此話を聞くとマカールは裏から斧を持つて來て、橇車の中へ積んだ秣の下へ祕と忍ばして置いた。

『あんだつて斧なんか持出したもんだか俺にも分ンねェだが、』とマカールは云つた。『誰だか知んねェが、耳の端で一斧を持つてけ、斧を持つてけ、』といふだから、俺ァ斧を持出して秣の下に祕して置きやした。夫から橇車を走らかして、斧なんかは全で忘れてやした。するとお前樣

約束の村まで愈々四哩といふ四ッ辻から爪尖上りに阪になりやす處で、俺ァ橇車から降りて後から隨いて行きやすと、又誰だか知んねェが耳の端で、「あじを茫然してる。阪を登り切つて了つたら人が來ベェ、村があるだ。折角の鳥がおッ走つて了うベェ。行るなら今の中だに、おえねェ野郎だ、」と聲がしやした。すると妙に氣がフラ〳〵して、何の考もなしに秣の下へ手をやりやすと、斧の方から俺の手へ摑つて來るやうな鹽梅で、俺ァ茫然と斧を手に持つてやすと、客人は目ばしこく發見けて、「あじをする?」と云ひやした。俺ァ最う夢中だ。唐突三寶、斧を振上げて打殺さうとしやしたが、客人の方は敏捷エだ、俺が斧を打下さうとする手を素早く取つて押へて、「此撥賊、惡戯けた所爲をするねェ、」と忽ち俺を擲けて筋斗打たしたダ。俺ァ初めてハッと氣が付きやしたが、喧嘩するわけは無エだから溫和しく兩手を縛りつけられて、橇車へ括られて、警察へ伴れて行かれやした。夫から監獄へ投ち込まれ、裁判へ廻されやして、村の衆からは俺が惡氣の無エ人間で之まで唯の一度も惡事をした事のねエ男だと申し立てゝお慈悲を願つて呉れやしたし、俺が以前奉公した主人からも正直者だから赦してやつて呉れと嘆願

して呉れやしたけんど、辯護士を賴む錢も無エだから到頭お前樣、四年の懲役にされやした。』

此男が同じ村の若い者を助けやうとするのだ。此話を人に漏らしたと知れたら最期、首を縊められて了うかも解らぬが、生命を差出しても可哀相な若者を助けたさに囚徒の祕密を内々でネフリユードフに訴へたのだ。

第十一回

國事犯人は狹こましい一タ間に收容されてゐた。入口は二室とも廊下の仕切られた奥に附いてゐた。ネフリユードフは進んで奥へ行くと、護謨ジャケツのシモンソンが松薪を手に暖爐の前に蹲踞んでゐるのを見た。暖爐の扉は内部の火氣で動いてゐた。

ネリフリユードフを見るとシモンソンは突出した眉毛の下から見上げつゝ、蹲踞んだなりに手を延ばした。

『能く入來つた。貴下にお話し仕たい事があるのだ、』と用ありげに云ひつゝ眤とネフリユード

フの眼を見た。

『何ですかネ?』

『彼刻でお話しする。今は忙がしいから。』

と云ひつゝシモンソンは暖爐に向つた。例の自己流の理窟で少しの熱力をも無益にしまいとする爲めだ。

ネフリユードフは軈て最初の入口へ入らうとすると、其途端、最一つの扉口からマースロワが腰を屈めながら柄の取れた樺の箒で一と塊まりの塵埃を暖爐の方へと掃寄せつゝ出て來た。白いジャケツの裾からけで、頭髪へ塵埃を浴びせまいと眉毛の下まで頭の手巾を卸してゐた。ネフリユードフを見ると眞赤になつたが、イソ〳〵と箒を投り出すと共に汚れた手を裾で拭きつゝネフリユードフの前まで來た。

『お座敷の掃除かネ、』とネフリユードフは手を握つた。

『昔しの下婢どんよ、』とマースロワは莞爾として、『ですけれども塵埃ッたら! 貴郎には迚も

想像出來ませんワ。掃除してもしても追付きませんのよ、』と今度はシモンソンに向つて、『貴郎のスコッチは乾いて?』

『大抵宜からう、』とシモンソンは答へつゝマースロワを見て妙な眼眸をしたのが、ネフリユードフの胸にぐッと應へた。

『さう。それぢやァ外套を代りに乾しませう……』と云ひつつマースロワは二番目の扉口へ入らうとして最初の入口を指さしつゝ、『彼處に悉皆居りますよ。』

ネフリユードフは扉を開いて突と入ると、寢臺の棚の下の段に小さなブリキのランプが薄朦朧と狹い部屋を照らしてゐた。室内は冷々して、塵埃がまだ落付かないから塵埃臭く、濕氣臭く、煙草臭かつた。小さなブリキのランプが近所を照らしてゐたが、寢褥は蔭になつてゐて、眞黑な影が壁に映つてゐた。

賄役に指名された二人が湯と食物を取りに出掛けたきりで、外の國事犯連は大抵此の狹苦しい中に凝まつてゐた。ネフリユードフの古親昵のヅーホーワも鼠色のジャケッ姿で此の中に在

た。以前よりは一層痩れた上に、愈々色蒼が黃ばんで　大きな眼ばかりをキョト附かせつゝ前額に青筋を出して、新聞紙を廣げた上で髮束ない手つきで莫宮を卷いてゐた。

國事犯の中でネフリユードフが一番氣樂らしく思つたエシリヤ・ランツエーワも矢張此の部屋に在た。此の女は女房役をしてゐて、此の慘憺極まる境涯の眞只中にさへ溫かい家庭の樂みと興味とを添えやうとしてゐた。彼女は恰もランプの傍で、袖を捲り上げて日に燒けた赤い手を出し、茶碗やコップを拭いては寢褥の棚の上に敷いた布帛の上に列べてゐた。まだズブ若い綺麗な女で、悧怜さうな溫和しさうな顏をしてゐた。嫣然笑ふと忽ち愛嬌が覆れるやうに活き〳〵と浮立つて人を恍惚とさした。恁うした美くしい笑で今もネフリユードフを迎へて、

『呀、郎下は露西亞へお歸りになつたとばッかし思つてましたワ。』

暗い隅の方にマーリヤ・バーウロナが居て、邪氣無い口吻でタワイもない咄を喋つてる髮の毛の房さりした小さな女の子に掛り切つてゐた。

『善く入來つた、』とネフリユードフを見ると直ぐ話し掛けた。『カチューシャにお會ひなすつ

て？　妾の許にもお客様があつてよ、』と小さな女の子を指さした。

[1] アナトール・クリルツォーフも此の中に在た。フェルトの靴を穿いたなりに隅ッこの寢榻の上で槃座をかき、短かい毛皮の上衣の袖に兩手を手繰し込んで身體を慄はしながら燃ゆるやうな眼でネフリユードフを見てゐた。

ネフリユードフは急いで其の傍へ行かうとすると、入口の右手に眼鏡を掛けた赤い縮れ髪の護謨ジャケツの男が座り込んで、始終莞爾々々してゐる美人グラーベッと話してゐた。此男は著名な革命黨員の[2]ノウォドウォーロフである。總ての國事犯中でこの男がネフリユードフは一番大嫌ひだから、急いで形式ばかりの會釋をして通り過ぎて了はうとすると、ノウォドウォーロフは眼鏡の中から碧い瞳を光らして八の字を寄せつゝ、細い手を伸ばして握手を求めた。

『甚麼です、御道中は御愉快ですかナ？』と麗々しく誰にも解り切つた皮肉を云つた。

『はァ、種々面白い事がありました、』とネフリユードフは此の解り切つた皮肉を故と眞面目に聞いて、去氣ない會釋をしてクリルツォーフの方へ行つた。

が、ネフリユードフは表面だけは虛心平氣を粧つてゐたが、其實内心は虛心平氣でゐられなかつた。折角和いでゐた心持が不快な事を云ふか爲るかと看え透いてるノウォドウォーロフの一言で滅茶苦茶にされた。

『甚麼です？』とネフリユードフはクリルツォーフの冷たい慄へる手を握りながら云つた。

『大分好いですが、何分暖たまらんでナ、此通り全濡れとなつた、』とクリルツォーフは急いで冷え切つた手を袖の中に隱しつゝ、『此室が馬鹿に寒い。御覽なさい、ホラ、窓が破れてる、』と鐵格子の窓の硝子が二ケ處も破れてゐるのを指さした。『貴下は怎うです？　お變りありませんか。暫らく見えませんかつたナ。』

『護送士官が嚴しくて容易に面會を許して呉れませんのでナ。併し今日の士官は寛大だッた。』

『寛大だッて、如何さま、』とクリルツォーフは云つた。『渠奴めが今朝ドンナ事をしたかマーリヤに聞いて御覽じろ。』

マーリヤは隅ッこの方から、今朝出立間際に此士官が囚徒の手から大切な女の子――今では

マーリヤが引取つて世話をしてゐる――を沒義道に引奪らうとした顚末を話した。

『聯合して抗議を申立てる絕對的必要があると思ひます、』とヅーホーワは斷乎とした調子で云つた。が、矢張オド〳〵と沈着かぬ體で、『シモンソンが抗議しましたが、あれだけでは足りない。』

『どんな抗議をしやうッてのだネ?』とクリルッォーフは顏を顰めながら云つた。何かにつけてヅーホーワが眞率を缺いて、如何にも故とらしく仰山なのが常から癪に觸つてゐたのだ。

『時に、貴下はカチューシャを探してらッしやるのかネ?』とクリルッォーフは再びネフリュードフに向つて、『カチューシャは限界なしに働いてゐる。此室――男の室の掃除を濟ましたかと思ふと、既う女の室の掃除に掛つてゐる。だが、イクラ掃除をしても蚤ばかりは退治られない。奴等は勝手放題に我々活きた身體を喰ひをりますワ。』と云ひつゝ隅ッこのマーリヤを顎で指しつゝ、『マーリヤ、何をしてる?』

『マーリヤはネ、』とランッェーワは答へた。『貰ひッ子の頭髮を櫛いてやつてますよ。』

『頭髮を櫛くのは好いが、あの兒供の蚤や虱を振り搖いちやァ困るぜ。』

『大丈夫だよ。此子は最う清潔になつてるからネ。』と云ひつゝマーリヤはランッェーワに對つて、『エミリヤ、此子を少と預かつてお呉れナ。妾は鳥渡とカチューシャの手傳ひをして、スコッチを持つて來てやるからネ。』

『あいよ、』とランッェーワは母親氣取で女の子を請取つて、小さな露出しの手を懷ろで暖ためつゝ前垂の上に抱いて砂糖を一塊與つた。

マーリヤが出て行つた時、晡役の二人は湯と食物を持つて歸つて來た。

第十二回

歸つて來た二人の內の一人は、脊の矮い瘠せッぽちの若い男で、羊の皮に絲紗を被せた上衣を着て踵の高い靴を穿き、煮湯を入れた湯沸し二つを手に下げ、布に包んだ麵麭を小脇に抱へてッカ〳〵と足早に來た。

『やッ、公爵が復たお見えですナ、』と云ひつゝ茶碗の傍に湯沸しを置き、ランツエーワに麵麭を渡して、『素敵なものを買つて來たよ、』と言足してから、羊の皮の上衣を脱いで棚の寢榻に寢てゐるものゝ頭へスッポリと投げ、『マーケルが乳と玉子を買つて來た。今夜こそは眞物の夜會が開ける。ランツエーワが復た小まめに精々と奇麗好きを發揮しをる哩、』と笑ひながらランツエーワを見て『さッ、茶を煎れて貰ひませう。』

此の男は外貌全部が身體の擧動から聲音から容貌まで一切合切が元氣と愉快とで充滿してゐた。之に反して最一人はむッつりと鬱してゐた。矢張脊矮で骨ッぽくコッ〳〵してゐて、頰骨が高く、唇が薄く、美くしい茶色の眼が離れ過ぎてゐて、全體が陰氣臭かつた。古い綿入れの上衣に長靴を穿き、護謨上脊を掛けてゐた。牛乳を二タ鑵と樺の皮で作つた丸い函を二つ箱手に提げて來たが、ランツエーワの前に置いてからネフリユードフに一寸つと輕く頭を下げたばかりで眤と凝視め、忌々濕ッぽい手を出して握手をし、夫から直ぐ鑵から買つて來た物を出し初めた。

此二人は何れも人民黨だ。元氣な方はナバートフといふ百姓、陰氣な方はマーケル・コンドラーチェフといふ職工で、マーケルは一人前となるまでは革命黨にならなかつたが、ナバートフは十八の時最う加盟してゐた。ナバートフは非凡の才子で、村の小學校を卒業しない中に中學校に移つて、自分の稽古したものを直ぐ他で教へて自活をし、中學を卒業する時は金牌を貰つた。が、中學の第七年級時分から人民黨となつて、世の中の忘れられた同胞を助けやうと決心してゐたから、卒業しても大學へ入らないで、或る大村の書記となつた。が、人民を集めて講釋をして聞かせたり勞動組合を組織したりしたので、忽ち捕縛されて八箇月の禁錮に處せられた。刑期滿ちて放免されると、尙だ警察の監視が附いてゐる内に、他村の小學教師となつて復た同じ事を繰返したから直ぐ復た捕縛されて、今度は十四ヶ月の禁錮になつた。が、其確信は其度毎に愈々強くなつた。

其後ペルム縣へ追放されたが、直ぐ脫檻した。復た捕まつて七ヶ月監獄に入れられて後アルハンゲルに追放されたが、復た逃出して復た押へられ、到頭ヤコーツクに送られることゝなつ

た。こんな鹽梅に丁年に達するまで半分は牢へ入れられたり流されたりして過ごして了つた。

が、こんな痛い目に度々會つても一向苦にしないどころか、益々勇氣を增し愈々反抗心を長じた。到つて活潑な若者で、元氣で陽氣で勢ひがあつた。何をしても後悔した事がなく、役に立たない將來の空想なんぞには決して耽らないで、唯一圖に現在の仕事だけに才能力量と實際知識の有らん限りを盡し、身體が自由な時は終生の目的たる田舍の勞働者の進步と團結の爲めに苦辛經營し、監獄に入れられゝば入れられるで獄外と通ずる工風を案じだり、或は事情の許せるだけは愉快に自分を初め同檻の者を樂ませる計畫に骨を折つた。

就中、此のナバートフは元來が極社會的の人間で、自分一身に就ては何の慾も得もなく、自から奉ずるには頗る薄かつたが、他人の爲めには十分慾を張つて、腕限り堪限りに日となく夜るとなく寢食を廢して骨を折つた。一個の勞働者としても頗ぶる勤勉で行屆いて且ぬかりが無かつたが、其上に天性克己心が强く、格別勤めないでも自づと慇懃で、他人の希望や說には耳を傾けて善く容れた。

親父は死んで了つて、阿母だけが存命してゐた。到つて文盲な迷信の强い殁分曉の老婆さんであつたが、ナバートフは監獄にさへ在なければ阿母の幇助をしたり、昔の友達と遊んだり、俗に「犬の足」と云ふ安煙草を喫んだり、拳闘の試合をしたりする傍ら人民が如何に國家の爲めに誑かされてゐるかといふ慷慨咄をして、怎うがなしてなりとも政府の羈絆を脫しなければならぬと說いて聞かした。が、ナバートフが革命は怎うするのかと話したり考へたりする時イツデモ思ふは、自分等の出身した人民の狀態をソックリ今日の儘にして置き、唯だ十分な土地を與へて官吏や紳士閥のみを無くして了ひたいのだ。渠の說に由ると、革命は——髮がノウオドウオーロフや其門下のマーケル輩の意見と違ふ點で——人民の生活の根本形式を變更するのではない、全組織を根こそぎ破壞するのでは無い、此の古くから傳はる貴い宏壯な建物の基礎には少しも手を着けないで、唯だ內部の造作だけを變へやうといふのである。

宗教上の見解に就てもナバートフは矢張百姓のお手本であつた。純理上の疑問や有らゆる起源中の起源や來世の問題なんぞは全然考へなかつた。「神」といふものはアラーゴ同樣に渠には

無用な前提で、世界の創造なんぞは甚麼でも宜いのだ。モセスが云つた事とダーウヰンが云つた事と何方が眞實であつても、關はなかつた。同志の者たちが頻りと難有がるダーウヰン説の如きも六日間に天地を創造した昔咄と同樣の頭腦のオモチヤに心得てゐた。

世界が如何して創造されたかといふ疑問は棄に取つては何の興味が無かつた。夫よりも怎うしたら此の世の中を最善に生活する事が出來るかといふ問題の方が大切であつた。來世の事なんぞは少しも考へないで、親代々奉じてゐた百姓普通の堅固な安心な信仰を心の奥で信じてゐた。卽ち動物界でも植物界でも、形こそは絶えず變化して、肥料が穀物となり、穀物が食品となり、お玉杓子が蛙となり、毛蟲が蝶となり、團栗が樫の木となつても、其實體は決して滅びないと同樣に、人間も亦た決して死なずに唯だ輪廻してゐるものだといふ信仰を堅く信じてゐた。夫故に當から死ぬのを少しも恐れないで、寧ろ喜び勇んで死に猛進するのであるが、此信仰を鼻に掛けたり口にしたりする事は決して無い。且働く事が何よりも好きで、始終中何かしら實際的の仕事に身を委ねてゐて、同志のものをも專ら其方面に鼓舞してゐた。

最一人の國事犯のマーケル・コンドラーチエフといふはナバートフとは全然違つた種類の男であつた。十五の時から働き初めたが、人から酷使はれてゐるといふ漠然たる感じを紛らす爲めに酒を喫んだり煙草を燻かしたりした。初めて人から馬鹿にされてゐると思つたのは工場の丁稚をしてゐた兒供の時分、クリスマスのお祭の晩に主人の内儀に呼ばれて行つた時、自分は一文笛や林檎や金で塗つた胡桃や無花果ばかりしか貰はなかつたのに、主人の子供はお伽話のお寶のやうな立派なもの、後日になつて聞いたら五十圓以上のものを貰つたのが業腹でならなかつた。丁度三十歳の時だ。有名な革命黨の女が工場の女工と化け込んでコンドラーチエフが人並勝れた才物なのを見込んで書物や雜誌を呉れ、段々と勞働社會の悲慘な情態から其の救治策をボツ〳〵講釋して聞かせた。で、此の壓制の手から自分自身なり又他の者も免れる事が出事るのが良く合點めた時は、現在の狀態の不公正極まつてゐるのが今更のやうに一層殘酷に一層恐ろしく思はれて來て、少とも早く身を免れて自由となりたいのは勿論、此の如き不公正を敢てするものどもを思ひ知らしてやらうと逸り立つた。

恁ういふ風に眼が開いて來たのは畢竟は物識になつたお庇だからと、益々熱心になつて知識の獲得に一身を捧げた。尤も社會黨の理想の實現と知識の力ばかりで達せられるものか什麼かは良くは解らなかつたが、現に己れが境涯の非理不當なのを敎へて呉れた知識なら更に進んで不公正其物をも救ふ事も出來さうなものと漠然と妄信し、且物識となれば自然人の上に立つ事が出來ると思つたから、酒や煙草は廢めて了つて、有らゆる餘裕を盡く捧げて益々勉强した。

女の革命黨員はコンドラーチエフの欲するまゝに課業を授けたが、如何なる種類の知識にも渴する渠が理解の早いのには舌を卷いた。二年で代數から幾何、殊に一番好きであつた歷史に通じ、藝術、評論、就中社會主義の書籍を博く渉獵した。

其内に此の女の革命黨員は捕縛された。コンドラーチエフも禁止書籍を持つてゐたのを發見け出されて一緒に監獄に投り込まれて、其後ウォーログダ縣に流された。爰で計らずもノウオドウォーロフと親昵になつて、愈々深く革命黨の問題に關係した書籍を讀めば讀むほど社會主義の信念を堅くした。で、刑期が滿ちて放免されると大同盟罷工の首領となつて、罷工の最後

が工場を破壞して主人を殺して了つたので、再た捕縛されて今度は西比利亞にやられる事になつた。

コンドラーチエフの宗敎に關する意見も經濟的現狀に對する意見と同樣に矢張否定的であつた。生れおちから吹込まれた宗敎の馬鹿々々しいのを知つて骨を折つて此の羈絆から免れやうとして、初めは恐かな怯くだツたが、末には寧ろ好い氣持になつて先祖代々騙されてゐた腹慰でもするやうに思ふ存分に毒々しく坊主やお宗旨を罵つたり輕蔑したり嘲つたりして少しも飽きなかつた。

且習慣的に禁慾家であつて極僅かなもので滿足してゐた。其上に兒供の時から勞働しつけて筋肉が鍛へられてゐる多くの人だちと同樣に、骨折仕事なら何をさせても樂々と敏捷こくやつて退けた。が、自分の好きなのは監獄や驛々の宿舍で閑を見ては讀書する事で、此の頃はカール・マルクスの第一卷を勉强して大切なお寶のやうに袋の中に祕と忍ばして置いた。で、仲間のものゝ誰とも餘り打解けないで無愛想であつたが、ノウオドウォーロフにのみは深く傾倒し

て、其の口から出づる各種の問題の批評は侵すべからざる眞理と思つてゐた。

且又、コンドラーチエフは女を非常に輕蔑して、大事な活動をする場合の足手まとひだと見下げ切つてゐた。が、マースロワばかりは憐んで親切に厚意を盡し、上流社會のものが下層の人民を虐げる實例だと見做してゐた。夫故貴族の權威を笠にマースロワの一生を誤まらしたネフリユードフが大嫌ひで、顏を合はしても決して口を利かず、忌〳〵手を出してネフリユードフに握らしても自分の方からは決して握り返さなかつた。

第十三回

暖爐の火は焔え上つて暖かになつた。茶を煎れて一々茶碗や水呑に注いで乳を入れ、「ラスク」や取り立ての麥や小麥の麵麭や乾酪や茹玉子や犢の頭や脚を卓子代りの寢榻の棚の白布の上に列べ、多勢其前に集つて饒舌つたり啗つたりした。ランツエーワは箱の上に腰を掛けて茶のお給仕をした。殘餘の人間は何れも其周圍に集つてゐたが、クリルツォーフだけは濕れた

上衣を脫いで乾いた膝掛に纏まつて、己れの床に臥ながらネフリユードフと話してゐた。

寒い濕々した道中をした後、塵埃ッぽい汚ない宿舍を掃除した後、骨を折つて食品を周旋した後、飲んだり食つたりして漸つと腹が充ちくなつたので、一同元氣に勇み切つてゐた。殊に壁越しに隣房の普通刑事囚が泣いたり笑つたりして暴れ散らし、キイキィ聲を出してドタンバタンする音を聞くと、猶だしも己れ等の境涯の方が遙に勝しなのを愉快に思つた。丁度海上の離れ小島に暮してゐるやうに、暫しなりとも自分の周圍の墮落や苦痛から遠ざかつたやうな心持がして、益々元氣附いて興奮し、各自に好き勝手な咄をした。が、苟にも自分の身の上咄や之から將來の事なんぞは決して噯氣にも出さなかつた。

若い男と女と寄合へば何處にも有り勝ちで一向珍らしくは無いが、殊に彼等の境涯のやうに夜も晝も一緒に置けば自然好きになつたり嫌ひになつたりして粘着き合ふのは當然で、大抵の男女は出來合つてゐた。

ノウオドウオーロフは美くしい愛嬌のあるグラーベッと出來合つた。此のグラーベッは尙だ

齡の若い無思慮な女である。尤も學校の勉強だけは眞摯に濟ましたので、革命黨の問題の如きは全然頓着しなかつたのが、何時となく時勢の風潮に動かされて到頭此渦中に捲込まれた果が追放になつた。此女は以前から男を騙すのを長處にして、監獄に繞がれ裁判に引出される最中でさへが自由であつた時と同樣に、男を綾なすのを一番の樂みとしてゐた位だから、西比利亞へ送られる此道中筋に首尾よくノウオドウオーロフを生擒にしたのは愉快で堪らなかつた。が到頭此方からも男に惚れて了つた。

夫れから例のヅーホーワは元來が男と戀をして見たい性質で、相惚の相對に渴ゑてゐたくせに、不思議と是迄一度も男から戀された事が無かつたが、今度も亦或時はナバートフが好きになつたり或時はノウオドウオーロフが好きになつたりして兩天秤に思ひを運んでゐた。クリルツォーフは又マーリヤに對して戀らしいものが動いた。全く男が女にする眞の戀が萠え初めたのだが、マーリヤが戀を卑しむのを知つてるから、朋友づくの通り一遍の友情やマーリヤが柔しくして呉れる親切を謝する心持に內心の焦るゝ思ひを紛らしてゐた。ナバートフは又ランツ

エーワと互に思ひ思はれて頗る複雜な交となつてゐた。尤もランツエーワは定つた良人のある身で、丁度マーリヤが淸淨無垢の高潔な處女であると同樣にランツエーワは亦良人一人を大切に守る貞操正しい高潔な妻であつた。

玆に鳥渡つと此エミリヤ・ランツエーワの身の上咄をしやうなら、エミリヤは尙だ十六の女學生盛りの其頃ペテルブルグの大學生であつたランツエーフと相愛して、十九の時に尙だランツエーフが大學を卒業しない內に結婚した。然るに夫のランツエーフは大學の四年生の時に學生騷ぎの卷添を喰つてペテルブルグ退去を命ぜられると共に革命黨となつたので、エミリヤも醫學修業を中途で罷めて良人の踵を追駈けて一緒に革命黨となつて了つた。

エミリヤは勿論良人を豪い立派な人物と思込まなければ惚れもせず結婚もしない。確に豪い立派な人物と見込んで惚れた結果が婚禮したのだから、何事も良人次第になつて良人が思ふ通りに世の中を見るのは當然である。良人は初めに學問を人生の目的と思つてゐたから自分も一生懸命に勉强したので、良人が革命黨になつたから自分も矢張革命黨になつて了つたのだ。

で、此の社會の現狀は決して此儘に維持すべきものでなく、飽くまでも奮鬪して各個人が自由に發展し得る政治的經濟的狀態に革改するのが人の義務であると良人は聲言して、自分も亦其通りに考へてゐるやうに思つてゐたが、其實、良人の云ふ事なら絶對に眞理だと信じ、何事も良人の心持とピッタリ一致するのを妻たる者の道だと一圖に思込んでゐたに外ならんのだ。

で、今度良人に別れ、二人の間の子を母親に預けて西比利亞へ送られて來たのは何よりも辛かつたが、之も良人の爲めなり、又良人が主張する以上は何の疑ふ事もない主義の爲めだと觀念して潔く覺悟を定めた。であるから遠く離れてゐても心は常に良人と共にあつて、微塵も他し心を起さなかつたが、良人の親友のナバートフが純潔な眞情を捧ぐる愛には有繋に心を動された。勿論ナバートフは道念の高い堅固な男だから妹と思つて愛してゐたのだが、折々に夫れ以上の「或る物」が擧動に出た時は二人ながら愕然とした。が、之が二人の苦みの中の切めてもの心慰となつた。

一行は何れも怎ういふ次第であつたから、艶ッぽい咄の全でなかつたのはマーリヤとコンドラーッエフの二人ぎりであつた。

第十四回

例の通りにカチューシャと内話をするまでの間、ネフリユードフはクリルッオーフの傍で四方山の咄をした序に、先刻廊下で出會つたマカールの下測の犯罪始末と、頼まれた一條を物語つた。クリルッオーフは眼をキラ〳〵光らせつゝネフリユードフを見ながら一心に聞いてゐた。

『我輩は時々思ふ事がある、』とクリルッオーフは不意に口を開いた。『我々は現在渠奴らと一緒に伴れ立つて行くが、渠奴らが如何な奴だか知らんのだ。我々が身を默けて助けてやらうとする人民の片端である渠奴らを知りもしなければ、知らうとも思はない。渠奴らは又一層怪しからんのは、我々を理解しないで、却て憎んで敵視してをる。恐るべきぢやァないか。』

『何が恐ろしい事があるものか、』と此話を小耳に挾んだノウオドウォーロフは傍から嘴を容した。『渠奴らが恐れてゐるのは權力だ。唯權力だけを恐ろしがつて拜んでをる。夫だから現在の權力

者たる政府を拜んで我々を敵視するが、明日にも我々が權力を握れば直ぐ我々を拜んで來る。』

其時恰も壁越しに豪い騷動が持上つて、鏈がガラ〳〵する、罵る、叫く、誰だか打られてるやうで、ドタンバタンした末が、誰だか聲を上げた。『人殺し！　助けて呉れ！』

『如何だい、あの騷ぎは。獸物だ。あれだもの、我々と親密になり得る筈が無い、』とノウオドウォーロフは靜かに云つた。

『だが、君は獸物と云ふがネ、ネフリユードフ公爵が今話した事がある、』とクリルツォーフは片腹痛く思ひつゝ、今聞いたばかりのマカールが生命を投出して友達を助けるべく密告した顚末を物語つて、『此一條は獸物どころか、豪傑の仕業だ。』

『感情的だ！』とノウオドウォーロフは故と皮肉に出た、『だが、我輩には渠奴らの感情や爲る事が到底理解出來ぬ。君等は今の咄を仁義だと思つてるが、外の奴が巧い事をやるのを嫉妬むのかも知れんワ。』

『怎うして貴下は人の美を見やうとしないのです？』とマーリヤ・パウローウナは堪り兼ねて

容喙をした。

『初めから有りもしない美を見る事が如何して出來る？』

『無い事があるもんですか。生命を投出して人を助けやうてのは美ぢやァありませんか。』

『我輩は考へる。苟くも事を成さんとする第一の條件は、』とノウオドウォーロフが定例で理窟を擔ぎ出すと、今までランプの傍で讀書してゐたコンドラーチエフは書物を伏せて一心に師の議論に耳を傾け初した。『飽くまでも空想を避けて實際の有の儘を見なけりやならぬ。我々は民衆の爲めなら全力を擧けて盡しもしやうが、民衆からは何物をも求めやうとしてはならぬ。渠等は唯だ我々の活動の目的物とするだけで、今日の樣に渠等民衆が依然無氣力である間は到底渠等と伍して事を謀る事は出來ぬ、』と恰も講堂で講筵を開いたやうな口吻で、『夫故に今日我々が渠等を指導しつゝある時、猶だ進歩の半途にある渠等の助力を期待するは大に誤つてをる。』

『何が進歩の半途だ？』とクリルツォーフは眞朱になつて、『我々は常に暴慢なる專制に反對する事を聲言してをる。君の云つてる事は何だ。最も横暴極まる專制ぢやないか。』

『少しも專制な事は無い、』とノウオドウオ！ロフは悠然として、『我輩は人民の行かねばならぬ道を知つてゐて渠等に此道を敎へてやるのだ。』

『だが、君の敎ふる道が果して眞正の道であるか、如何して保證出來る。中世紀からツイ十九世紀の初めまで西班牙を中心として行はれた宗門糺彈や佛國革命の殘酷な虐殺の底には丁度君の主張するやうな勝手な議論があつたのだ。シカシ渠等だとて矢張道理から割出した眞正の道と信じたものを行つたのだ。』

『古人が間違つた考へを持つてゐたからつて我輩までが間違つてゐると云ふ理由は無い。殊に昔しの空想家が空想を揑ち上げたものと、我輩が根底ある經濟學上の眞理から編み出したものとは非常な差がある。』

滿室は唯ノウオドウオーロフの聲ばかりで、他の者は皆默つてゐた。

『何時でも議論ばかりしてゐるよ、』とマーリヤが云つた後は復た寂然とした。

『貴嬢は――貴嬢は如何思ひます、』とネフリユードフはマーリヤに訊いた。

『自分の意見を人民に强ゐてはならんといふクリルツォーフさんのお說は眞理ですワ。』

『カチューシャ、お前は？』と何時の間にか傍へ來てゐたマースロワに向ひ、愚な返答をして呉れなければ宜いがと内心に心配しながら訊いた。

『妾、思ひますワ。ノウオドウオーロフさんのやうに仰しやッては人民は散三ですワ、』とマースロワは眞朱になつて、『なんぼ何だつて餘りな蹂躙けやうですワ。』

『爾うとも、其通りだとも、』とナバートフは大きな聲で、『人民こそ好い面の皮、踏んだり蹴つたりだ。人民を苦めたり辱しめたりしてはならぬ。渠等を此淵から救ふのが卽ち我々の仕事だ。』

『ふゥむ、君等の革命の目的は餘程奇妙だナ、』とノウオドウオーロフは空嘯きつゝ默して煙草をスパ〳〵燻かし初した。

『最う彼奴と口を利くのは御免だ、』とクリルツォーフは低言で云つて默つて了つた。

『爾うとも、口を利かん方が宜い、』とネフリユードフは云つた。

第十五回

ノウオドウオーロフは革命黨員一同から重く尊敬されてゐた。が、立派な學者、聰明な人物と見られてゐても、ネフリユードフの眼からは革命黨でありながら世間一般の道德平準以下も以下も餘程下つてる連中の一人に數へてゐた。成程此男の分子たる智力は豪かつたが、其分母たる自分免許は度の知れぬほど愈々豪くて遙に智力を乘越してゐた。

渠の人物はシモンソンとは全で正反對であつた。シモンソンは一々道理に隨つて動いて何でもテキパキと決行する男らしい質だが、ノウオドウオーロフは之に反して何でも無い出來心を押通さうとしたり、感情に逸つて仕た事を辯護する爲めに理窟を揑上げたりする女に能く有る質の人間である。

ノオドウオーロフの革命的活躍はドレホド雄辯に口賢こく且宛も確信あり氣に辯明しやうとも、ネフリユードフから見れば其全部が野心と權勢慾とに外ならんのだ。他人の思想を自分の

物にして巧みに受賣する才能が中學や大學時代には先輩友人の間に挺んづる優越の位置を作らしめた。學生時代には得て恁ういふ方が款待されるから、忽ち頭角を現はして自分でも大いに得意になつてゐた。が、卒業して免狀を貰つて了つて、此の得意の時期が過去ると、今度は新らしい方面で復た一と山中てやうといふ山氣から、（ノウオドウオーロフを大嫌ひなクリルツオーフの說に由ると、）俄に變說改論して、穩和な進步主義から一轉して一足飛びに人民黨の極端な熱烈な信者と早變りして了つた。

其上に、兎もすると狐疑因循になり勝ちな謙讓の義德を缺いてゐるお庇に、臆面もなく何處へでも出しや張るのが勝利を得て、革命黨へ入つても忽ち領袖株となつて大得意であつた。且、一度方針を定めて了つたら最う迷ひも惑ひもしないから、怪我にも間違つた事をしたと思ふ事は無く、物事を總て簡單明瞭に見てゐた。實際又、眼界が狹くて一面だけしか見ないから何でも簡單明瞭に見るのが當然で、理窟一遍で何でも通るやうに思つてゐた。且、自信が豪いから人を擊退するか或は屈服するかの二つであるが、極若い者の中に運動する時は此の方圖も無い

自信を學問の深い爲めだと買被つて、大抵は屈服して了ひ、首尾よく革命黨仲間の中で大成功を收めた。で、徐々青雲の準備に掛つて、愈々政權を握つた曉は人民議會を招集する心組で、此議會に提出する議題の草案を作つてゐた。ノウオドウオーロフ自身では此草案が總ての懸案を盡く解決して必ず實行されるに違ひないと確信し切つてゐた。

同志のものはノウオドウオーロフを尊んでゐたが、好いてゐるものは無かつた。ノウオドウオーロフは又誰をも愛さないで、知名のものは盡く競爭者と見做して、成るなら男の親猿が兒猿を扱ふやうに辛めたかつたかも知れぬ。儘になるなら他の者から智力も才能も悉皆攫つて了つて、自分が技倆を現はす邪魔をさせないやうしたかつたらう。唯だ頭を下げてお辭儀をしに來る者だけには厚意を盡して、此の道中筋でも自分の說に感化されて門下生の如く仕へるコンドラーチェフや自分に戀してゐるヅーホーワや可愛らしい美くしいグラーベッだけには善くしてゐた。

主義としてはノウオドウオーロフは婦人運動の味方であるが、內心では總ての婦人を下らな

い馬鹿なものだと侮蔑つてゐた。唯だ之まで度々惚れた女だけは別物で、現在惚れてるグラーベッといふやうな女だけは全く別物で、其の長處は唯だ自分一人にしか解らないのだと思つてゐた。

兩性の關係に就ても到つて簡單な考慮で、自由戀愛一天張で十分解決出來ると思つてゐた。夫故に名義だけの妻の外に眞實の妻をも持つてゐたが、二人の間の眞誠の愛が失くなつたのを旣に別れて了つて、今度は復たグラーベッと自由結婚を行らうと考へてゐる。

だが、ネフリユードフのマースロワに對する關係は痴情と見做して「馬鹿を行つてる」と輕蔑してゐた。且又ネフリユードフが現在の社會の缺陷を見て改革を企て、ノウオドウオーロフのやうに口頭ばかりでなく眞に實行しやうと意氣込むのを「殿樣流」と笑止がつてゐた。ネフリユードフの方でもノウオドウオーロフの此の心持を感づいたから餘り好い氣持がせず、彼方が其積りなら此方も其積りだといふ氣になつて、此道中筋では誰に對しても好感を持つてゐたのが、ノウオドウオーロフ一人には殘念ながら惡感を持たずにはゐられなかつた。

第十六回

役人の聲が隣房から聞えた。囚徒は忽ち寂然として了うと同時に、伍長が二人の兵士を伴れてやつて來た。點呼時間となつたから點呼に來たので、伍長は順々に數へてネフリユードフの番になると、極慇懃に、

『點呼時間後は規則が嚴ましいから、何卒お歸りを願ひたい。』

と云つた。ネフリユードフには此謎が直ぐ理解めたから、伍長の傍へ行つて祕と三圓の紙幣を握らせると、

『あッ、爾うですか。あッ、あの何で、あッ、宜うムるとも、最う少との間なら……』

と言捨てゝ行かうとする處へ、他の伍長が疎らな髯のボヤ〳〵生えた、眼の下に打撲傷のある囚徒を伴れて來た。

『俺やァ娘の事で來やした。』と囚徒は四方を見廻しつゝ云つた。

『やッ、お父ちやんが來た。』と甲走つた幼女の聲がすると同時にランツエーワの背後から房々した幼女の頭が見えた。丁度ランツエーワは自分のペチコテを直して幼女の衣服を仕立てやうと、カチユーシヤとマーリヤに幇助つて貰つて一生懸命に裁縫をしてゐる最中であつた。

『呀ッ、在たナ。お父ちやんだよ、』と囚徒のブゾーウキンは嬉しさうに云つた。

『此子は大變幸福なんですから、』とマーリヤはブゾーウキンの眼の下の傷を氣の毒さうに視ながら、『矢張妾達に預けてお置きなさい。』

『あのネエ、お父ちやん、伯母ちやんがネ、妾に新らしいお衣を拵へて呉れるの、』と娘は衣服を縫つてゐるランツエーワを指さして、『綺麗な赤かい衣服なのよ。』

『伯母ちやんと一緒に寢んねするネ?』とランツエーワは兒供を撫でながら云つた。

『あァ、寢んねするよ。お父ちやんもかエ?』

ランツエーワは嫣然としつ、

『お父ちやんは寢んね出來ないの、』と云ひつゝ囚徒の方を向き、『確かにお預かりします。』

『爾うしなさい。其方が可い、』と初めの伍長は云ひつゝ二番目の伍長と一緒に行つて了つた。

するとナバートフはブゾーウキンの傍へ行つて、肩を叩き、『君の方のカルマーノフが身代りを作るてエが、眞實かネ？』

ブゾーウキンの柔しいお心善しの容貌は俄に悲しさうになつて兩眼が曇つて來たやうだ。

『俺やァ聞きましねエ……何にもハァ、』と云ひつゝ曇つた眼で幼女を見て、

『汝は先ァ伯母さん達に可愛がられて幸福だノウ、』と云つてから急いで行つて了つた。

『名前の交換は確かだ。渠奴も善く知つてるに違ひない、』とナバートフはネフリユードフに向ひ、『甚麼します、貴下は？』

『次の宿へ行つたら役人に話してやる。私は名前を換へる奴を二人共に顏を知つてる。』

同は復たもや議論の初まるのを恐れて默つてゐた。

今まで兩手を枕に抑向けに寢てゐて口を利かなかつたシモンソンは、此時突と起上つて床を離れ、ネフリユードフの傍へ來て、四邊に座する人々を凝ッと見ながら斷乎となつて、

『貴下にお咄し仕たい事がある。聞いて下さるか。』

『聞きませう、』と云ひつゝネフリユードフも座を起つてシモンソンの踵へ隨いて行つた。

カチユーシャは喫驚した顏をして見てゐたが、ネフリユードフの眼とピッタリ衝突ると眞朱になつて宛も途方に暮れたやうに首を掉つた。

『お話しといふは外でもないが、』と廊下へ出ると直ぐシモンソンは切り出した。刑事囚の叫いたり怒鳴つたりする聲が手に取るやうに廊下で聞えるので、ネフリユードフは顏を顰めたが、シモンソンは少とも遲疑はずにネフリユードフの顏を正面に見つゝ、眞率に、短刀直入に、『カチユーシャの身上の一件ですがナ。貴下とカチユーシャの關係は能く承知してゐますから、一應御相談するが義務だと思ひまして——』

と言掛けた時、二人の囚徒が口論する叫き聲が直ぐ扉口の傍で聞えたのでツイ話を途切らして了つた。

『此のお丹珍め、已ンぢやねェやい！』と一人が叫ると、

『縊めッちまうぞ、厄病神め、』と又一人は叫つた。

其時、マーリヤは廊下へ出て來て、

『何ですネ、如此な處で。此室へ入らッしやい。ウエーラが一人ッきりですから――』と云ひつゝ先きへ立つて、今では女の國事犯の使用に供してゐる密室らしい奥の狹い部室へ伴れて行つた。寢榻の上にはウエーラ・ヅーホーワが唯つた一人ぎりで頭からスッポリと夜衣を冠つて寢てゐた。

『ウエーラは頭痛がするッて眠てゐますから、貴下方のお咄を聞く氣遣ひありません。妾は彼方へ參ります。』

『先ァ妾に在席しやい、』とシモンソンは云つた。『我輩は誰にも祕密は無い。殊に貴孃に祕す事は無い。』

『爾う、そんなら、』と云ひつゝマーリヤは兒供のやうに彼方へ寄つたり此方へ寄つたりして奥の方の寢榻の棚に腰を掛け、美くしいクリ〳〵とした眼を他方に向けつゝ耳を傾けた。

『御相談といふのは――』とシモンソンは更まつた言葉で、『貴下とカチユーシャとの御關係は善く承知してゐますから、吾輩とカチユーシャとの關係を一應お耳に入れて置かねばなるまいと思つてます。』

シモンソンが率直に飾り氣なく打明けやうとする態度をネフリユードフは感服せずにはゐられなかつた。で、

『と仰しやるのは？』と訊くと、

『實は吾輩は、』とシモンソンは沈着き澄まして、『カチユーシャと結婚したいのでムる。』

『驚いた！』とマーリヤは呆れたやうにシモンソンを凝乎と見た。

『そこで吾輩の妻になつて呉れとカチユーシャに打明けやうかと思つてます。』

『そりやァ私が怎うしやうも無い。カチユーシャ次第です。』

『爾うですが、カチユーシャの身になると貴下を外にして自分の勝手で身の振方を定める事は出來ますまい。』

『怎うして？』

『貴下との關係がキッパリしない内は、カチューシャだつて怎うする事も出來ますまい。』

『何故です。私から云へば、此問題は既に落着してをるンです。私は自分の義務と信ずる事を行つてカチューシャの荷を輕くしてやれば濟むので、夫が爲めにカチューシャの自由を束縛しやうとは決して思つてません。』

『夫は能く解つてますが、併しカチューシャは貴下の犧牲を受けるのを欲してゐません。』

『犧牲でも何でもない。』

『左に右くカチューシャのこの決心は斷乎としてゐます。』

『そんなら更めて御相談なさる必要はありますまい。』

『が、爰が御相談といふは、カチューシャは、自分の思つてるやうに貴下にも思つて戴きたいと願つてます。』

『と云ふのは、私は自分の義務と信じてゐる事をしてはならぬと云ふンですかネ？ 夫りや無理

だ。だが、私は檀に義務を投出す事は出來ぬが、カチューシャは私に對して義理も何にも無い、自由である、といふ事は出來ます。』

シモンソンは暫らく無言で考へてゐたが、

『夫ではカチューシャに話しませう。併し吾輩がカチューシャに戀慕したと誤解なさらぬやうに、』と躰て重々しく『吾輩はカチューシャを世の中の苦勞を仕拔いた二人と無い立派な婦人として愛するので、カチューシャから何にも求めるものは無い。唯だ其の後楯となつて半世の苦を分ち、其の境涯の……』

と言淀んで聲を慄はすのを見てネフリユードフは愕然した。

『……重荷を輕くしてやりたいと思つてゐます。』とシモンソンは更に言葉を繼ぎ、『夫れ故カチューシャが貴下のお世話になるのを欲しないなら、吾輩が代つて世話をしてやりたい。カチューシャさへ承知して呉れゝば、吾輩はカチューシャの行く處へ何處までも隨いて行く。四年と云へば長い事は無い。吾輩はカチューシャの傍に在たなら少しは荷を輕くしてやる事が出來

もしやう……』

と爰まで云つたが胸が一杯になつて再び話を途切らして了つた。

『何と御挨拶したら宜からう、』とネフリユードフは云つた。『カチユーシャが貴君のやうな立派な保護者を得たのは私も非常に喜びます。』

『それを聞きたかつたのだ、』とシモンソンは直ぐ其尾に隨いて、『吾輩が聞きたいのは夫れだ。貴下がカチユーシャを愛しカチユーシャの幸福を欲するとして、吾輩と結婚するのはカチユーシャの爲め好い事と思ひますか如何です？』

『無論、』とネフリユードフは決然として答へた。

『總てが皆カチユーシャ次第ですが、我輩は唯だ長い苦勞の氣抜きをして安心させたいばッかりでムる、』とシモンソンは恁ういふ沈鬱な人には決して見る事の出來ない兒供のやうな可愛らしい笑顔をした。

軈て突と起つてネフリユードフの傍へ行き、面羞けに笑ひながら接吻した。で、

『それではカチユーシャに咄しませう、』と言捨てゝ去つて了つた。

第十七回

『貴下は如何思ひます、』とマーリヤは、『愛でせうか、眞個に愛でせうか？　あの人が那樣な所爲をせうとは――シモンソンが女に愛するなんて、シカモ那樣な兒供けた馬鹿々々しい愛をしやうとは眞個に思ひもつかなかッたワ。這般な奇妙な事は無いが、實を云つたら情なうムいます。』と歎息を吐いた。

『だが、カチユーシャ――カチユーシャは何と思つてませう？』とネフリユードフは云つた。

『カチユーシャですかネ、』とマーリヤは成るべく圖星といふ返事をしやうと、暫らく言葉を途切らしつ、『あの人は那樣な職業をしてゐたに似氣なく、中々な堅固人で――眞個に美くしい感情なんです。ですから、貴下の事を思つて、夫は夫は心底から眷しく思つてますが、夫だけ貴下の利益も考へて、何卒して貴下と此上の因緣を結びたくないといふ心持で、貴下と結婚する

のか昔しの職業よりは最つと恐ろしい罪障だと思つてますから、貴下が何と仰しやつても仰に従はないのでムいます。ですけれども未練はある。貴下と顔を合はせるのが如何にも辛いのです。』

『それぢやア什麼しやう。消えて了ひますかネ?』

マーリヤは嫣然と笑ひながら、

『さうですネ、半分ばかり。』

『如何したら半分消えて失くなられます?』

『そりやア戯謔ですがネ、併しカチューシャですネ、最う知つてますよ。シモンソンが口に出さないでも以心傳心にお互に察し合つてゐます。妾は愛のお咄は善かれ悪しかれ彼是れ云ふのは好きませんが、シモンソンの愛は、縦令んば什麼な面を冠つてゐたつて、矢張世間並の男と同じ惚れ方で、口頭でこそ自分の勵みになる愛だとか、女の不幸を助けてやる義心だとか、ブラトニックだとか云つてゐますが、矢張其底にはノウオドウオーロフとグラーベッとの關係の

やうな汚ないものがあるンですとも。』

とマーリヤはいつか肝腎の話から外れて得意の非戀愛説にならうとした。

『そこで私は、怎うしたら宜いでせう?』

『貴下ですか。カチューシャにスッパリ打明けて話してお了ひなさいナ。何でも物事は明瞭とするに限ります。話してお了ひなさいよ。呼んで來ませう。呼びませうか?』

『何卒。』

マーリヤは行つて了つた。ネフリユードフは孑然と取殘されて、スヤ〳〵眠入つてゐるヅーホーワの靜かな寢息や折々に苦しさうに叫く聲や壁越しに絶えず聞える刑事囚のワヤ〳〵騒ぐ音を聞いてゐると變な感情がした。シモンソンが持出した相談は、心の折ける時々は荷厄介になり馬鹿らしくも思ふ自分で脊負つた重荷の肩抜けが出來るわけだが、扨て又面白くなくもあり殘念なやうな氣もする。且又、シモンソンが如此な相談を持出す日になると、自分の義理を立て貫かうといふ世間に類の無い特別の意地が何でもなくなつて了つて、人の目にも自分の目

にも其の難有味が減つて了う。何故なら、從來緣も由緣も何にもない赤の他人でさへが、女を不便がつて一生の運命を共にしやうと云ひ出すから比べれば、アレ程の深い關係があるネフリユードフが義理を立てゐは勿論當然で何でもなくなる。が、如此な事を考へ出すのは、或は若干か嫉妬心が手傳つてゐるのかも知れないのだ。實はカチユーシャの情愛には既う安心し切つて餘人に心を移すやうな事は決して無いものと定めてゐた。

其上にカチユーシャが苦役中は服役地の近くに住んで、影ながら世話をするのを人道の手始めとしやうとしてゐたゆゑ、若しカチユーシャがシモンソンと結婚して了つたなら、差當りての此の計畫が無用となるから、復た何かしら新らしい計畫をして罪亡ぼしを考へねばならぬのだ。

左さま右さま種々に考へてゐる内、刑事囚の喧騒は一ときは高くなつて、何事か一と騒動持上つたらしく思はれた處へ、闥が排てカチユーシャが入つて來て、ツカ〳〵とネフリユードフの傍まで來た。

『マーリヤさんが呼びに來ましたが、何か御用？』

『少しお前に話さなければならぬ事がある。先ア腰をお掛け。シモンソンからお前の身上に就て相談があつた。』

カチユーシャは腰を掛けつゝ溫和しく膝に手を組んで沈着いてゐたが、シモンソンの名を聞くと忽ちサツと眞赤になつて、

『如何な御相談をして？』

『シモンソンはお前と結婚したいと云つた。』

カチユーシャは忽ち途方に暮れたやうに滿面を顰めて、何にも云はずに下を向いて了つた。

『夫に就て私の承諾を得、且意見を聞きたいと云つたから、夫とはお前次第だと云つて置いたが、何とかお前の了簡を定めなければならない。』

『元來夫は如何いふ事なの？　如何いふわけ？』とカチユーシャは低音で呟きつゝ、何時でも不思議にネフリユードフを動かす例の斜視の眼を寄せて凝と見た。暫らくは二人ながら無言で

互に眼と眼と見合つてゐたが、之が口よりは餘計に物を言つてゐるのだ。

『何とかお前の了簡を定めなけりやならない。』とネフリユードフは復た繰返した。

『定めるッて、怎う定めるの？　既くから定り切つてますワ。』

『イヤ、爾うでない。シモンソンの申込を承知するとも仕ないとも定めなけりやならない。』

『妾が人の妻になれて？　妾のやうな咎人が？　こんな身分の妾がシモンソンの顏を潰して怎うしませう、』と云ひつゝ前額に八の字を寄せた。

『だが、宣告が取消しになつて罪名が消えたなら？』

『否ェ、妾は何卒、單獨ほッちにさせて置いて下さいまし。最う之ぎり何にも申上げる事はムいません、』と云ひつゝ歸らうとして突と席を起つた。

第十八回

カチューシャの踵から隨いてネフリユードフが再び男の檻房へ戻つて來ると、誰も彼も皆黙然となつて憤慨してゐた。

何處へでも飛び歩いて、誰とでも親昵となつて、何にでも善く氣が附くナバートフが意外な事件を吹聽したので大騷ぎなのだ。

革命黨のペートリン[1]といふ男がある。徒刑に宣告されて既くの昔しカーラの監獄に行つてる筈と誰も思つてゐたのが、意外にもツイ此頃唯つた一人徒刑囚の一行と共に此宿を通り過ぎた事を壁に書殘してあつたのを、ナバートフが偶然發見け出して一同に報告した。壁書の文句は次の通りだ。

『八月十七日、刑事囚徒の一行と共に此宿を過ぐ。國事犯は唯余一人なり。ネウエーロフ[2]は余と共に來りしが、カザンの癲狂院にて自ら縊死したり。余は心身共に愈々健全なり。』

一同はペートリンの境遇やネウエーロフが自殺の原因となりさうなものを噂し合つてゐた。クリルツオーフだけは何にも言はずに考へ込んでギラ〳〵した眼を据ゑて睨ッと前方を凝視めてゐた。

1 Pétlin　2 Nevérof

『良人が云つてました、』とランツェーワは云つた。『ネウエーロフはペトロパーウロウスキーの監獄に居る時分から空想に耽つてゐたさうです。』

『爾うだとも。あの男は詩人、空想家であつたからナ。得て怎ういふ性質の人間は密室檻禁に堪へられんものだ、』とノウオドウオーロフは云つた。『我輩が密室檻禁になつた時は決して空想をしない。唯だ毎日の事をキチンキチンと秩序よくやつたから憂に堪へる事が出來たのだ』

『爾うサ、何でも氣の持ちやう一つで辛抱が出來る。吾輩は監獄に入れられると却て喜んだ、』とナバートフは愉快げに陰氣になつた座を引直さうとして、『裟婆に在れば、捕縛りやァしないか、人に迷惑掛けやァしまいか、仕事を失敗りやァしまいか、と種々な事が心配になるが、捕つて牢へ投込まれたら最う安氣なもんだ。漸つと裕然座り込んで、安心して烟草が喫める。』

『貴下はネウエーロフを善く知つてらしッて?』とマーリヤは苦悶の歴々と見えるクリルツオーフの顏を心配げに見ながら云つた。

『ネウエーロフの空想家をかェ?』とクリルツオーフは暫らく叫つたり歌つたりした後のやう

に大息を吐いて、『ネウエーロフは門番の爺さんの口癖で云へば、此の地球に滅多に生れない男だ。實に水晶のやうな純潔な人物だ。虚言を吐いた事が無い。祕すとか衒ふとかいふ事が微塵もない。實に透徹るやうな綺麗な男で、恰で皮を剝いたかと思ふやうに神經線が歴然と見えてゐた。實に性質の美なる高尚なる、他の碌々たるものとは違つて……』と說掛けたが忽ち、『這般な愚痴を罷して奈何する、』と口を緘んて了つた。軈て又苦々しげに顏を顰めて、『我々革命黨は常に空論ばかりしてゐる。人民を教育するのが先務だとか、社會を改良するのが急務だとか、目的を貫ぬく爲めには溫和かな議論を主張するが宜いと歟、或は猛烈な强行手段を取るに限ると歟、始終空論ばかりしてゐる。併し渠等政府の官吏輩を見ろ。渠等は空論をしない、唯だ思ふ所をドシ〳〵實行して之が爲めに人が何百人死なうと一向頓着しない。イヤ、頓着しない處か、立派な人間が死にでもしやうもんなら思ふ坪に陷つたと喜んでをる。ヘルチエンが、十二月黨が根絶やしされた爲めに社會の人物の平均相場が下落したと云つてるが、爾う云つたヘルチエンの一派も死んで了ひ、又ネウエーロフまでも……』

『だが君、政府の奴ばらがイクラ骨を折らうと、革命黨を殘らず絶やして了う事は決して出來んサ、』とナバートフは例の元氣な調子で、『濱の眞砂は盡きるとも世に我が黨の種子は盡きまじだ。』

『イヤ爾うでない。萬が一、我々が政府の奴らに白い齒を見せたら根絶やしされて了うかも知れぬ、』とクリルツォーフは聲を張上げて云ひつゝ、『君、紙莫を一本。』

『紙莫は貴下に善くない、』とマーリヤは親切に云つた。『お止しなさいよ。』

『いゝよ、關はないで呉れ、』とクリルツォーフは激昂してブン〳〵しながら、紙莫の火を點けて一と口吸ふと、忽ちコン〳〵と咳入つて吐きさうになつたのを、漸と抑へつけつゝ、『我黨は尙だ事業半ばである。今後は空論を避けて、須らく衆心協力して彼等官吏輩を全滅しなけりやならない。』

『だが、官吏だつて人間だよ。』とネフリユートフは云つた。

『なに官吏が人間なもんか。官吏がするやうな行爲を平氣で行つてのける奴が人間なもんか。

飛行船や破裂彈が發明されたこそ幸ひ、飛行船へでも乘つて、上から破裂彈を投げて、渠奴を一人殘らず虻でも殺すやうに粉碎にして呉れやう。何故なら君……』と言掛けた時、俄に前よりは一層激しく咳込んで、顏が眞朱になると共にカッと血を吐いた。

ナバートフは喫驚して雪を取りに駈出し、マーリヤは直ぐヴワレリヤン水を持つて來て飲ませやうとしたが、クリルツォーフは息だはしく喘々して、細ッこい白い手でマーリヤを押除けつゝ眼を閉ぢて了つた。其中に雪や水を漸と飲まして沈着いた處で、寢臺へ擔込んで臥かして了つた。ネフリユードフは軈て一人〳〵に暇乞をして、先刻から待つてる伍長と一緒に出掛けた。

刑事囚徒は最う靜まつてゐた。大抵は寢て了つたのだ。寢榻の上にも下にも寢榻と寢榻との間にも際間なく多勢轉がつてゐたが、迚も殘らず臥かせるだけの積が無いので、室外の通行路までも溢れて、袋を枕に濡れた上衣を掛けて、重なり合つて轉がつてゐた。鼾聲や呼り聲や寢言が其處ら中にムニヤムニヤ聞えた。獨身者の部屋では燃え殘りの蠟燭の傍で猶だ起きてゐる

者も少しはあつたが、伍長を見ると直ぐ燭火を吹消して了つた。が、爺さんの囚徒が唯つた一人、通行路のランプの影で裸體になつてシャツの虱を拾つてゐた。之から比べると、國事犯の室は猶だ空氣が澄んでゐた。燻ぶつてゐるランプが薄朦朧とチラクラしてゐて、能く〳〵氣を付けて足元を見定めないと通行路に臥てゐる者の足を踏みつけさうである。其中で三人は通行路にも臥る場所が無かつたと見えて、入口の臭い便器の傍に臥てゐた。一人は之までも連中の中に度々見掛けた年を老つた白痴であつた。一人は十二三の男の子で、二人の間に挾まつて一人の足を枕にしてゐた。

門外へ出てからネフリユードフは佇立つて、暫らくは力を丹田に入れて凍つた空氣を呼吸した。

空は霽れ渡つて星がキラ〳〵してゐた。二三ケ處の外は泥濘がコチ〳〵凍つてゐた。ネフリ

第十九回

ユードフは宿屋に歸つて、眞暗な窓をコト〳〵叩くと、肩幅の廣い男が跣足で出て來て戸を開けて呉れた。玄關の右手の戸からは男部屋に寢てゐる辻馬車馭者の鼾聲、裏庭からは背戸に繋いだ何匹かの馬が麥を喰ふ音が聞えた。左手は小綺麗な客座敷で、ウエルムート（植物の名）と呼吸の臭ひがして、聖像の前の赤いランプがチラクラしてゐた。襖越しには肺の大きな人が大きな鼾聲をかいてゐた。

ネフリユードフは軈て衣服を脱いで、オイルクロース張りの長椅子に毛氈を敷き、旅行用の革枕をして横になりつゝ、此日に見たり聞いたりした事を考へ出した。が、誰よりも一人の囚徒の足を枕に便器の鼻を衝く臭氣を嗅ぎつゝグッスリ寢込んでゐる兒供が一番不便だつた。

シモンソンの相談掛けたカチューシャの一條は誠に思掛けない今夜中の一番の大事であつたが、不測に左して氣にも留めなかつた。イヤ、全然氣に留めないわけでは無いが、問題が中々錯雜んでゐるからチョックラ一寸と定めて了う事が出來なかつた。夫よりはあの喧噪した中に腐つた空氣や便器から發散する惡瓦斯を吸ひながら臥てゐる囚徒達——殊に一人の囚徒の足を

枕にしてゐた兒供の邪氣ない顏が何時までも眼に付いて中々消えなかつた。

爰に遠い何處かの國で或る人間が他の人間を思ふ存分に有りと有らゆる凌辱、虐遇を加へつゝありといふ咄を聞いてゐるのと、現在三月間も強迫や侮辱を蒙むつてゐるものを目前に見たのとは大分違つてゐた。

ネフリユードフは此の三月間一度ならず何度も自問自答した。『餘人が平氣で氣が付かずにゐるものを、自分だけが氣が付いて氣を揉むといふは、自分が氣が狂つてゐるのではあるまいか。でなければ自分が自擊したやうな奇怪な所爲を事もなげに敢てする渠等が氣が狂つてゐるのではあるまい乎』と。

けれども渠等（――恁う云ふ奴は多勢だ――）がネフリユードフが見て驚くべき戰慄すべき事と思ふものを必ず仕なければならぬ重大なお役のやうに心得て虛心平氣で安心して遣つて退けるのを見ると、渠等が氣が違つてゐるとは奈何しても思はれない。と云つて何事も明晰と分別のつくネフリユードフ自己が氣が狂つてゐるとは矢張奈何しても思はれないから、さァ事が

益々解らなく紛糾んで來た。

此の三月間にネフリユードフが目擊して感じた事を擧げて見ると――

凡そ自由なる人民中、最も神經家で、最も熱性の者で、最も激し易くて、最も才能があつて且最も頑强であつて、シカモ用心が足りないで、胡麻かす狡才が缺けてゐるものが裁判や行政命令で撰擇られる。渠等は他の自由に捨置かれるものたちと比べて格別危險はなくても一番先に捕縛され、監獄に投込まれ、西比利亞に流され、何年間も官費で賄はれて立派な怠惰癖をつけられ、妻子なり天然なり日々の肝腎な仕事なり凡そ人間の自然及び精神生活に必要なる一切の條件から悉く隔離されて了う。之が第一に解らない。

第二には、是等の人間は鎖で繫がれるとか、頭を剃圓められるとか、耻かしい衣服を着せられるとか、要でも無い侮辱を有らん限り蒙つて、元來弱い人間が美くしい一生を全うする第一の動機たる世間の外聞を憚る心とか廉耻心とか見識とかいふ尊い心持を全で棄てさせて了う。

第三には、渠等は、縱令日射病とか水に溺れるとか燒死ぬとかいふ不慮の變事が無くとも、

獄内に得て有り勝ちな傳染病や疲勞や毆打や始終危ない目に會ひ通してゐるから、最も道心ある徳人でさへが正當防衛の爲めには恐ろしい殘忍な惡事を自分も行りもすれば人の行るのを許すやうにもなる。

第四には、目下の組織上餘義なく、恁ういふ良民を盗賊や詐欺者や殺人者や破落戸と一つ檻房に入れてゐるから、丁度麹麺種が饂飩粉を化するやうに、何時の間にか無垢の人間を盲實の惡黨にして了う。

第五には、有りと有らゆる暴虐、殘忍、無道が政府の都合次第で見て見ぬ振するどころか、寧ろ公許され奬勵されてゐる事實が、現に憂目を見る人民達に根強く浸込んで、例へば女兒供や老人を虐げたり、棒や鞭で叩いたり、偶々逃出すものを死んでゐやうと生きてゐやうと取つて押へれば褒美を與つたり、勝手に夫婦を引離して他人の女房や亭主と同居をさせて強に姦通させたり、隨分鐵砲で射つたり首を絞めたりする、恁う云ふ非道な現場を始終看聞れ聞れてゐると、矢張摸倣つて同じ亂暴狼藉を公然に平氣に行つてのけるやうになる。

斯ういふ、仕組は風俗壞亂、秩序紊亂を作り出し、惡徳と墮落とを打つて一丸とした害毒を——他の方法では迚も及びもつかぬ——廣大な範圍に廣める爲めに態々拵らへたとしか思はれぬ。

『丁度、如何なる方法が人民の最大多數を腐敗せしむるに最效確實なるや、といふ問題を提出して解釋したやうなものだ！』とネフリユードフは監獄や護送の道中筋や驛々の宿舍に行はれる惡事を一々憶ひ浮べつゝ考へた。斯んな黴梅に年々何十萬といふ人間が監獄に入れられて、墮落の頂點に登り詰めて、愈々十分に腐敗し切つた處で放免されて、殆んど脊盲まで浸込んだ獄中の惡徳病を思ふさまに社會の八方面に播き散らしてゐる。

ツーメンスクやエカテリンブルグやトムスクの各監獄初め驛々の宿舍でネフリユードフは社會が自から作つたらしい此の風俗壞亂の目的を首尾よく果してゐるのを目擊した。露西亞の百姓氣質、信者氣質の道心を持つてゐる質朴な普通の人間が、元來の心掛けを其方退けに、何時の間にか新らしい監獄氣質となつて、利益にさへなるなら什麼な亂暴狼藉を人に加へても理窟

は立つといふ氣になつた。誰でも一旦監獄に入ると、散三辛い目に會はされた經驗から推して、敎會や道德の敎師が說法して聞かせる「人を敬ひ人を愍む」といふ掟が實際生活では全で度外されてゐるのを見て、實際に行はれてもゐない掟を何も馬鹿正直に守るに及ばないと心底から思つて了う。此の監獄生活の效驗はネフリユードフが知つてる物ての囚徒――フヨードロフにしろマーカルにしろ誰にも彼にも現はれて、ツイ唯つた二タ月以來囚徒に交つてるタラスですらが、既う道德をヌキにした理窟を捻くるのを見て驚いて此の道中の途すがらも、或る浮浪人が沼に隱れて途中から逃出す時、仲間の者を敎唆かして伴ひ出した上に殺して肉を喰つたといふ咄を聞き、現に其男の顏まで見て置いたが、猶だ猶だ最つと驚くべきは這般な獸物めいた人非人の咄が一つや二つでなく無暗矢鱈とあるのださうだ。

怎ういふ制度の下に此の如く行はれる一種特別な惡德養成法で、露西亞人は一統に――ニイチェの極端な新說よりも一段上手を行つてる彼の浮浪人輩同樣の心的狀態になつて、奈何な獸暴でもいき自由の本能に任せて決して禁じないといふ流義を、囚人から初めて一般人民にまで

も自然廣げるやうになつた。

什麼して又、怎んなことになつたかと云ふと、本と監獄は社會の害毒を防遏し、惡人を矯正し、犯罪の恐るべきを警め、且刑罰の覿面なるを思知らしめる爲であつたのだが、實際は之に反して豫期通りの效驗は更に無く、害毒を防がうとしたのが却て蔓延せしめ、惡人を矯さうとしたのが却て增長せしめ、刑罰を恐ろしがらせやうとしたのが却て平氣にさせて、現に多數の浮浪人が自分の勝手で監獄に出たり入つたりしてゐる。であるから、犯罪は止むどころか段々と根深くなつて、政府の刑罰如きは屑ともせず、夫までは其麼な氣のなかつた人民の復讐心を長じて來るやうになつた。

『何故又這般な馬鹿々々しい事をするんだ?』とネフリユードフは自ら心に問ふたが、其解答は出來なかつた。

殊に最も驚くべきは、此事たるや偶然でもなく過失でもなく、シカモ一朝一夕でなく數百年來絕えず行はれ來つたので、唯だ異なつてるは、初めは鼻を劓いだり耳を切つたりしたのが、

其後は黥をしたり烙印したり鐵の棒に縛り付けたりした。之が又、段々と變つて、今では手錠を穿められて、荷車の代りに汽車に積込まれて、遠方へ運搬されるやうになつたのだ。

政府の役人の意見を聞くと、ネフリユードフの憤慨する弊害は畢竟監獄の設備の不完全に原因するので、若し監獄を現今の模範通りに改良さへしたなら萬事の面目が更まるといふが、木と〳〵ネフリユードフが監獄に反對するのは、設備の善惡ではないのだ。成程、電鈴を裝置したり、タードの主張した電氣死刑を實行したりする模範監獄の咄も度々聞いた事もあるが、這般な鍍金をした殘酷に益々反對したくなる。

だが、監獄も監獄だが、夫よりも一番癪に觸るのは裁判所や各省の官吏達で、人民から搾り取つた高い月給を取りながら、一ッ穴の同氣相求むる奴らが作つた法律と首引をして、少とでも其法律に觸れた人民は、直ぐ法律で指定した監獄に投込んで、典獄とか押丁とか護送官吏とかいふ牛頭馬頭に辛なませて、肉體的に精神的に何百萬人も殺して了う。

ネフリユードフは諸方の監獄や流刑囚の宿舍の實況を親しく視察して、囚徒の中には酒を飲

むとか賭博を打つとか女を姦淫するとか其他有らゆる殘酷極まつた惡事――人肉を喰う事すら行はれて、シカモ是等の惡事が朝飯前の仕事でさらさらと行つて退けらるゝを目擊したが、畢竟するに此の事たるや、人民の墮落でもなく、愚劣なる輩者が政府に阿つて案じ出した所謂罪人的典型たる天性の缺陷でもなくて、根本の原因は人間は互に罰する事が出來るといふ間違つた考へに由來してをる。彼の人肉一件の如き沼の中で行はれたといふが、實は内閣や參議院や國務省に胚胎して沼の中で實を結んだに過ぎないのだ。例へばネフリユードフの姉婿にしろ、下は廷吏から大臣に到るまで法律家と云ふ法律家は渠等が口にする人民の正とか善とかには少しも注意しないで、是等の墮落や惡事を產出す仕事をする爲めに貰ふ金の多寡ばかりを氣にしてをる。此事たるや極て明々白々である。

『だが、之は單に根本の間違つた考へばかりで生じたものだらうか？　若し役人達に今まで仕たやうな事を仕なかつたなら從來通りの月給も與らうし、其外に賞與も取らせやうと請合つてやつたら什麼にかならぬものだらうか？』と考へ出した時、二番鷄が鳴出したので、身體中の

蚤が寢返り打つ度毎に、噴水の水のやうにピン〳〵跳上るにも關はらず、何時かスヤ〳〵と寢入つて了つた。

第二十回

辻馬車馭者は、ネフリユードフが眼を覺ますよりズット前に、宿屋を立つて了つた。女將は茶を煎れて持つて來て、汗ばんでベタ〳〵した太い咽喉を手巾で拭きながら、囚徒の宿舍から兵士が手紙を持つて來たと云つた。

此手紙はマーリヤが遣したので、クリルツオーフの容體は豫想つたよりは重大であるさうで『就ては此驛に逗留し、妾も看護の爲め居殘りたく願ひ申候處、許可不相成、餘儀なく再び出立致し申候が、仔分手重らねばよろしきがと案じられる容體に候故、次の宿にては是非とも滯留の上手當を致し度、妾も附添人として居殘られるやう吳々御計らひ願上候、次第に由れば便宜上結婚してクリルツオーフの妻となるも差支無御坐、其覺悟をも定め申候』と書いて來

た。

ネフリユードフは若い男を小荷駄の問屋へ遣つて馬車を傭はせつゝ、急いで荷作りに掛つたが二杯目の茶を尙だ飲まない中に、三頭立ちの旅馬車が石のやうに凍つた泥濘路に轍を響かせつゝ、鈴をチャラ〳〵鳴らしながら玄關前に駐つた。

ネフリユードフは咽喉の太い女將に勘定を濟ましてから、周章てゝ馬車に乘ると共に、成るべく早く囚徒の一行に追付くやうにと馭者に命じた。

村有牧場の門を通過ぎると間もなく、囚徒の袋や病人の囚徒を載せた一列の馬車が重い車の轍に破されて徐々融け初した凍つた泥濘路をガタクリさして行くのに追付いた。

士官は先きへ行つて了つて、兵士だけが酒に喰べ醉つた大機嫌で喋べりながら道草を喰つてゐた。馬車の數は澤山で、先列の馬車には一車毎に六人の病囚をギシと積込み、殿列の三輛の馬車には一車に三人宛國事犯を乘せてゐた。一番目にはノウオドウオーロフとグラーベツとコンドラーチエフの三人、三番目にはランツエーワとナバートフと、最一人はマーリヤに席を讓

つて貰つた女囚の三人、三番目には馬糧の藁を敷いた上にクリルツォーフを臥かして、其枕許にマーリヤが附添つてゐた。

ネフリユードフは馬車を駐めて飛下りつゝ、ツカ〳〵とクリルツォーフの馬車へ行つた。酒に醉つてる一人の兵士は手を掉つて制したが、一向見向きもしないでクリルツォーフの馬車の脇に手を掛けつゝ傍へ寄つて歩き出した。

クリルツォーフは羊の皮の上衣に毛皮の帽子を冠つて、手巾で口を縛つてゐたが、前よりは一層血色が悪く且痩れたやうで、バッチリした眼ばかりが大きくギラ〳〵してゐた。

クリルツォーフは車のガタクリする度毎に身體を搖られながら凝乎ッとネフリユードフを瞻視めてゐた。が、容體を訊かれると眼を閉ぢて腹立たしげに首を掉つた。車の震動を堪へる爲めに精一杯勇氣を附けてゐるやうである。

マーリヤは其傍に附添つて、クリルツォーフの容體が中々心配なのをネフリユードフに眼で知らしたが、軈て元氣の好い調子で、

『あの士官はネ、自分でも悪るかつたと氣が附いたやうですよ、』と車の響に消されまいと大きな聲を出して、『プゾーウキンの手錠を脱つて了つたので、今日は兒供を抱いて行きました。シモンソンとカチユーシャと、夫からウエーラが妾の代りに一緒に隨いて行きました。』

クリルツォーフも何か云つたが、車の響に紛れて聞えなかつた。で、咳を制へやうとして顔を擊めて首を掉つた。

ネフリユードフは聞取らうとして屈んで首を伸ばした。クリルツォーフは口を縛つた手巾を緩めつゝ『大分快い鹽梅です。唯、風邪を感かない用心をしませんとナ、』と低言いた。ネフリユードフは頻りと頷きつゝ、再びマーリヤと眼を見交した。

『什麼ですナ、三體の問題は？』とクリルツォーフは強やりに笑顔を作りつゝ小さな聲で、『猶だ中々解釋が附きませんかナ？』

ネフリユードフには何の事だか解らなかつた。するとマーリヤは此の三體といふは月と太陽と地球とを指したので、此の關係に就ての著名な數學上の問題をネフリユードフとカチユーシ

ヤとシモンソンとの三人に應用めた洒落であると說明して聞かせると、クリルツォーフは其の說明の當を得たのを領いて見せた。

『その解釋なら私がすべきもんでない、』とネフリユードフは云つた。

『妾の手紙はお請取なすツて?』とマーリヤは訊いた。『貴君は盡力して下さるでしやうネ?』

『承知してゐます、』とネフリユードフは答へた。が、クリルツォーフの面に不快の色があるを見て取るや否、自分の馬車に戻つて、凸凹した道を急がしつゝ、ガタクリする車から落ちないやうにシツカリと車の門袖に掴まつて、凡そ十町餘りもゾロ〳〵と連續する鼠の獄衣の手錠を穿めた鎖附きの囚徒の行列を追越さうとした。

只見ると、向ふ側に、カチューシャの青い肩掛と、ヅーホーワの黑い衣服と、シモンソンの毛絲で編んだ帽子と、破れた白い沓下に草鞋めいたものを穿いてゐるのが忽ち眼に着いた。シモンソンは女連と同列になつて夢中に話してゐた。

一同はネフリユードフを見ると首を下げて會釋した。シモンソンは殊に嚴べらしく帽を脫つて禮をした。

ネフリユードフは何にも云ふ事が無いから、默禮したまゝ馬車を先きへ拔かせて平らな路を一散に走らし、折々双方から來る荷車を避ける爲め小徑へ片寄りつゝ道を急がした。軈て黃色に葉を染めた樺や落葉松の入交つてる松林の中へ、轍の痕の深く刻んだ路に突入して、囚徒の一行を半分追越した頃、漸つと林を外れると、一望果しなき廣原で、遙かに敎會堂の十字架や圓い屋根が見え、丁度薄雲が晴れ渡つて、林の梢より高く昇つた日は、濕れた木の葉や寺の屋根や凍てた泥路やに反射して、燦々と輝いてゐた。右方に寄つて遙か彼方には、遠山が紺碧の空に白く彩どつてゐた。

軈て大きな村へ着くと、段々人通りが殖えて、正眞の露西亞人や其他の人種が奇妙な帽子や衣服でウロ〳〵して、醉つてゐるのもあり、醒覺のもあり、男となく女となく、店先や立場や車の周圍に集つて、ワヤ〳〵喋べつてゐた。慥かに宿が近くなつたのである。

馭者臺の右手へ片寄つて腰掛けてる馭者は、手綱をキウと引締めてから鞭をしごいて一と鞭

當てると、馬は忽ち一散に馳せて只ある川畔へ出た。爰は渡船場で、丁度渡しの筏が中流まで來た處で、凡そ二十輛の馬車が待合はしてゐたが、ネフリユードフの來た時はお誂へ向きの時間で、中流から此方の瀬が疾いからドシ〳〵と押流されて忽ち棧橋に近寄つて來た。

脊高の肩幅の廣い筋骨逞ましいムク〳〵した船頭が、羊の皮の衣服で船縁に出て、繩を投げて手際よく船を繋ふと、直ぐ乘せて來た車を陸へ揚げてから、待つてゐるお客を逸早く船に乘せて了つた。慣れたもんだ。

忽ち船は馬車で一杯となり、馬は初めて水を見て騒ぎ出し、船縁をピタ〳〵洗ふ水が繋つた繩を緊める度毎に、船が動搖してピシヤン〳〵〳〵と跳ね上つた。ネフリユードフの馬車は一番最後に轅を外した馬と一緒に載せられ、之と同時に船頭は綱を解いて、乘れないお客が愚圖々々云ふには一向眼も呉れずに棹を突出して了つた。

乘合は何れも無言で寂として、船頭の舵を蹈む音、馬が船板を蹴付ける音の外は何の音も聞えなかつた。

第二十一回

ネフリユードフは筏の端に立つて洋々たる大河を瞻めてゐた。偶つと心頭に湧いて來たは、憤死の瀬戸際に臨んでゐるクリルツォーフと、勇ましげにシモンソンと列んで行くカチユーシヤの二人の面影であつた。クリルツォーフは勿論死を豫期してゐないのだから殊に氣の毒であつた。カチユーシヤはシモンソンのやうな立派な人物に思はれて、正義に達する眞正の堅固な道を發見したのだから、勇みに勇んで喜んでゐるのは左もあるべき筈だ。が、ネフリユードフは心中何となく懊惱として悶々の情が制へ切れなかつた。

黄銅の洪鐘の音が浪の上を盤紆つて響き渡ると、ネフリユードフの傍に立つ辻馬車馭者を初め乘合一同は脱帽して十字を切つた。其中で唯つた一人、船縁の欄干近く立つてるツィゼ今まで見た事の無い脊の低い蓬頭垢面の老人だけは十字も切らずに平氣な顏を擧げてネフリユードフを睨ッと見た。補綻たらけの上衣に羅紗のヅボンを穿き、補綻の當つた古靴を穿いて、肩に

は小袋を脊負つて古ぼうけた穴だらけの山の高い毛皮帽を冠つてゐた。

『阿爺さん、汝は何故お祈りを棄けねェんだ、』とネフリユードフの馭者は脱いだ帽子を再び冠りつ、『汝は洗禮を受けねェンかネ？』

『誰にハァ祈るだエ？』と襤褸に纏まつた老爺は一々力の入つた言葉で斷乎と云つた。

『誰にッて事があるもんか。』と馭者は吃驚してヘドモドしながら、『神様にお祈りするのは解り切つてるぢやァねェか。』

『神様にお祈りするだッて？　神様は何處に在るかネ？　お前様ァ知つてるなら教へて呉れさッせェ。』

老爺の言葉は凛乎としてゐたから、馭者めは此奴中々手剛い相手だ哩と、少と辟易たれ氣味で萎んで了つた。が、多勢の手前、此のまゝ默つて引込んで了うのも氣が利かないので、故と力味返つて口早に、

『何處にッて事があるもんか。神様は天に在るだ。』

『はァ、天に在らッしやるか。お前様は天に昇つた事があるだかネ？』

『天に昇らうと昇るめェと、神様にお祈りしなけりやなんねェのは誰でも知つてらァナ。』

『だが、誰だつてお前様ァ、神様を見た事は無かんべェ。唯つた一人、神様の一人子だと自分免許で定めてた仁が神様を見たと云ふたゞけぢや。』と老爺は苦り切つた顏をして云つた。

『解つた、解つた。汝は信者ぢやねェナ。木佛金佛を難有がるお怜悧連だんべェ、』と馭者は鞭の柄ル帶に挿みつ馬車の馬の馬具を直しながら云つた。

中には哄笑するものもあつた。

『そんだら汝のお宗旨は何だッペェ。なァ阿爺さん、』と同じ側の船舷に車の傍に立つてる中年の男は訊いた。

『俺かい、俺や信心するものは無エ。何故ッて、俺やァ自分の外は誰の云ふ事も信じましねェだ。』と老爺は前と同様に言下に斷乎と答へた。

『だが、足下は什麼して自分だけを信ずる事が出來る？』とネフリユードフは嘴を容した。『足

下だつて考違ひ思違ひといふ事はあらうがノ。』

『いんにや、俺やァ尙だお前樣、之まで一度だつて其樣ェな考違ェや思違ェをした事はありましねェだ。』

『だが、足下だつて人間なら、全然考違ひ思違ひをしないといふ筈は無い。眞理は二つと無いから、人間が若し全く考違ひ思違ひをしないものなら、信仰は唯つた一つて歸着すべき筈であるのが、實際世の中に種々の信仰があるといふのは何故だらう?』

『そりやァお前樣、世の中のハッてものは、自分を信じねェで他人ばかりを信じるから、種々なお宗旨が出來たンでがんす。俺も矢張他人を信じて自分といふものを失くなしてゐやしたから、一時は何うしたら宜ェやら全で方角を喪つた事がありやした。昔しの凝固まつたお難有屋も今のお利口な信者も「ユダイゼル」も「リスチー」も「ボボーウツィ」も「ベーズボボーウツィ」も「アウストリヤーク」も「モロカン」も「スコブツイ」も(露國に行はる〻宗旨の名)悉皆手前の味噌ばかりを陳べて、目の見えねェ小狗みてェに盞々してゐやす。世の中に宗旨てものは種々

ありやすが、人間の精神は本來俺だつてお前樣だつて誰だつて一つもんでがんす。でがんすから各自が自分の精神さへ信じてゐやしたなら、萬人が萬人一つ信仰になつて了ひやす。』

と老爺は大聲で喋べりつゝ四邊を見廻しながら、成るべく多勢に聞かせやうと思つてゐるらしかつた。

『足下は最う餘程以前から爾ういふ信仰を有つてるかネ?』

『俺の信仰でがんすかェ。左樣サ。俺が此信仰の爲めに豪ェ目に合はされてから最う二十三年目でがんす。』

『足下を豪い目に合はした! 如何いふ風に?』

『基督と同じやうな麗梅に豪ェ目に合はされやした。役人めに押へられやしてネ、裁判所だの坊主だの學者だのゝ前へ引張出されたり、瘋癲病院に入れられたりしやしたが、併し俺を如何する事も出來ましねェ。俺の精神は自由でがんすもの。俺に名前を云はせやうと思やんして、「其方は何といふ名だ?」と訊くだ。俺は何も彼も捨てッて了やしたから名もなければ家も無

エ、故郷も無エ、何にも有りまし無エ、俺やァ俺、夫だけでがんす。「其方は何といふ名だ？」「人間でがんす。」「何歳になる？」「俺の齢かエ？　齢なんぞ　勘定した事もねエだし、之までも此通りなら之から將來も此通り、始めも終りもねエだから勘定は出來ましねエ。」「其方の兩親は？」「天を父とし地を母とする外には親ちうものはありましねエ。」「それではツァールは？　其方はツァールを承認するか？」「ツァールはツァール自身のツァール、俺やァ俺で俺がツァール。」「何を質問しても一向要領を得ん奴ぢやノウ。」「質問して呉れいとお頼み申しやせんワ。」斯んな問答をやらかしやしたンで、復た豪く辛エ目に會はされやした。』

『足下は今何處へ行く？』

『足の向く處へ行きやす。俺やァ仕事があれば働きやすし、無エけりや乞食をしてゐやす。』と言掛けた時、筏が徐々着くのを見て、老爺は直ぐ話を途切らして勝誇つたやうに四邊を見廻した。

ネフリユードフは錢入を出し、若干か攫み出して與らうとすると、老爺は見向きもせずに首

を振つて、

『錢なんか要りましねエ。麵麭なら貰つて置くべエ。』

『イヤ、それは飛んだ失禮をした。』

『失禮な事があるもんか、何もお前樣が俺に無禮ベエしたわけぢやねエだし、無禮ベエしやうたッて出來ましねエだ、』と云ひつゝ老爺は脊中に小袋を脊負つて立つた。

其間に馬車も船から揚げて、再び馬を轅に着けた。

『喫驚けやした。那樣な爺と口を利くッてのは、旦那も餘程な好奇でがんす、』とネフリユードフの馭者は、恰もネフリユードフが筋骨逞ましい船頭に渡賃を拂つて再び馬車に乘移つた時、

『あの爺は下らねエ乞食でがすぜ。』

第二十二回

堤の上に登り切ると、馭者臺の馭者はグルリと顧盼つて、

『何處の旅館に着けますべェ？』

『一番上等の家は何處だ？』

『西比利亞ホテシに起した事は無かんべェが、だが、ヅーコフも中々上等でがんす。』

『何方でも汝の勝手な家へ着けなさい。』

馭者は再び横つちよに座つて、一と息早く馬を走らした。何處の町も例に由て例の通りで、同じやうな軒並び、同じやうな屋根裏の窓、同じやうな碧々した屋根、同じやうなお寺、同じやうな店つき、巡査までが同じやうであつた。唯つた一つ他の繁昌な町と違つてゐたのは、家が悉く木造で、街衢には石が敷いてなかつた。軈て大通りの只あるホテルの前に馬車を横附けにしたが、生憎空いた座敷が無いので、又外のホテルへと行つた。長い間ガタ馬車に搖られたり穢苦しい田舍旅籠や罪人宿舍の冷たい床に旅勞れを休めたりした擧句だから、案内された室は餘り立派でなかつたが、左も右くも從來住馴れてゐたと同じやうな座敷らしい座敷に、二ケ月振の愉快と清潔との中に身を置く居心は、中々宜かつた。

で、行李を解いてから先づ一番駈けに風呂に入浴つて二タ月振の垢を洗ひ、度々罪人宿舍を尋ねたお庇に取り切れなかつた虱の着物を脱ぎ棄てつゝ、糊の着いた襯衣に新らしいフロックコートを着けて知事を訪問に出掛けやうとした。で、ホテルの男が呼んで呉れた辻馬車で、キルギズ産の肥馬に鞭打つて知事の屋敷　と行つた。

知事の邸宅といふは中々宏大な構へで、巡査と番兵が門側に立番してゐた。家の前後は庭園で繞らし、樺や白楊が葉を振つた枝を張つてる中に、青々と繁つてる松や檜が交つてゐた。

生憎知事は病氣で來客を謝絶してゐたが、ネフリユードフは名刺を出して左も右くもと取次を頼むと、軈て取次は再び現はれて、

『御面會になりますから、何卒此方へ。』

玄關の容體から、家扶から、家僕から、二階の階段から、テカ〳〵蜡つてる床張りの舞踏室から、何から何までがペテルブルグの貴族の邸とソックリ其儘で、唯だ夫よりも一層仰山であると共に些と小汚なかつた。

知事は膽汁質のデブ〳〵肥つた團子鼻の男で、生際の拔上つた前額に大きな瘤、眼の下には吹出物が出來てる禿顱だ。土耳古絹の部屋着に纏まつて葉莫を燻かしつ、銀の皿に載せた茶碗から茶を喫みながら、

『御機嫌能う、如此な衣服をして甚だ失禮だが、併しお目に掛らんよりはと思つて、』と太い猪首に繻はつて頸後にクシャクシャになつてる襟を伸ばしつ、『少々不快で引籠つてます。貴下は又什麼して這般な遠方へ？』

『私は罪人の一行と共に參りました。其中に切つて切れない關係のものがありますので、』とネフリユードフは、『實は今日は其者の代理として、且他の用件をも兼ねて參上致したのです。』

知事は葉莫を一服、茶を一口喫んでから、靜に煙草の灰を孔雀石の灰皿まで持つて行かうとして、細い眼をしてネフリユードフを睨ッと見ながら、唯つた一度話し半ばに葉莫を薦めた外は眞摯に聞いてゐた。

此の知事將軍は、自由思想や人道主義が武職と調和出來ると信ずる修養ある軍人側に屬してゐた。が、元來が聰明で且公平な人物だから、怎ういふ調和が決して出來る筈が無いと忽ち氣が附き、此の心中の不調和を忘れる爲めに軍人間に行はれる飲酒の習慣に段々と泥み、次第に其の惡癖の害毒に犯されつゝ三十五年間の軍務に服した結果が醫者の所謂アルコール性になつて了つた。で、全身がアルコール漬になつて了ひ、如何な酒でも一口呑めば直ぐ醉つて了うが、一時でも酒の氣が無いと生きてゐられないのだから、酒量は實に莫大で、一と晩たりとも醉つてゐない事は無い。が、爰まで修行が積むとイクラ飲んでも蹣跚千鳥足を踏んだり管を卷いたりする事は決して無い。偶さか普を卷いても身分が身分だから洒落だと請取られて了う。

丁度ネフリユードフが訪問した其朝は、不測に善く分別があつて、自分の耳に入つた話が善く理解めた。常から口癖に繰返してゐる『醉ふて而して賢なれば二途を樂むを得』といふ格言を立派に行つてのけてゐる。

尤も此男の酒癖は最高上官も知らんでは無いが、餘人と比べると學問が出來た。勿論酒を飲み初めると同時に學問の進歩は熄んで了つたが、大膽で、敏活で、風采が堂々としてゐて、イ

クラ喰べ醉つてゐても泰然として少しも思慮を喪はない中々ものだから、此の責任ある樞要の位置に拔擢されたのである。

ネフリユードフは、自分の肩を入れてゐる囚徒といふは一行中の或る婦人であるが、何等の罪もなくて誤まつて刑の宣告を受けたから、自分が其代理となつて皇帝陛下に請願書を上訴して置いたと知事に話した。

『成程、』と知事は云つた。

『夫に就て此女の運命に關して、遲くも今月以内にはペテルブルグから當地へ宛てゝ私に手紙が來る筈になつてますから、就ては――』

知事は卓上に手を伸ばしてズンズラ短かい指で呼鈴を鳴らしつゝ、ネフリユードフを睨ツと視ながら煙草を燻かして激しく咳をした。

『――就ては、陛下に嘆願した結果が解るまで、其者の當地に逗留するのを御裁可あるやうに願ひたい。』

禮服の給仕が入つて來た。

『アンナは既う起きてゐるかい、訊いて來なさい、』と知事は給仕に向つて、『夫から茶を最つと持つて來なさい。』

と云ひゝネフリユードフを見て、

『最う一件は？』

『最う一件は、矢張一行中の某國事犯に關係してゐます。』

『はァ、左樣か、』と知事は意味ありげに頷いた。

『或る國事犯ですが、此男は非常な重患に罹つて、殆んで旦夕を計られないといふ危篤に落ちてゐます。夫故多分當地の病院に收容される事と思ひますが、夫に就て同じく國事犯の一人なる婦人が、一緒に殘つて看護したいと志願してゐます。』

『其婦人は親戚ぢやァムるまいノ？』

『親戚ぢやァありませんが、若し一緒に殘る爲めの必要があるなら、結婚しても宜いと云つて

ゐます。』

知事は眼をパチクリさせ乍らネフリユードフを睨と見つゝ、何とか巧い理窟を附けて要求を拒絶して呉れやうといふ容子を顯然と面に現はしながら、無言で葉莨を燻かしつゝ聽いてゐた。

軈てネフリユードフの言葉が終ると共に卓上の書物を手に取つて、指に唾を附けて頁を繙轉返しつ、囚徒の婚禮に關する條項を捜して出して讀んだ。

『其の婦人の宣告された刑は？』と知事は書物を見ながら云つた。

『徒刑』

『徒刑？　はゝア、夫ぢやと婚禮しても刑を輕減するわけには行かぬナ。』

『無論、ですが……』

『お待ちなさい。假に此囚徒が監獄外の人と婚禮するとしても、宣告された刑期だけは服役しなけりやならぬワ。そこぢやテ、問題は――此女と男が何方が刑が重いンぢやナ？』

『二人共徒刑です。』

『それぢやと困る。男の方は左に右く重患といふ事なら當地の病院に收容する事も出來るが、女を同じやうに殘す事は到底出來んぢや。縱令婚禮して妻となつたにしろ、宣告された刑には服さなけりやならんのぢやからノウ。』

處へ給仕は顏を出して、『夫人が珈琲をお煎れになりました。』

知事は無言で頷きつゝネフリユードフに向ひ、

『それぢやが、最う一遍猶ほ篤と勘考して見ませう。名は何と云ひますか、之へお書きなさい。』

ネフリユードフは云はれるまゝに名を書いて渡してから、更に此の重患の國事犯に面會したいと云ふと、

『夫も俺には取計らへんのぢや。勿論、貴下を決して疑ぐりはせんが、公然と取計らう事は出來んのぢや。併し貴下が特に希望するなら、貴下は金を持つてるぢやらうから、金を遣ふのぢやナ。何事も金次第ぢや、金が物を云ふ。賄賂を根絶やしせい〳〵と云ひをるが、此の賄賂公

行の世の中で、俺ばかりが嚴ましう云ふたとて、到底禁じ切れませんワ。下官になればなる程賄賂を欲しがりをりますワ。中央政府から三千里を距つてる此の田舍では、如何な役人でも小ツァールぢや。俺も矢張小ツァールぢや、』と呵々と笑ひながら、『貴下も之まで國事犯に面會するには多分金を遣つたぢやらう。なッ、夫に違ひないぢやらう。』

『全く仰の通り。』

『貴下が金を遣つたのは能う解りをる。囚徒に同情して面會しやうとするなら、金を遣ふのは當然ぢや。典獄だの護送士官だの、何れも話にならぬ薄給で家族を養つてるのぢやから、賄賂を與れば請取らずにはをられませんワ。俺ぢやとて貴下なり渠なりの位置にをれば矢張遣りもすれば取りもしますワ。そぢやが、俺の位置になると爾うは行かぬ。唯可哀相ぢや氣の毒ぢやからと云つて法律を一寸なりとも曲げる事は決して出來んのぢや。俺は行政官の一人として政府の信認を受けて此職務にをる間は、法律に從つて職務を行はねばならぬのぢや……先ア其樣な咄は之でお罷めにして、少と都の噂でも聞きたいもんぢやッ。』

と、夫からベテルブルグの新らしい咄を聞きたいのと、自分の見聞や仁義を衒ひたいのとで、何呉れとなく訊いたり咄したりした。

第二十三回

『時に何方に御投宿ぢやナ？』と知事はネフリユードフが歸らうとする別れ際に、『ヅーコフ？豪い處へ御投宿ぢやノウ。今晩五時に來給へ。粗飯を差上げやう。貴下は英語を話すかノウ？』

『はァ、些か話します。』

『そりや妙ぢや。丁度英國人が交通問題を研究旁々西比利亞の監獄を視察に來て、着いたばッかりぢや。今晩五時に會食する筈になつとるから、貴下も來て會つたら如何ぢや。五時の會食ぢやよ。俺の妻は時間のキチンとしたのが好きぢやからノ。其時お話しの女囚や病人の事に就て御返答しやう。何れ誰か知らん、病人と一緒に跡へ殘る事が出來るぢやらうテ。』

ネフリユードフは暇乞をして、其歸途に郵便局へ寄つたが、心中何となく勇んで氣强くなつ

たやうな氣がした。

郵便局と云ふは天井の低い家で、五六人の局員が計算臺を央に殆んど山のやうに集つてる人民と應對してゐた。一人の役人は首を傾げながら巧みに封書を印型の下へ滑り込ましてはトントンと消印を捺いてゐた。

ネフリユードフは餘り待たせられなかつた。名前を告げると直ぐ一束の可成り嵩のある郵便物を渡された。其中には手紙もあり、金を封じたのもあり、書籍もあつた、『歐洲通信の最近の號もあつた。

此一束の郵便物を持つて木の腰掛に戻つて來ると、手に帳簿を持つ兵士が控へてゐて、ネフリユードフの傍に立ちつゝ郵便物の檢査をし初した。其中に立派な狀袋へ入れて眞赤な封蠟で嚴封した書留郵便があつた。急いで封を破つて見ると、公文書を封入した辯護士セレニーンの手紙だから、ネフリユードフは俄に面が熱つて胸騷ぎがした。

確かにカチユーシャの請願に關する一件だが、扨て何といふ指令であらう乎。豈夫や却下で

はあるまいがと、危みながら急いで、頗る拙い折釘流の細書に眼を通して吻と一と息した。請願に對する指令は上々吉であつたのだ。

『拜啓、貴下と最終の會見は深大なる感情を小生に與へ申候。マースロワに關する貴慮誠に正當なれば、小生は更に懇密に此事件の眞相を究め申候て、愈々原裁判の不當なるを確認致し候へども、此場合唯請願局に上訴する外なく、乃ち貴諭に從つて取計らひ申候處、幸ひなる哉刑の輕減を得たれば、貴下伯母君カテリーナ伯爵夫人より拜承したる御宿舍へ宛て、右減刑の指令謄本封入御屆申上候。原本はマースロワ豫審中收容されし監獄署に交附し、其署より護送先きの西比利亞地方廳へ送達の筈に御座候。先は取急ぎ御吉報御通知申上候まで草々稽首。親愛なる友セレーニンより。

とあつた。夫から指令文の謄本は次の通りであつた。

『皇帝陛下の請願局は陛下に直奏したる請願書を可納し、』と月日から公文書的の定文句を陳べて、『皇帝陛下の請願局長は平民エカテリーナ・マースロワの陳情表に對して特に御軫念あらせ

られたるに由て、格別の御思召を奉じて前判決の徒刑を破毀して流刑に輕減し、西比利亞國内の遠隔ならざる地方に於て解放すべき事を宣示す。』

此手紙は何よりも喜ばしい上々の吉報で、ネフリユードフがカチユーシャの爲めなり自分の爲めなり望んでゐた事が悉く達せられたのだ。が、之が爲めに境涯が變つて來ると復た面倒が生じるのは當然で、カチユーシャが徒刑囚である間は婚禮するといふは唯の空想で、服役の苦を慰める外には何の意味も無かつたが、徒刑が輕減されて普通の追放となると、二人はいつ何時でも勝手に夫婦になれる。が、扨て率となると、實は世帶を持つ準備がネフリユードフには猶だ出來てをらぬのだ。加之ならず、シモンソンとの關係は如何する？　昨日カチユーシャが話した言葉は如何いふ意味だらう？　假に若しシモンソンと夫婦になるを承知するとしたら、カチユーシャの身に取つて果して幸福だらうか不幸だらうか？　其樣な此樣なが後から後からと續々湧いて來て、容易に思案が定らなかつたが、其内には何とか落着が附くだらう。何は扨置き、左も右く一刻も早く吉報を知らして放免の手續きをせにやならぬ、』と考へ、或は此の公

文の謄本で假放免になるかも知れぬと思つて、そこ〳〵に郵便局を出て辻馬車馭者に命じて監獄へと走らした。

尤も監獄を訪問する許可を和事から猶だ得て置かなかつたが、從業の經驗に由ると、上官が許さないものを却て下役が手輕くして呉れる例があるので、知事の特許が無くとも、或はカチユーシャに面會が出來て、次第に由ては吉報を傳へて直ぐ放免して貰ひ、序にクリルツォーフの容體をも聞き、今朝知事と會見した顚末をマーリヤに話す事が出來るかも知れぬから、物は試し、先づ當つて見やうとした。

此の監獄の典獄は脊の高い嚴かしい面の男で、口の方へと捩れてゐる頬髯と口髯を生やしてゐた。到つて難かしく四角四面にネフリユードフに應對して、上官の命令なき限りは決して外來人の面會を許さぬとケンモホロヽの挨拶だ。ネフリユードフは、都市の監獄でさへ其樣な面倒臭い手續きがなくても面會を許されますと云つて見たが、典獄先生少しも驚かず、

『或は其樣な例もありましたらう。が、本官は決して許しませぬ、』と斷乎として、『貴下方都人

士は我々田舎者を嚇かして困らせやうといふお積りだらうが、併し東部西比利亞の我々だとて法律は心得てゐます。場合に由つたらお教へ申しても宜しい。』

恁ういふ挨拶振だから、皇帝陛下の請願局の指令の謄本も此典獄には何の效力もなく、一歩たりとも監獄の塀の内に入るのを斷乎として許さなかつた。で、ネフリユードフが請願局の指令の謄本でカチユーシャを放免する事が出來ざうなのもだと云ふ正直な想像を鼻頭で冷笑ひつゝ、上官からの直接命令なき以上は何人たりとも斷じて放免出來ぬと云つた。

そこで、減刑の指令が降りたのをマースロワに傳言する事、上官からの特赦命令があれば一時間經たぬ間に必ず解放する事、此の二つだけを固く約束した。が、タリルツォーフに就ては一向何の消息も告げず、其樣な男が在るか在ないかも話す事は出來ぬと云つた。這般な醜梅だから此上に手の出しやうも無いので、仕方がなしに馬車に乘つて旅館へと引返した。

典獄の强硬は、實は收監人が平生に二倍して辯内に溢れたお庇に窒扶斯が突然發生したからで、辻馬車馭者は其の戻り路の途中ネフリユードフに向つて話した。

『あんでもベスト見てエな流行病が監獄でおッ始まつて、毎日二十人以上おッ死ぬさうでがんすよ。』

第二十四回

ネフリユードフは監獄の不首尾にも一向怯けずに、同じ氣强い勇んだ心持で直ぐ州廳へ出掛けて、マースロワの特赦減刑命令が着いたか如何かと訊いた處が、尙だ着かないといふので旅館へ引返し、取敢へずセレーニンと最一人の辯護士へ宛て直ぐ手紙を出してから、時計を出して見ると、丁度知事の饗應に案内された時刻であつた。

知事の邸へ行く道すがらもネフリユードフは、此の減刑の通知を得てカチユーシャは怎んな顏をするだらう、之から先きカチユーシャは何處で暮す氣だらう、二人は一緒に怎う暮したものんだらう、シモンソンは什麼したものだらう、カチユーシャとの關係は什麼なつてゐるだらう——と、左さま右さまカチユーシャの境涯の變化から過ぎ越し方までが浮んで來た。

『イヤ、這般な事は今忘れて了はにや不可ん、』と思返して心の中からカチユーシヤを取除けやうとした。『其時が來れば又其時の分別がある。』夫よりか差向き知事に會つた時話して置くべき事をと、考へ初した。

知事の饗應は金持や商官がする有觸れた尋常の贅澤をしたもので、ネフリユードフには一向珍らしく無かつたが、長い間の道中に、贅澤は魯か普通の快樂にさへ遠ざかつてゐた身には中々愉快であつた。

知事の夫人といふは尼古拉一世の大奥に宮仕へして、露西亞語が拙で佛語の方が却て自在な極古風な上臈であつた。スックと直立したまゝで、手を出しても腰から肱を少しも離さないで、到つて應揚に沈着拂つてゐた。良人に對しては些と氣の毒なほど關ひつけなかつたが、賓客には頗る慇懃で、對手に由て多少物言振が違つてゐたが、何處までも嫻雅かだ。殊にネフリユードフに對しては故とならぬ愛嬌を覆して、左も同じ身分のものだと云はぬばかりの待遇をしたから、ネフリユードフも久し振で自分に威嚴が附いた心地がして、心中尋常ならず滿足した。

確かに夫人は、ネフリユードフが態々西比利亞くんたりまでやつて來るやうな偏人でも、本來正直な立派な人物であるのを合點んで、全く列外の人と見て呉れたやうにネフリユードフには思はれた。

此の微妙じき應對振や、善美を極めた座敷の模樣や、四邊の調度の美々しく飾られたのを見ると、都では之まで度々見馴れてゐたのであるが、同じ階級の教育ある同士で臂を交へて語るのが今更のやうに面白く、此の數ヶ月間を過した變つた境涯が夢のやうで、俄に眼が覺めた心地がした。

主人の知事夫婦、娘夫婦と知事副官の外に、座に列なつたのは前觸のあつた英國人と、金鑛で大金儲けをした商人と、西比利亞内の遠い邊鄙の知事とで、是等の賓客は何れもネフリユードフの氣に入つた。

赤ら顔の壯健々々した英人は頗る拙な佛蘭西語を話した。が、本國の英語を話させると、頗る能辯で感動させた。且諸國を漫遊して來ただけあつて亞米利加や印度や日本や西比利亞の話

が頗る面白かつた。

金鏑の採掘に從事してゐる若い商人は農夫の息子ださうだが、倫敦裁縫の燕尾服に金剛石の袖釦鈕を着けたリウとして扮裝で、家には立派な書齋を有つてゐて、度々慈善事業にも寄附し極自由な歐羅巴思想を抱懷してゐたから、ネフリユードフには頗る氣に入つて、朴訥律義な百姓氣質に歐羅巴文明のお化粧をした立派な文明人のお手本と思つた。

西比利亞の或る邊鄙な地方の知事と云ふは、ネフリユードフがペテルブルグに滯在中大評判のあつた或る省の局長どので、薄い縮れ髪の、柔しい碧い眼の、指環をゴテ〳〵穿めた白い手の、始終笑顔をしてゐる、腰から下の肥つた好紳士である。當家の主人は滔々たる收賄官吏の中で此人一人が決して賄賂を取らないのを稱して尊敬してゐたし、夫人は夫人で、自分が音樂が好きで且ピヤノの名人である處へ、此知事も矢張其道の功者で、何時でも一緒に連彈をするのを喜んで下へも置かず款待なしてゐた。夫だからネフリユードフも、此男の醜聞を萬更知らぬではないが、矢張夫程不快に思はず、機嫌を能くしてゐた。

髭を剃り立ての青々した顔の元氣な活潑な副官は始終莞爾々々して座を取持つてゐた。其の容子が復たネフリユードフの氣に入つた。が、誰よりも一番ネフリードフを樂ましたのは、知事の娘の若夫嫌であつた。娘といふは容子の好い極淡泊した氣性で、二人の兒供を可愛がるに餘念が無かつた。良人といふは、本とが好いた同士で、散々兩親と摺つた揉んだの末に聟に貰はれたのだが、モスコー大學の學位を有つてる自由思想の男で、溫厚な才識のある青年である。當時は政府の役人となつて統計事務に服し、豫て研究し、且同情して、早晩絶えて了ひさうなのを救はうとまでした土人の調査に殊に腐心してゐた。

是等の人々は主人を初め賓客一同、何れもネフリユードフを款待したばかりでなく、此の遠來の珍客に會つたのを心から喜んでゐるのが明らかであつた。

主人の知事は將軍の軍服に白十字架章を佩用し、宛も舊友であるやうにネフリユードフに會釋し、他の賓客に對つても、何は無くとも好きなものを賞翫してヴォツカを十分喫つて呉れと云つた。で、ネフリユードフに、今朝ほどは彼刻から何處へ行きましたと訊いたので、ネフリ

ユードフは、郵便局へ行くと今朝お咄しゝた女囚が減刑された通知が來てゐたのを偶然請取つたと、概略の顚末を話して、扨て監獄を訪問する許可を得たい云つた。

折が折だから知事は不快な顏をして何とも云はなかつた。で、

『如何です、一杯？』と丁度食卓へやつて來た英國紳士に話し掛けた。

英國紳士は杯を受けて一と口飲んでから、禮拜堂や製造場は見物したが有名な大輸送獄舍を巡檢したいと云つた。

『ホウ、夫は好都合ぢや、』と知事はネフリユードフに向ひ、『貴下も御同行なさるが宜エぢやらう――君、兩君に通行證を、』と副官を顧盼いて云つた。

『何時行きます？』とネフリユードフは英國紳士に訊くと、

『今晩は如何です？』と英國紳士は云つた。『夜だと囚徒が監房内に引籠んでをつて、萬事油斷をしてゐますからナ、却て有の儘の實況が見られます。』

『はッはッ、最も光彩を放つてる處を視察しやうといふンぢやネ。夫も妙ぢやらう。監獄の事

に就ては俺も度々書いたが、誰も一向氣を留めて呉れんのぢや。却て外國新聞に載たのを讀ませる方が宜エぢやらうテ。』と云ひつゝ知事は、恰も夫人が一一賓客を各自の席に案内してゐる饗應の食卓へ行つた。

ネフリユードフは當家の夫人と英國紳士との中央の席に着いた。其の向側は令孃と前の某局長であつた。談話は各方面に轉じて、英國紳士が漫遊した印度の話を初めたかと思ふと、忽ち當家の主人が盛んに非難するトンキン征伐に飛んだり、西比利亞に於ける收賄沙汰や一般官吏の腐敗咄となつた。何れも是もネフリユードフには餘り面白くなかつた。

が、饗應が濟んで珈琲となつてから、ネフリユードフ初め英國紳士や當家の夫人がゲラッドストーンに關する頗る面白い咄を始めた。ネフリユードフは、自分ながら一番巧い事を云つたと思つたが、確に質問者の耳を傾けしめたやうだ。美酒佳肴の後、最良の珈琲を味ひつゝ、氣持の快い安樂椅子に凭れて快濶な上流人と談話する歡樂は愈々闌はに、嚮て英國紳士の所望で、當家の夫人が前の某局長と聯んでピヤノに向つて、豫て練習したベートーフエンの第五のシン

フォニーの連彈を始めた時は、ネフリユードフは蕩然となつて暫らく御無沙汰した得意の境に入つて、今更のやうに自分が善人であるのを初めて悟つたやうな氣がした。

ピヤノが素晴しい立派なものである上に、シンフォニーが亦頗る見事な出來榮であつた。少くも豫てから此のシンフォニーが大好きなネフリユードフには爾う思はれた。で、此の頗る美くしいアンダンテを聽くと、自分の美事善根を思ひ浮べて小鼻がムズ〳〵して來た。

軈てネフリユードフは暫らく遠ざかつてゐた此の面白い曲を久し振で聽いたのを夫人に慇ろに禮を述べて暇乞をしやうとした時、若夫人は思ひ詰めたやうな氣色でボウッと顏を染めながら、

『閣下、一すつとお待ち遊ばせ。先刻、兒供の事をお尋ね遊ばしましたが、何卒兒供を見てやつて下さいまし。』

『また此子は、誰方でも兒供を見たがッてゐらッしやるやうに思つてるよ、』と夫人は我が娘の臆面も無い無造作をホヽと笑ひながら、『公爵は兒供なんぞを何とも思ッてゐらッしやりやァしないよ。』

『イヽエ、私は之でも兒煩惱ですから、』とネフリユードフは溢れるやうな母親の慈愛に動かされつゝ『是非お兒さん方を見せて戴きませう。』

『はッはッ、到頭兒供を見せに公爵を引張つて行きをるワ、』と知事は聟と副官と金鑛所有者を對手に骨牌臺に向ひながら大きな聲で、『さァ〳〵、お前のお役目を濟まさッしやい。』

若き夫人は我が子が何と評されるだらうとイソ〳〵と奥の間へ行く踵からネフリユードフも從いて行つた。三番目の天井の高い白紙張りの部屋へ行くと、笠付きランプの火影に小さな搖籃が二つあつて、其中央に白いケープを肩に掛けた看護婦が附いてゐた。親切らしい質朴さうな頰骨の高い、純粹の西比利亞風の顏をしてゐた。

看護婦は起つて腰を屈めた。若き母親は初めの搖籃の上へ身を伸して覗込むと、長つて二歲になる可愛らしい女の兒が餘念なく口を開いてスヤ〳〵と熟睡つてゐた。房々した縮れ髮が枕に振掛つてゐた。

『之がカチ坊です、』と云ひつゝ母親は青い縞のフランケットの上掛を捲くると、眞白なボチャボチャした可愛らしい足を踏ン張つてゐた。『好い兒でせう。ネエ閣下、二歳になります。』

『可愛いナ！』

『此方がワスーク――お祖父さんがワスークて呼んでます。カチ坊とは全で違つてませう。西比利亞人みたいですワネ。』

『好い坊ちやんだ！』とネフリユードフは腹這に臥てゐる丸々と肥つた子を見て云つた。

若き母親は滿足したらしく嫣然と笑つた。其最中、ネフリユードフは鐵の頸や、クリ〳〵坊主や、囚徒同士の喧嘩口論や、死掛つてるクリルツオーフや、獄衣のカチューシャや、其の墮落した前生涯や、何や彼が一時に胸に浮んで來て、眼前に見る此の純潔無垢の幸福と引較べて妙な氣持がした。

ネフリユードフは何度も繰返し兒供を褒めちぎつて、十分に母親を喜ばせてから、復た一緒に座敷へ戻ると、英國紳士は監獄訪問の準備をして待つてる處で、二人は一家の人々に暇乞を

して玄關に出掛けた。

天氣は如何の間にか變つてゐた。大片の雲はシン〳〵と盛んに降つて屋根から庭の植込、玄關の階段から通行路、扨ては馭者の帽子から馬の脊までも積つてゐる。

英國紳士は自分の馬車へ飛乘りざま監獄まで行けと馭者に命じたので、ネフリユードフも自分の辻馬車を呼んで飛乘りつゝ、傾り面白くも無い案内のお役目を進まぬ勝ちながら、雜儀な雪の中を重い車を軋らしつゝ英國紳士の馬車の踵に隨いて行つた。

第二十五回

陰氣な監獄の建物の門には番兵が立ち、入口には薄暗いランプが點いてゐた。屋根も、入口の階段も、燈光の射してゐる窓が列ぶ壁も、悉く眞白な清い物で蓋れてゐるに似氣氣なく、朝よりは愈々陰氣に暗澹として一層凄まじかつた。

厳格な典獄は門へ現はれて、ランプの光で知事から二人に交附した通行證を不思議さうに見

つゝ肩を搖つた。が、併し上官の命令には服從して二人を案内し、中庭を通つて右手の口へと入つて、直ぐ階段を登ると事務室である。で、二人に席を薦めつゝ用向きを訊き、ネフリユードフが早速マースロワに面會したいと云ふまゝに直ぐ押丁を呼びに遣りつ、英國紳士が徐々訊き初した疑問に一々答へやうとした。ネフリユードフは二人の間の通譯となつた。

『當監獄は何人を收容する設計です？』と英國紳士は質問した。『現に何人收容されてゐます？男は同人……女は……兒供は？……鑛山に服役してゐるのは何人……流刑は何人……病人は何人？』

ネフリユードフは兩人の間に介在つて質問や答辯の意味なんぞは浮の空で機械的に通譯してゐたが、マースロワとの大切な會見を控へてゐる矢先に、這般な思ひも賴らぬ役目を托まれたのを馬鹿々々しく思つた。丁度、英國紳士の質問を通譯してゐる最中、跫音の近づくのが聞えると共に事務室の扉が開いて、押丁の後からカチューシャが踵いて來た。例の通りの獄衣に手巾で頭を包んだ姿を見ると、ネフリユードフは俄に頭から重い物を冠せられたやうな氣がした。

『愈々世帶を持つ、妻をつ持、子を持つ、人間並の生活を送る、』といふ考が、俯目でツカ〳〵と入つて來たカチューシャを見た途端にフラ〳〵と起つた。

で、急いで起つて二歩三歩カチューシャを迎へたが、カチューシャは澁面作つて如何にも不愉快さうに見えた。いつぞやネフリユードフを責めた時の顏色其儘で、一時ポウッと赤くなつたが、直ぐ復た蒼くなつて、イラ〳〵した容子でジャケツの端を捻りながら、鳥渡ネフリユードフを見上げたが、直ぐ復た俯目になつて了つた。

『減刑の命令が來たのを知つてるかネ？』

『ハイ、存じてます、押丁から聞きました。』

『夫で、愈々命令書の正本さへ着けば直く放免される運びとなるンだから、今から何處なりと居處を定めて置かんとナ――其邊を篤と談合……。』

カチューシャは急いで話の腰を折りつゝ、

『其樣な御相談は……何卒御無用に願ひます。妾はシモンソンの行く處へ隨いて參ります。』

カチューシャは興奮してゐるに似氣なく、屹と眼を上げてネフリユードフを見つゝ、咄嗟に判然と言退けて了つたは、ネフリユードフに會つたら怎うと用意してゐたやうだ。

『眞實か！』

『貴郎も御承知の通り、シモンソンは妾と一緒に暮す意でをります、』と言掛けて口を途切らし、些と怯れ氣味なのを再び氣を取直して、『シモンソンは妾の傍で暮したいと云つてをります。妾の身に取つて這般な幸福な事がありますか。』

ネフリユードフは無言で眤と聞きつゝ、『矢張シモンソンに惚れ臭つて、此方が命を投出して盡す心中立を何とも思はないのか。それとも又――』と心中に思案した。『俺に心中立をする意で、此方の利益を思つて、心にも無い拒絶をして、自分はシモンソンと運命を共にして永久に埋もれで了う了簡か。此の二つのの中の一つに違ひない、』と思ふと氣耻かしくなつて、顏の赤くなるを覺えた。

『ではお前は、シモンソンを戀してゐるのかネ？』

『戀してゐやうとゐまいと其樣な事が什麼しました、』とカチューシャは毅然として、『色の戀といふ事は妾は捨てゝ了ひました。殊にシモンソンは外の人とは違ひます――』

『勿論、私も知つとる。シモンソンは實に見上げた立派な人物だ。夫だから私は――』

カチューシャは餘計な事を云はれたり、自分の思ふ事を言殘したりしてはなるまいと掛念する如く、直ぐ又疊み掛けて、

『貴下のお思召通りにならんのは、何卒堪忍して戴きたい、』と奥底の知れない神祕な斜視の眼で眤とネフリユードフを凝視めつゝ、『怎うしなければならないのが解つてゐますから怎う覺悟しましたんです。貴郎だつても矢張――』

と、カチューシャはネフリユードフがツイ唯つた今、心中に思つてゐた事と同じ心持であるのを話した。が、ネフリユードフは最早夫どころでなかつた。カチューシャはの潔氣な心持に耻入りもしたが、今まで何も彼も捨てゝ了つた心盡しを煙にするのが如何にも殘念で、

『しかし、意外だつた。』

『何故でムいます。這般な處で何時までも御苦勞遊さずとも、最う好い加減に御苦勞遊ばしたぢやありませんか、』とカチューシャは微笑した。

『イヤ、苦勞どころぢやない、私の爲めの藥になつたのだから、成るならお前の爲めに最つと盡したいのだ。』

『妾共は、』とカチューシャは故更に「妾共」の言葉に力を入れつゝネフリユードフを見て、『妾共は此上何にも望む事はムいません。貴郎には既う十分お世話になつてをりますから……ですから貴郎の御一身の爲めなら知らぬ事……』と言掛けたが、忽ち聲を慄はして途切らして了つた。

『何もお前が禮を云ふ理由は無い、』

『否エ、爾う仰しやいましても神樣が總勘定をして下さいます、』とカチューシャは云つた。黑い眼が涙で一杯に濕んでギラ〳〵してゐた。

『お前は實に善人だ！』

『妾が善人？』とカチューシャは涙に濕んだ聲で云ひつゝ、情なささうな淋しい微笑を全面に漲らした。

『什麼です？』と英國紳士は喙を容した。『宜うムんすかネ？』

『今直ぐ、』と答へつゝ、ネフリユードフは更にクリルツォーフの容子を訊いた。

カチューシャは漸つと湧きたつやうな心を押靜めつゝ、知つてるだけを靈く話した。クリルツォーフは途中から益々容體が惡くなつたので到頭病院へ移され、マーリヤは心配して看護したいと願つたが許されなかつたさうだ。で、此顚末を語つてから、

『最う行つても宜しうムいますか？』と訊いた。ネフリユードフは英國紳士が先刻から待兼ねてゐる容子を見て取つたので。

『では、復た會びませう、』と云ひつゝ手を伸ばした。

『失禮、』とカチューシャは人には聞えないほどの低音で云ひつゝ、互に眼と眼と見合はしたが、例の魔力のある斜視の眼で昵と見入りつゝ、凄しけな微笑を含んで、故と『さよなら』と

云はずに『失禮』と云つたので、其心持が能く合點めた。全くネフリユードフの想像通りに、ネフリユードフを懷つてる餘りに、此悪縁を繋いでネフリユードフの一生を埋もらすに忍びないで、寧そシモンソンと一緒になつてネフリユードフを氣儘にしたいと覺悟して、恁うしたいと思つた事をやつて退けたのを喜んだが、扨て潔ぎよく覺悟を定めても愈々分れやうとする此間際には矢張未練が殘つてゐるのが解つた。

で、ネフリユードフの手を緊と握つたが、クルリと身を返して急いで行つて了つた。

ネフリユードフは英國紳士を顧盼いて見ると、何か一心になつて頻りに書留めてゐるので、壁側の木の腰掛に腰を卸すと同時に疲勞して了つた。此の勞れは徹夜をしたからでもなく、旅勞れでもなく、豪い心痛をしたからでもなく、唯だ何となく世の中が倦きて了つたやうな氣がして腰掛の脊に凭れて眼を閉ぢてゐると、我知らずウト〳〵して何時かグッスリと熟眠んで了つた。

『さッ、檻房を御巡廻になりませんか、』と典獄は計いた。

ネフリユードフは喫驚して眼を覺ました。英國紳士は丁度書留を終つて檻房廻りを云出したので、嫌々ながら浮の空で、其踵から隨いて行つた。

第二十六回

とッつきの室を通つて胸の悪くなる臭氣のする廉下へ出ると、二人の囚徒が板の間で小便してゐるのを見て呆れ返つた。で、典獄の案内で徒刑囚檻の第一房を先づ見舞つた。約七十人の囚徒が棚の寢床に頭と頭と重なり合ふやうに臥てゐたが、參觀者の來たのを見ると、周章てゝ跳起きて寢床から飛下りて整列した。唯つた二人だけが矢張寢床に轉がつてゐたが、二人とも病人で、若い方は非常な高熱で苦み、年を老つた方はウンウン唸つてゐた。

英國紳士は典獄に向ひ、何時から此若者は病氣になつてゐるかと訊くと、典獄は今朝からだと答へた。尤も老人の方は暫らく胃を惱んでゐるが、病院が滿員で收容する事が出來ないのださうだ。

英國紳士は不感服な顏をして首を傾けたが、囚徒達と談話を試みたいからと云つてネフリユードフに通譯を賴んだ。此紳士は西比利亞の流刑人や監獄を研究する傍ら信仰に由ての救ひ及び贖罪の敎を說敎する目的を持つてゐたのだ。

『渠等に話して戴きたい。』と英國紳士は云つた。『基督は渠等を憫れみ渠等を愛し渠等の爲めに死んだのである。夫故に渠等が若し之を信じたなら救はれる。』

囚徒は左右の手を「く」の字形に小脇に當てゝ謹んで默聽してゐた。

『此書物は、』と英國紳士は更に言葉を繼ぎ『渠等に話して戴きたい。此書物は此の救ひの事に就て悉しく書いてありますが、字の讀める者がありませうか?』

實際字の讀めるものは此中で二十人しか無かつた。

英國紳士は手革鞄の中から聖書を數冊取出すと、囚徒達は木綿のシャツの袖の下から眞黑な爪の生えた荒くれた手を出して奪合つた。が、英國紳士は唯つた二冊だけを殘して行つた。

第二房でも同じ通りであつた。同じやうな腐つた空氣が充滿して、同じやうな聖像が窓と窓

との間に掛つて、同じやうな臭い桶が入口の左にあつた。

囚徒達は矢張同樣にピッタリ密着き合つて寢てゐたが、同じやうに跳起きて同じやうに整列した。三人だけが病人で、一人は床の上に起き直つて坐り、一人は臥たまゝ顧盼いても見なかつた。英國紳士は同じやうな說敎をして、前と同樣に二冊の聖書を置いて行つた。

第三房には四人の病囚があつた。英國紳士は何故病囚を盡く纏めて一室に置かないかと訊くと、典獄は當人達が好まないからだと答へた。且、病氣は何れも傳染質でない事から、屢々監獄醫を巡見らせて相當の手當をする事まで言足した。

『巧く吐しをる。醫者めは二週間も面を出した事が無エくせに、』と私語くものがあつた。

此の壁訴訟には典獄は何とも答へないで陽房へ案內した。扉を開けると囚徒は忽ち跳起きて起立した。英國紳士は前と同樣な說敎を繰返して聖書を與へた。第五房も第六房も皆同樣で、斯くて右側を濟ましてから左側に移つた。

徒刑囚を濟ましてから流刑囚、流刑囚から町村追放人、及び任意で同行する自由の民と、各

房を悉く巡廻したが、何れも皆寒さに震へ、乏しきに餓ゑ、怠けたり、病ほうけたり、墮落し切つたりした、野獸同様の狀態を暴露け出してゐた。

英國紳士は聖書を豫定の部數だけ頒つた後は與るのをも止め說敎をもしなかつた。で、此の慘憺たる實情を見、胸の惡くなる空氣を呼吸した爲めにタユ〳〵として了つて、檻房から檻房へと巡廻して典獄の談話を聞いても、唯だ『成程、成程』と繰返してばかりゐた。

ネフリユードフも矢張同様に夢を見てゐるやうな氣がして、進みもやらず退きもやらず、疲勞して氣が拔けたやうに茫然と踵いて行つた。

第二十七回

流刑囚を收容した或る檻房で、今朝、渡船で邂逅つた奇怪な老爺を見掛けてネフリユードフは吹驚した。此のヨボクタの皺苦茶老爺は、肩の邊が破れたボロボロの占襦衣一枚ぎりに同じやうな洋袴を穿いて、素足でベタリと寢床脇の板の間に坐つて、新らしい參觀者が來たのを訝

かしげに屹と見た。襤褸襦衣の破穴から際いて見える肌付では隨分衰弱してゐるのが解つてゐたが、渡船で見た時よりは容貌がシツカリして、一層勢ひが好かつた。

他の檻房と同様に、參觀者が典獄の案内でやつて來ると、囚徒は周章てゝ蹌起きて起立して敬禮を表した。が、此の老爺だけは坐つた儘見向きもしないで、ギロギロ眼を輝らしつゝ苦り切つて八の字を寄せた。

『起立！』と典獄は厲々しく命令した。が、老爺は起立しないばかりか、左も輕蔑にするやうにニヤリと笑つた。

『汝の家來たちはソレ汝の前に起立してゐるだが、俺ア汝の家來でねエだよ。汝の前額にゃ、ホラ、刻印が捺してあるだ……』と云ひつゝ典獄の前額を指した。

『何、何、何んだ？』と典獄はクワッと怒つてツカ〳〵と進んだ。

『私は此の男を知つてますが、』と、ネフリユードフは周章たゞしく、『怎うして監獄へ入りました？』

『通行券を持つてをらんので、警察から引張つて來ました。這般な奴を伴れて來てはならぬと豫て云ふンですが、伴れて來るから仕方がない、』と眼を瞋らして流盼に老人を見た。

『はゝア、汝もアノ何だナ、』と老爺はネフリユードフに向つて、『汝も矢張法敵の片割だナ？』

『イヤ、私は參觀に參つたのだ。』

『はゝア左樣か、法敵の奴等か人民を虐げる實況を見にムつたか。能ウく見て行かッしやい。這般な狹ッこい檻の中に多勢押籠めて奈何するだ。人間てものは前額の汗で飯を喰ふのが當然だのに、働く事の出來ねエやうに鎖固めて、豚を飼う了簡でけつかる。之ぢやア人間は畜生になつて了うべエ。』

『何を云つてるんです？』と英國紳士は訊いた。

ネフリユードフは、此老人は典獄が多勢の人間を禁錮する不都合を罵つてゐるのだと通譯して聞かした。

『では一つ訊いて下さい。法律を守らないものを如何したら可からうか。』

ネフリユードフは此質問を通譯すると、老人は變な笑ひ方をして行儀の好い齒を露出しつ、

『法律？』と馬鹿にするやうに繰返した。『人民の物は何でも彼でも、土地から何から有らゆる權利を奪つて了つて自分のものとし、自分に敵對するものを殺して了つてからの奪る勿、殺す勿ッてのが法律だ。最つと早く法律を作つたら宜かつたべエに。』

ネフリユードフは譯して聞かせると、英國紳士は莞爾と笑ひつ、

『夫は先づ宜しとして、今日の處、人殺しや盜賊は什麼したら宜からう？』

『先づ法敵の刻印を汝の前額から取つて了はッしやいと話して貰エてエ、』と老人は小難かしい面をして八の字を寄せつゝ『すれば汝、盜賊も人殺しも何も有つたもんぢやァねエ。』（眞の基督教の目から見れば盜賊も殺人しも一視同仁で特に罪名を負はしむべきものでは無いといふ意味だ。）

『此奴は氣が違つてますナ、』と英國紳士はネフリユードフの譯したのを聞きつゝ云つた。で、肩を搖りながら襟房を去らうとした。

『人は各々自分の頭の上の蠅を追つて、餘所の奴のする事は打捨らかして置くが宜エだ。自分

は自分、他人は他人だ。人を罰したり許したりするのは神の爲る事で、人間には解るもんでねエだ、』と老人は云つた。『各自が各自の心を主人と頼みせエすりやア、國王も政府も役人も無くて濟むべエ。さア、行かッせエ、行かッせエ、』と老人は腹立たしげに八の字を寄せつゝ眼を光らして、尙だ檻内を徜徉いてゐるネフリユードフを見て『汝は法敵の家來共が人民の身體に虱を倒つてゐを能ウく見屆けさッしやたかネ。さッ、行かッせエ、行かッせエ。』

ネフリユードフは檻房を去つて、軈て只ある扉の開いてる室の外で、如何なる室かと、典獄に質問してゐる英國紳士の傍へ行つた。

『死體の置場です。』と典獄は答へた。

『死體の置場――』

とネフリユードフの通譯を聞き、典獄の許可を得て入つて見た。室の廣さは左程に大きくない普通の檻房であつた。壁に掛けた小さなランプが朧朧朧と隅つこに積んである袋や圓木を照らしてゐた。其の右方の寐床の棚に四人の死骸があつた。

一番初めの死骸は、ザク〳〵した木綿の襯衣に下締一つの脊の高い男で、チョンボリ鬚を生やして頭を半分クル〳〵と剃つてゐた。死骸は既にシャチコバつて確かに胸に組合はしてゐたらしい靑ざめた手を左右にダラリと垂れて、兩足を開いてゐた。

其傍に黃ばんだ小さな顏の、鼻の尖つた婆さんの死骸があつた。上下とも白い獄衣で、素足で、頭巾無しで、頭髮の毛は薄かつた。其鄰りはライラック色の衣服に纏まつた男の死骸で、此色を見るとネフリユードフは忽ち偶つと憶ひ浮べた。

で、段々傍へ寄つて熟々死骸を見ると、上の方へ跳ねた尖つた髯、鼻筋の通つた形狀の好い鼻、實くて白い前額、薄く縮れた髮の毛――紛れも無い見覺えのある顏だが、しかし如何しても、自分の眼を信ずる事が出來なかつた。昨日は現に、眼を瞋らして興奮して悶え苦んでゐたのが、今日は靜かに、穩やかに、最早手も足も動かさずに、美くしく永眠つてゐた。果して之はクリルツォーフであつた。精神は死んでも形骸は變らぬクリルツォーフであつた。

『何の爲めに苦勞した？　何の爲めに活きてゐた？　此臨終の際に悟が開けたであらうか？』

ネフリユードフは徐ろに考へたが、其の解答は出來なかつた。唯だ死んだといふ外には何の解答も出來さうもなかつた。で、ツイ茫然と氣が遠くなるやうな心持がしたので、英國紳士に訣別を告げる方角も無く、典獄の案内で戸外に飛出しつゝ、少とも早く歸つて、是非とも唯一人でユツクリと今夜の顚末を考へずばなるまいと、急いで旅宿へ辻馬車を走らした。

第二十八回

ネフリードフは直ぐ床へ入らずに、暫らく部屋の中を往つたり來たりして考へた。カチューシャとの事件が全く終結して、自分が不用となつて了つたといふ事が情なくもあり恥かしくもあつた。其他の仕事も尙だ十分果さないのみならず、前よりは一層困難になつて一層努力ぜねばならなかつた。

此頃中到る處で、殊に今日あの慘憺たる檻房で實見した惣ての恐ろしい惡――就中あの親愛なるクリルツォーフを殺した惡――あゝいふ惡が世の中を支配し勝誇つてゐて、並大抵では迎

も打勝てさうもなく、怎うして打勝たうかと方法を案ずるさへが思ひも寄らなかつた。ネフリユードフの想像中には冷酷な將軍や官吏や獄吏の爲めに騷がしい獄舍に囚禁された數千百人の倫落の人間が浮んで來ると共に、傍若無人に官吏を罵つた爲めに瘋癲視された不思議な自由の老人や、匹夫匹婦の死體に伍する憤死したクリルツォーフの美くしい蠟の樣な死顏を憶ひ浮べた。で、以前の問題――ネフリユードフの渠自身が氣が狂つてゐる乎、或は怎ういふ惡事を行ひつゝも自分では正氣のツモリでゐる人たちが氣が狂つてゐる乎、といふ以前の問題が再び新らしい力を盛返して解答を迫つた。

歩き草臥れ考へ草臥れたので、渠はランプに近く長椅子に凭れて、英國紳士が紀念に呉れた聖書が、歸ると共に衣兜の物と一緒に卓子に投り出されてあつたのを取つて、機械的に繙いて見た。

『聖書の中には何でも解決されてるといふが、』と考へつゝ、何心なしに繙いて馬太傳第十八章の一節から四節までを讀出した。

『其時、多くの弟子はイエスに來つて曰く、天國に於て最も大いなるものは誰ぞや？　イエス幼子を呼び、彼等の中に置きて曰く、我まことに爾曹に告げん、爾曹心を改めて幼子の如くならずんば天國に行く事を得ず、凡そ此幼子の如く自ら謙下るものは天國に於て最も大いなるものなり。』

『爾うだ、爾うだ、其通りだ、』とネフリユードフは、之まで自分が謙下つた時の心の平和と歡喜とを憶出しつゝ更に復た讀續けた。

『又わが名の爲めに此の如き一人の嬰兒を接くるものは我を接くるなり、然れど我を信ずる此小さき子の一人を礙づかするものは、磨石を其頸に掛けられて海の深みに沈められん方猶ほ勝るべし。（馬太傳六七節）

『我を接けるとは誰が接けるんだ？　何處で接けるんだ？　わが名の爲めとは何の事だ、』と此意味が十分合點めかねて自問自答した。

『何故頸の周圍に磨石を附けるといふのだ。海の深みとは何のことだ。解らぬ、解らぬ、解らぬ、此意味が判然と解らぬ、』と云ひつゝ、是までも度々聖書を讀んで爰まで來ると、忽ち解らなくなつて厭になつたのを思ひ出した。で、段々と七節、八節、九節、十節と後を追つて、礙づきの條々から地獄の火に入るの罰や天に在ます父の顏を見る天の使の事やを讀み、『矛盾極まる、』と云つた。が、『だが、何か爰に眞理がありさうだテ、』と復た次を讀出した。

『夫れ人の子は亡びたるものを救はんが爲めに來れり。爾曹いかに思ふや、人若し百匹の羊を有たんに、其一匹迷はゞ九十九を山に置きて、迷ひし一つを尋ねに行かざる乎。若し尋ねて之に遇はゞ、我まことに爾曹に告げん、迷はざる九十九のものよりも尙ほ迷へる其一つを尋ねたるを喜ばん。——

此の如く憐むべき小さき子の一人の亡ぶるは天に在します我らの父の御心にあらざるなり。』

『正しく其通りに違ひない。人の一人たりとも亡びるのは神の志でない。然るに何事ぞ。千百の人間が現に監獄で日に〳〵亡びつゝあるのを如何ともする事が出來んのだ、』と云ひつゝ復た讀續けた。

『其時ペテロ來つてイエスに告げて曰く、主よ、我が兄弟の我に對して犯せる罪を幾度まで許すべき乎、七度まで乎。イエス曰く、七度までとは云はず、七度を七十倍したるまでも許せよ——

『例へば天國は臣下と共に會計を調べんとする王の如し。王は公金を私消したるものあるを發見し、王は其費消者を面前に曳來りて其私消したる千萬金を償へよと命じ、若し償ふ能はずんば其身は本より其妻孥に到るまで有らゆる所有品を賣りて償へと云ひたりしに、其費消者は王の前に俯伏して王を拜して曰く、臣は悉く償ふべし、唯願くば許し玉へと。王の心は動き、釋いて其負債までをも許したり。然るに其費消者は王に許されての歸途に、己れに一百の債務を負へる同僚に遇ひたれば、其咽喉を縊めて負債の金を償へと云ひ、同僚の友が跪伏して我を許し玉はゞ皆償ふべしと云ふをも諾かで其金を償ひ終るまで獄の中に入れたり。他の同僚の者之を見て悲みて王に訴へければ、王は渠を呼出して曰く、爾無道の者よ、我は爾の請に由て爾の負債を悉く免したれば我が爾を憐みし如く爾も亦爾の友を憐むべきにあらずや。』（同上二十一三十三）

『是だけの事か、』とネフリユードフは不意に高聲に云つた。が、心の奥で囁いてゐるは、『爾うとも、是だけの事だ！』

すると忽ち、精神生活を送つてゐる人達には誰にも屢々起り勝ちな事がネフリユードフの心中にも起つた。卽ち初めは唯だ不測で、矛盾で、隨分洒落同樣に思つてゐた考が、段々と世の中を經驗して見ると、極解り切つた單純な一番確かな眞實の道であるのが判然して來た。世の中の人間が現に苦みつゝある恐ろしい惡から人間を救はうといふ唯一の確實な方法は、先づ總ての人間が神の前には盡く罪人であるのを認め、等しく罪のある人間同士で互に罪を罰したり矯正したりする事は出來ぬと自覺する外無いのが判然して來た。到る處の監獄や罪人宿舍で目前に見た惡や、此惡を虛心平氣で警察吏や獄吏が行つてのけるといふは、畢竟自分が既に罪があるくせに他の罪を矯正さうとする出來もしない事を出來さうといふに原因してゐる事が歷然と解つて來た。一の不善人が他の不善人を矯正さうとして、機械的の方法で之が出來るやうに思つてゐる。其の結果たるや、貪婪無道の人間が他の罪人を所謂懲罰矯正する職務に從事し

て、己れら自身からして腐敗して、罪人を虐ぐると同時に益々罪人を腐らせて了ふ。漸つと今解つた。自分が親しく目擊した總ての無道が生じた所以、何とかして此弊害を勦滅して了はねばならぬといふ事がシミ〴〵解つたが、扨て怎うしたら宜からう乎。今迄此解答が怎うしても得られなかつたが、基督がペトロに答へた敎訓が此解答となりはすまいか。卽ち、神の前には何人も罪あらざるは無いから、何人も他人を罰したり矯正したりすることは出來ないので、人は如何なる時でも他人を免し、何度となく限りなきまでも、他人の罪を免すべきでは無からう乎。

『だが、確かに怎うと簡單に極めて了ふ事も出來ない、』とネフリユードフは考へた。が、初めには奇妙に思つても問題を解決するには理論上のみならず實際上にも亦怎うなければならないが確實に解つた。通例此の問題の解決の妨碍になるのは、『そんなら惡事を行つたものを如何する？ 刑にも處さないで放任して置くのか？』といふ疑問だが、這般な反問は最う迷ふがものは無い。若し刑罰が犯罪を減じ、或は罪人を改悛せしめた事が事實上に證明されるなら、此反問

も一理あるが、事實は正しく之に反對してをる。到底人が人を矯正すだけの力が無いなら、寧ろ無用有害にして殘忍無道なる行爲、卽ち刑罰を廢して了うが當然であるのは明々白々だ。數百年來罪人と認められたものが刑せられたが、併し罪人の種子は曾て盡きた事がある乎。否、盡きるどころか、監獄に入つて益々腐る罪人や、判事とか檢事とか警察官とか獄吏とかいふ法律公許の罪人が日に〴〵に害毒を蔓延らして愈々增加する。ネフリユードフは今や瞿然として悟つた。此社會及び一般の秩序が左も右くも平和に保たれてゐるのは、他人を裁判したり處罰したりする法律公許の罪人、卽ち裁判官や警察官や監獄吏のお庇でなくて、如何に彼等が社會を腐敗する勢力があつても、猶ほ人間は互に相憐み相愛する心があるからである——と、怎う氣が付いた。

で、此考の確認を聖書に求めやう爲めにネフリユードフは初めから讀出した。で、何時でもネフリユードフを感動する山の上の說敎の段になると、ネフリユードフは今日初めて氣が附いた。此說敎は單に美くしい抽象的の訓——多少大袈裟に誇張した出來得べからざる理想でな

くて、最も簡單明白なる實際の法律、若し之を實施すゝなら、(勿論實施する事が容易に出來る、)此社會の現狀を全く一變して新らしい無垢の淨土とし、ネフリユードフが之ほどまで憤慨した暴虐無道を根絶やして、人間に由て得らるべき最大幸福たる地上の天國が齎せられるのである。

其處には五條の法律があつた。

第一章(馬太傳五章二一—二六)は、人は同胞を殺すまじきのみならず、怒るまじき事、又決して愚物と侮どるまじき事。若し爭ふ事あらば神に供物を獻げて祈る前に先づ和らぐべき事。

第二章(馬太傳五章二七—三二)は、人は姦淫すまじきのみならず、女の美貌を見て心を動かす事すらなすまじく、且又一端夫婦とならば必ず其妻に無情かるまじき事。

第三章(馬太傳五章三三—三七)は、人は決して誓を立てまじき事。

第四章(馬太傳五章三八—四二)は、人は目にて目を償ふを求めまじきのみならず、右の頰を打つ時は左の頰を向け、他人の迫害を免し、謙下つて忍び、己れに求めらるゝ事は避けまじき事。

第五章(馬太傳五章四三—四八)は、人は敵を憎みて抵抗すまじきのみならず、敵を愛し敵を助け且敵の爲めに祈禱すべき事。

ネフリユードフは凝然とランプを凝視めつゝ靜座した。心は肅然と沈着いてゐた。倩々と我々が送る生活の奇怪極まる亂脈を憶廻らしつゝ、若し世の人が盡く此の聖書の訓ゆる掟を守つたなら、此社會が奈何變つて行くかといふ事が矍然と眼に見えるやうで、思設けない歡喜が心に充滿て來た。恰度長い間の苦勞艱難をした後、不意に安心と自由とを見付けたやうな心持がした。

此晩は到頭徹宵眠らないで、聖書を讀む人には屢々有り勝ちな今迄雲煙過眼した言葉の意味が初めて合點めたやうな氣がして、丁度海綿が水を吸込むやうな鹽梅に、是等の肝腎な大切な喜ばしい默示を十分に肺腑に浸込ました。尤も聖書の此訓は是までも度々讀んで能く知つてゐたが、唯身に浸みた事も無く、心底から信ずる氣にもなれなかつたのが、初めて十分に理解つて、此の神の掟だに守らば、人として望み得べき最高の惠を受くる事が出來るばかりでなく、

人は皆此掟を嚴守すべき唯一の義務を持つてゐて、此義務を完全に行ふ處に人生の眞意義がある事が身に浸みもしたし且信ずるやうにもなつた。であるから、苟くも此掟に些かだも背けば神の罰は忽ち來るといふ事が身に染み〴〵と解つて來た。之が卽ち神の訓の全幅の精神のある處で、此事は最も明白に同じ馬太傳の葡萄作りの比喩に說明されてゐる。

此の葡萄作りの農夫は、自分が主人から葡萄圃を預かつてゐるのを忘れて了つて自分の所有だと思ひ、收獲は一切自分の好き自由になると信じてゐたから、主人から使が來たり主人の子が來たりすると殺して了つたのだ。

『我々も此の葡萄作りと同じ事をやつてゐる、』とネフリユードフは考へた。『畢竟人間は自分の生涯を自分のものだと思ひ、神から預かつてゐるのを忘れて、好き勝手な生涯を送つて可なるものと思つてゐる。之が抑もの大なる誤りである。我々は或る者の旨を受けて或る目的の爲めに此の世に生れたのである。であるから我々は唯だ自分一個の快樂の爲めにのみ生活するのが大間違ひで、丁度葡萄圃を我が物と心得て、主人の命令を聞かぬ農夫同樣覿面の報が來るのは

當然である。神の御心は實に此五戒の中に宿つてゐる。人が若し此五戒を守つて背かなかつたなら、天國は地に建てられ、人間は人間として求め得べき最善最樂の域に入ることが出來るのだ。——

『天國と神の正義とを求めよ、總てのものは隨つて得らるべし。——我々は其道に由らないで總てのものを求めやうとするから終に得られないのだ。——

『之だ、之だ、之が我が生涯の務めだ。之で先づ一と仕事だけ濟ましたが、之からが復た別の仕事だ。』

全く新らしい生活が其夜からネフリユードフに明け初めた。唯だ新らしい生活の狀態に入つたといふばかりでなくて、其夜から後の事々物々は今までと全く違つた新らしい意義を持つたからである。

ネフリユードフの此の新らしい生活が怎ういふ風に終るだらうといふ事は唯だ今後の歲月が

證するであらう。

（一八九九年十二月十二日莫斯科に於て）

大尾

大正九年五月十日印刷
大正九年五月十五日發行

復活奥附
全二册 正價金四圓八十錢

著作者 内田巽
東京市麹町區平河町五丁目二番地

發行者 金尾種次郎
東京市神田區西小川町二丁目六番地

印刷者 宮田藤六
東京市神田區西小川町二丁目六番地

印刷所 大成社

著作權所有

發兌元
東京市麹町區平河町五丁目二番地
金尾文淵堂
電話特長九段一〇八五番
四九段二九一番
振替東京三八一七番

93
297

終